(財)高知県文化財団　埋蔵文化財センター調査報告書第14集

金　地　遺　跡　Ⅱ

ー土佐精機新工場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー

１９９４年３月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

金　地　遺　跡　Ⅱ

ー土佐精機新工場建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書ー

１９９４年３月

(財)高知県文化財団埋蔵文化財センター

序

今日、我々の生活には周辺の多くのものと関わりを持って成り立っています。各々の個体としての存在には時間的な物差しの違いがありますが、形や質を変化させる経緯は我々の歴史の中に残されています。一瞬の内にその存在を終えてしまうものであっても、それは連綿と続く軸の中の一部でありましょう。

我々が携わる埋蔵文化財には、人々が刻一刻と変化する環境の中で対応してきた痕跡が残されています。それらは慎重に扱えば扱うほどより多くの情報をもたらしてくれます。“何故、ここにこうして存在するのか”“ここから何処へ行くのか”必然性の上に成り立つことを解き明かしてくれると考えます。

本報告書で提供できる情報は極く限られたものです。有志の方々の一助となれば幸いです。最後に、調査に際してご協力を頂いた南国市在住の方々・㈱スズエ製作所・南国市教育委員会に厚く御礼申し上げます。

1994年3月

財団法人高知県文化財団
埋蔵文化財センター所長　**小　橋　一　民**

例　　言

1．本書は、㈱スズエ製作所関連会社 土佐精機新工場建設に伴う「金地遺跡」の発掘調査報告書である。調査は1992年と1993年に実施されており、1990年刊行の調査報告書『金地遺跡』に続くものとして『金地遺跡Ⅱ』との書名を冠する。

2．金地遺跡は、高知県南国市金地北籠西824-1に所在し、1990年度に㈱スズエ製作所 現工場建設に際して発掘調査が実施されている。

3．調査面積は、1,583㎡である。(内訳は92年度に1,088㎡、93年度495㎡である。)
調査期間は、本調査が1992年６月22日から同年８月15日までと1993年５月12日から６月11日までである。尚、南国市による試掘調査は1992年５月12日から同年５月18日まで行われている。

4．発掘調査は、㈶高知県文化財団 埋蔵文化財センターが㈱スズエ製作所の委託を受けて実施した。発掘業務は、森田尚宏(埋蔵文化財センター調査第二係長)の指導のもとに藤方正治(同調査員)が担当し、事務は三浦康寛(同主幹)が行った。

5．本書の執筆・編集は藤方正治が行った。
又、調査時に以下の諸氏の協力を得た、紙面を借りて厚くお礼を述べたい。
出原恵三（埋蔵文化財センター主任調査員)、吉成承三（同調査員)
近森泰子（同調査員)、山崎正明(同調査員)

6．現場作業では以下の諸氏の協力を得た。
小松木義、小松浜子、島井博志、島井澄子、島井周子、永田美津子、吉川　勉、吉川　競
井上速男、井上郁雄、小松栄一、小松　好、森本幸栄、百田　進、石川康人
紙面を借りて厚くお礼申し上げる。
整理作業では以下の諸氏の協力を得た。
松木富子、小松経子、中西純子、宮本幸子、川井由香、内村富紀、山中美代子、山本裕美子、矢野　雅、竹村延子
紙面を借りて厚くお礼申し上げる。

7．出土遺物及び調査資料は高知県立埋蔵文化財センターに於て保管している。尚、遺物についての注記は、1992年度調査に於ける出土遺物に92-14NKを用い、1993年度調査に於ける

出土遺物には93-5NKを用いた。

8．遺構の名称については、1992年度と1993年度の調査を同一の調査区と考えて通し番号を用いる。

報告書要約

1．**遺 跡 名**　金地遺跡　遺跡番号 040169
2．**所 在 地**　南国市金地北籠西824-1
3．**立　　地**　更新世形成の隆起扇状地端部の段丘崖下。
4．**種　　類**　集落（弥生時代後期末～古墳時代初頭、鎌倉時代）
5．**調査主体**　㈶高知県文化財団　埋蔵文化財センター
6．**調査契機**　土佐精機工場新設に伴う
7．**調査期間**　平成４年６月22日～８月15日・平成５年５月12日～6月11日
8．**調査面積**　1,573㎡
9．**検出遺構**　竪穴住居４棟、掘立柱建物３棟、土坑５基、溝５条
10．**出土遺物**　弥生後期末～古墳時代初頭の甕、壺、鉢、石製品、鉄製品、土師器、瓦質土器
11．**内容要約**　長岡台地上やその周辺に分布する弥生後期末から古墳時代初頭にかけての集落遺跡の一つである。母村的な規模は持たないが、４棟検出された竪穴住居からの出土遺物は弥生後期末の土器群が主で、遺物の残存状況は良好であった。

本文目次

page

Ⅰ　環境　1

Ⅱ　調査に至る経過　5

Ⅲ　調査経過と方法　6

Ⅳ　調査の成果　9

1　基本層準 …… 9

2　遺構と遺物 …… 9

3　まとめ …… 39

fig. 目　次

title　　page

fig. 1：周辺の主な遺跡 …… 2
fig. 2：調査区位置図 …… 5
fig. 3：遺構全体図 …… 7
fig. 4：南北セクション図・東西セクション図 …… 10
fig. 5：ST1　平面図・セクション図 …… 11
fig. 6：ST1　出土遺物実測図（その1） …… 12
fig. 7：ST1　出土遺物実測図（その2） …… 13
fig. 8：ST2　平面図・セクション図 …… 14
fig. 9：ST2　出土遺物実測図（その1） …… 15
fig. 10：ST2　出土遺物実測図（その2） …… 16
fig. 11：ST2　出土遺物実測図（その3） …… 17
fig. 12：ST2　出土遺物実測図（その4） …… 18
fig. 13：ST3　平面図・セクション図 …… 19
fig. 14：ST3　出土遺物実測図（その1） …… 20
fig. 15：ST3　出土遺物実測図（その2） …… 21
fig. 16：ST3　出土遺物実測図（その3） …… 22
fig. 17：ST3　出土遺物実測図（その4） …… 23
fig. 18：ST3　出土遺物実測図（その5） …… 24
fig. 19：ST3　出土遺物実測図（その6） …… 25
fig. 20：ST3　出土遺物実測図（その7） …… 26
fig. 21：ST3　出土遺物実測図（その8） …… 27
fig. 22：ST3　出土遺物実測図（その9） …… 28
fig. 23：ST4　平面図・セクション図 …… 29
fig. 24：ST4　出土遺物実測図（その1） …… 30
fig. 25：ST4　出土遺物実測図（その2） …… 31
fig. 26：SB1　平面図・エレベーション図 …… 32
fig. 27：SB2　平面図・エレベーション図 …… 33
fig. 28：SB3　平面図・エレベーション図 …… 34
fig. 29：SK1～SK5　平面図・セクション図・エレベーション図 …… 36
fig. 30：SD1～SD5　エレベーション図 …… 37
fig. 31：包含層出土遺物実測図 …… 38

写真図版目次

	title	section
pl. 1 ：	SD1　半截状況（北半）	A-1
	SD1　半截状況（南半）	B-1
pl. 2 ：	ST1　検出状況	A-1
	ST1　半截状況	B-1
pl. 3 ：	ST2　北側セクション	A-1
	ST2　南北セクション	B-1
pl. 4 ：	ST1・ST2　完掘状況	A-1
	SB1　完掘状況	B-1
pl. 5 ：	SB2・SB3　検出状況	A-1
	SB2・SB3　完掘状況	B-1
pl. 6 ：	ST3　検出状況	A-1
	ST3　遺物出土状況	B-1
pl. 7 ：	ST3　床面出土状況	A-1
	ST4　床面出土状況	B-1
pl. 8 ：	ST4　中央部セクション	A-1
	調査区東半　完掘状況	B-1
pl. 9 ：	調査区南東部　遺構検出状況	A-1
	同　　完掘状況	B-1
pl.10：	ST1・ST2　遺物出土状況、 (2・6・10・20・34・40・44・49)	
pl.11：	ST2・ST3　遺物出土状況、 (51・70・72・136・138・158・161・163)	
pl.12：	ST4　遺物出土状況・調査風景、 (165・172・173・175・179・180・184)	
pl.13：	ST1・ST2　出土遺物、 (1・2・3・5・7・8・9・10・29・30)	
pl.14：	2・ST3　出土遺物、 (31・32・33・34・35・36・37・38・78・79)	
pl.15：	ST3　出土遺物 (80・81・82・83・84・85・86・87・88・89)	

pl.16：ST3　出土遺物

(90・91・92・93・94・95・96・97・98・104)

pl.17：ST2・ST3　出土遺物

(107・164・165・166・167・168・169・170・172・173)

pl.18：ST1～ST3　出土遺物

(20・23・64・146・147・148・150・156・157・159)

pl.19：ST1・ST2　出土遺物

(16・25・40・42・49・51・52・54)

pl.20：ST2・ST3　出土遺物

(55・61・99・100・101・102・108・109)

pl.21：ST3・ST4　出土遺物

(110・114・115・116・117・142・158・175)

pl.22：ST2～ST4　出土遺物

(176・177・63・149・151・68・128・129)

pl.23：ST3　出土遺物

(131・132・133・134・135・136・137・138・152)

pl.24：ST3　出土遺物

(119・120・121・122・123・125・126・127)

pl.25：ST3・ST4　出土遺物

(153・174・160・139・143・154・155)

Ⅰ　環　　境

1．地理的環境

現在の香長平野周辺には段丘状または台地状を呈して、更新世後期に形成されたと考えられる地形の名残りが見られる。これらは旧物部川によって上流域からもたらされた河成堆積物によって形成されている。ヴィルム氷期に於ける海水面の低下は旧河道である平坦面を一部に残しながら下刻を進行させて行った。ヴィルム氷期の最盛期は約２万年前であり、約１万2000年前からは温暖化に転ずる。後氷期に於ける海水面の上昇により海岸線の進行が始まり、溺れ谷などの地形が形成される。後氷期の温暖化は一様でなく、それに従い海岸線も進退を繰り返しながら進行を進めたものと考えられる。場所によっては海側の地形や沿岸部分の海流、海水による侵食作用の影響を受け平野部の形成はやや遅れる。平野部の形成は外海からある程度遮断された内海的な地形の部分で発達する。運搬能力のある河川は直接外海に注ぎ込む場合を除き、内海的な部分では堆積作用を卓越させる。沿岸近くの海流によって開口部が絶えず遮られるものの、これによって発達した浜堤や砂嘴によって内陸側には潟湖が形成される。

長岡台地は山田面と呼ばれる土佐山田町街域の平坦部から南西に向かって緩やかな傾斜を保ち、南国市岡豊町小籠附近で沖積地下に沈み込む。台地北側は国分川水系による明瞭な段丘崖が形成されており、南側では物部川河道による段丘崖が形成されている。台地の南側には物部川により扇状地地形が形成されている。この扇状地は傾斜が緩やかで土佐山田町小田島を扇頂部として扇端部は南国市里改田附近に至る円弧状に形成されている。香長平野の大部分を占める物部川河成堆積物による平野部は上述の様に外海の影響の比較的少ない部分を中心に沖積地の形成が進行していったものと考えられる。

土佐湾に注ぎ込んだ河川運搬物は沿岸流の影響を受け、沖積地の発達を阻まれる。物部川は河口附近でこの流れにより形成された西から延びる浜堤によって前面を遮られ、河口は東偏する。やがて浜堤の北側には潟湖が広がり、氣水域では内水面的環境が形成されたものと考えられる。

金地遺跡の主体は長岡台地の南に拡がる完新世形成の扇状地に位置し、今回の調査区も段丘崖下の北東部から帯状に続く平坦面上である。台地の形成時期に比べて新しい部分であるが、調査区内では台地上部に恒常的に見られる表土（黒ボク）と遺構検出面下には扇状地形成時の砂礫層を確認することができる。段丘崖下は夏期襲来する台風による南東方向の暴風を除けば、冬期北西方向の季節風を遮る、居住環境であったと考えられる。

参考文献

『南国市史』1979年　南国市史編纂委員会

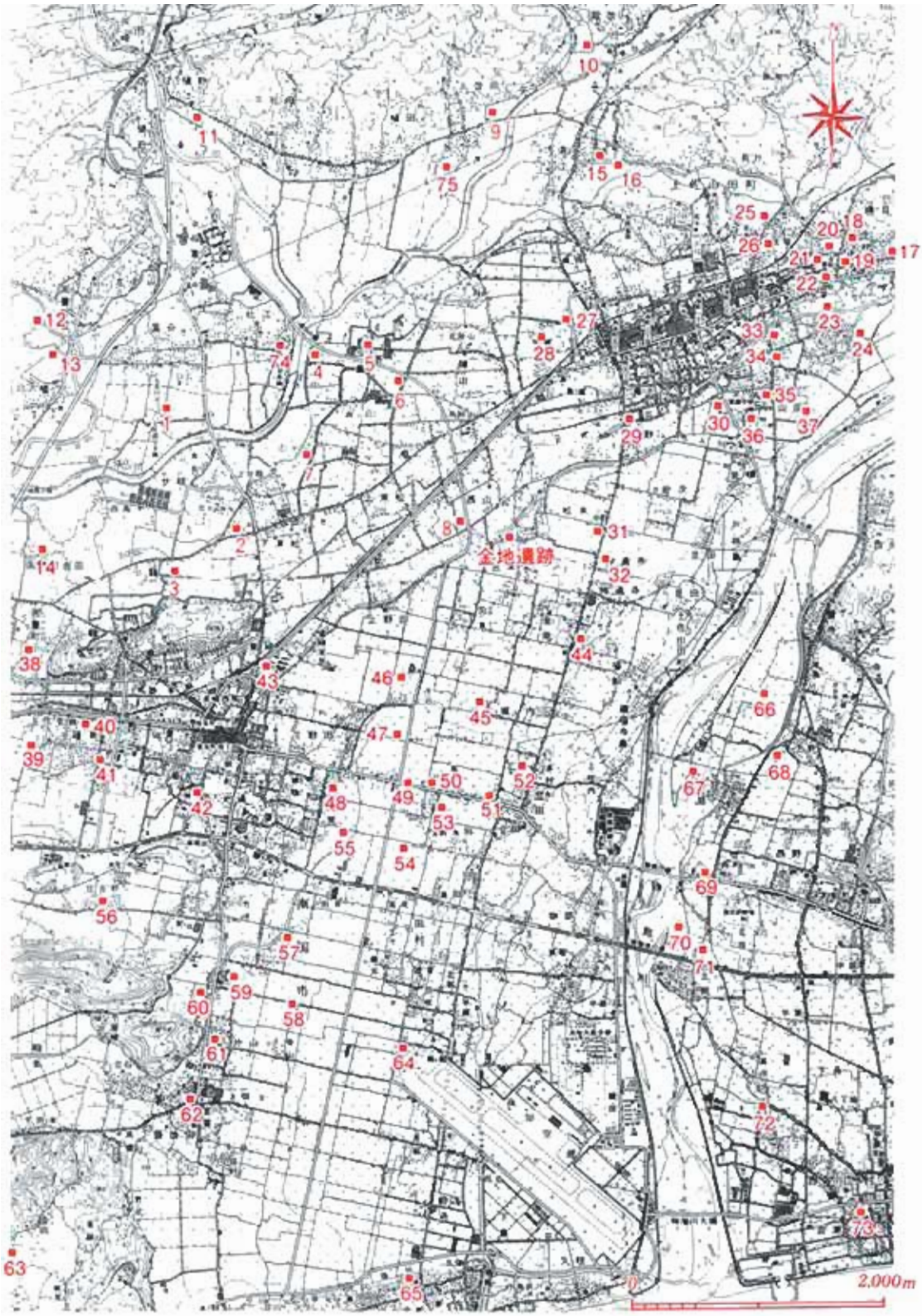


fig. 1　周辺の主な遺跡

周辺の主な遺跡

No.	遺跡名	時代	No.	遺跡名	時代
1	土佐国府跡	弥生～中世	39	北野寄遺跡	弥生～平安
2	後藤丸遺跡	弥生～近世	40	若宮ノ東遺跡	弥生～中世
3	士島田遺跡	弥生～近世	41	北泉遺跡	弥生～平安
4	渕ノ上遺跡	弥生～平安	42	大篠遺跡	弥生
5	三畠遺跡	弥生～平安	43	東崎遺跡	弥生～中世
6	水通遺跡	弥生～平安	44	若宮遺跡	弥生～平安
7	三添遺跡	弥生～近世	45	石神遺跡	弥生～平安
8	野村丸遺跡	弥生～平安	46	ムカロ内遺跡	弥生～中世
9	東山田遺跡	弥生・古墳	47	横落遺跡	弥生～平安
10	南ヶ内遺跡	弥生・古墳	48	ヌメル遺跡	弥生～平安
11	堂屋敷遺跡	弥生・平安～中世	49	表中内遺跡	弥生～平安
12	西村遺跡	弥生～平安	50	平杭遺跡	弥生・古墳
13	西久保遺跡	弥生～平安	51	寺ノ前遺跡	弥生～中世
14	吉田土居遺跡	弥生～近世	52	北角田遺跡	弥生～平安
15	植カドタ遺跡	弥生・古墳	53	高添遺跡	弥生～平安
16	西クレドリ遺跡	弥生～近世	54	修理田遺跡	弥生～平安
17	田所神社遺跡	弥生～中世	55	渕ヶ上遺跡	弥生～平安
18	ひびのき大河内遺跡	弥生～近世	56	乱戸遺跡	弥生～平安
19	ひびのき遺跡	弥生・古墳	57	関町田遺跡	弥生
20	ひびのき岡の神母遺跡	弥生～中世	58	鹿枝遺跡	弥生～平安
21	ひびのきサウジ遺跡	弥生～近世	59	岡の上組遺跡	弥生～中世
22	大塚遺跡	弥生～近世	60	西ノ芝遺跡	弥生～中世
23	楠目遺跡	弥生～近世	61	中組遺跡	弥生～中世
24	稲荷前遺跡	弥生～近世	62	里改田遺跡	弥生～中世
25	メウカイ遺跡	弥生～中世	63	大北遺跡	弥生～平安
26	伏原遺跡	弥生～平安	64	田村遺跡群	縄文～近世
27	山田三ツ又東遺跡	弥生～近世	65	中屋敷遺跡	弥生
28	山田三ツ又遺跡	縄文～近世	66	深淵北遺跡	弥生～中世
29	黒土遺跡	弥生	67	深淵遺跡	縄文～近世
30	クロアイ遺跡	弥生～中世	68	西上野遺跡	弥生
31	神通寺遺跡	弥生～平安	69	西野遺跡群	弥生・古墳・平安
32	宮後遺跡	弥生～平安	70	下ノ坪遺跡	弥生～中世
33	古町北遺跡	弥生・古墳	71	北地遺跡	弥生
34	古町西遺跡	弥生～平安	72	野口遺跡	弥生～中世
35	原遺跡	弥生～近世	73	浜口遺跡	弥生・古墳
36	原南遺跡	弥生～近世	74	比江廃寺跡	弥生・白鳳・奈良
37	高柳遺跡	弥生～中世	75	久次遺跡	弥生～中世
38	小籠遺跡	弥生～近世		**金地遺跡**	**弥生・平安・中世**

2．歴史的環境

1）弥生時代、金地遺跡の南約4㎞には弥生時代を通じての母村的集落である田村遺跡群が存在している。前期初頭の竪穴住居、掘立柱建物、土坑、土壙などや前期中葉の水田址、環濠などが検出されている。この遺跡は弥生中期に最盛期を迎え、中期末を中心に竪穴住居、掘立柱建物、土坑、溝などが検出されている。田村遺跡群は先述のとおり物部川形成の扇状地末端に存在しており、新たに形成された土地に対する改変と前面に広がる潟湖を背景として集落経営を行っていたものと考えられる。

金地遺跡の南西2㎞には東崎遺跡群が存在する。竪穴住居跡、掘立柱建物跡、土坑、土壙が確認されており、周辺に関連する遺跡を含めてここは弥生後期後半から古墳時代初頭にかけての母村的集落であると考えられる。この東崎遺跡に代表される様に弥生後期後半以降長岡台地周辺では遺跡数の増加が認められ、その反面これまでの拠点集落であった田村遺跡群ではこの時期の遺構が見受けられなくなる。

同時期の母村的性格を持つ遺跡としてはひびのき遺跡群が金地遺跡の北東約3㎞に存在する。ここは弥生時代後期末から古墳時代初頭にかけて高知県中央部に見られるヒビノキ式土器の出土する標識遺跡である。竪穴住居跡棟、土坑基が検出されており、周辺の関連する遺跡群（楠目遺跡、楠目中学校校庭遺跡、ひびのきサウジ遺跡等）や現扇状地上に立地する原遺跡、原南遺跡を含めこの時期を中心とした遺跡の広がりがみとめられる。

金地遺跡の北西約2㎞には中期末から後期に掛けての集落遺跡である三畠遺跡が存在している。この遺跡は長岡台地の北側国分川形成の沖積地上に立地しており、対岸の比江廃寺塔跡から出土した弥生遺物とは時期的に共通する。

また、金地遺跡からの北約4㎞の国分川上流、新改川形成の扇状地上には久次遺跡が存在している。周辺地域では古墳時代後期には古墳群が形成されており、弥生後期から古墳時代の住居跡が調査によって確認されている。

このように長岡台地縁辺部に立地する弥生後期を中心とした遺跡は最近の調査から明らかにされつつあるが、台地上の人為的な改変が何時頃始まったのか、明確な資料は示されていない。

2）古代、遺跡域は香美郡下石村郷に属し、周辺には条里遺構が残されている。中世に掛けての遺跡としては長岡台地を挟んで北側の国衙推定域が存在し、国分寺遺跡、比江廃寺塔跡等で調査がすすめられており、政庁本体は検出されていないものの国府域を構成したと考えられる掘立柱建物跡等が検出されている。また、南部に存在する田村遺跡群では田村庄に関わる掘立柱建物跡が検出されおり、土佐守護代の細川氏の居城である田村城館も存在する。

Ⅱ　調査に至る経過

1．1992年度調査に至る経緯

金地遺跡は行政区としては南国市に含まれ、市域の東部に位置している。遺跡域は既に弥生時代から中世に亘る遺物包蔵地であり、1990年３月５日から３月31日まで今回の調査区に隣接する場所で南国市教育委員会の主体による発掘調査が行われている。この調査では弥生時代後期の竪穴住居跡２棟、土坑４基、溝２条、その他柱穴群が確認されている。今回の調査でも同様な成果が期待できることから、1992年５月12日から同月18日まで南国市教育委員会による調査区内の試掘調査が行われた。この調査は効率の良い発掘調査をおこなうために調査区内における土壌堆積状況と遺構の分布状況を確認することを目的としたものであり、幅２ｍの東西トレンチ３本と南北トレンチ３本を設定して行われた。この結果、調査区の東部及び南部を中心に弥生時代後期の遺物包含層が確認され、中央部分で竪穴住居跡１棟が検出された。

以上の経緯に基づき ㈱スズエ製作所は、関連会社である ㈲土佐精機新工場建設に伴い発掘調査を ㈶高知県文化財団 埋蔵文化財センターに業務委託して行うことに成った。

2．1993年度調査に至る経緯

本発掘調査は前年度調査区と1990年実施の調査区に挟まれた部分であり、上記新工場建設に於ける設計変更に伴い急遽実施されることとなった。前回及び前々回の調査と同様な成果が期待できることから、㈱スズエ製作所は建設を担当する小松建設を含めた協議の結果、前回同様発掘調査を ㈶高知県文化財団 埋蔵文化財センターに業務委託して行うことに成った。

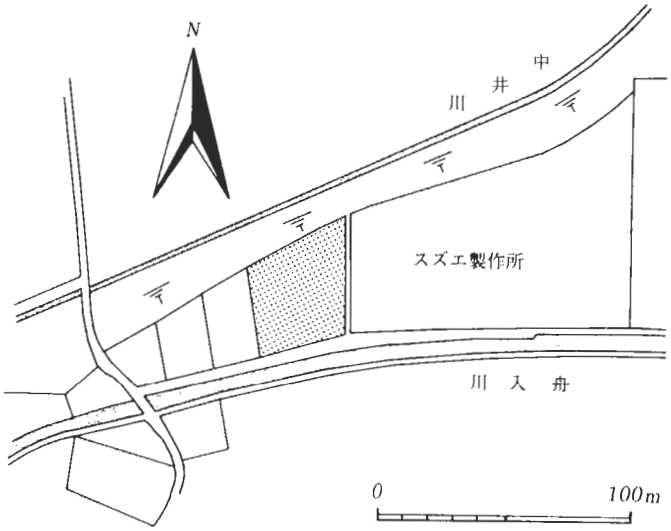


fig. 2　調査区位置図

Ⅲ　調査経過と方法

1．1992年度の調査

本調査は1992年６月22日から同年８月15日迄行われた。調査区域が狭いために、一カ月前に行われた南国市教育委員会による試掘調査の結果を元に、調査区域の北西部でただ１つ検出された溝状遺構を他の部分に先行して調査し、この部分の下層を確認した後、排土置き場として利用して行くことで調査を進めていった。調査区には南部を中心として旧耕作土上に砕石による盛り土が存在しており、これを重機によって除去し、旧耕作土、黒褐色土無遺物層と下層へ向けて順次掘削を行った。各時代の遺構は鬼界カルデラ噴出の火山灰を含む腐植土である黒色土に掘り込まれており、遺構検出は本来黒色土層中で可能である。但し、遺構埋土と検出面である黒色土は非常に近似しており、調査時には止むを得ず耕作土下約50㎝の茶褐色土層の上面で行った。遺構内出土と考えられる遺物が検出面より上位に存在する箇所がみられることから、検出方法に於ける今後の課題としておきたい。

茶褐色土上面で行った遺構検出作業の結果先述の溝状遺構の他に、調査区の北部に１間×２間の掘立柱建物跡（SB1）、中央部で一辺が4.5mの竪穴住居跡（ST1）、南東部で柱穴、土坑群を検出した。調査区中央南には幅３ｍ、長さ４ｍ程度の平面規模を持った攪乱土坑が存在していたが、この下層には一辺5.5ｍの規模を持つ弥生後期の竪穴住居跡（ST2）が比較的良好に検出された。

調査時期は丁度梅雨期と重なったために、雨上がりには遺構内に雨水と共に黒色土粒子が遺構内に流れ込み埋積したり、雨水により冠水することがしばしば見られた。

2．1993年調査

先述したように調査区は1990年調査区と1992年調査区によって挟まれた部分であり、東西は幅は10ｍ、南北30ｍの細長い地域である。前年の調査区同様表土下60㎝に存在する茶褐色土上面を遺構検出面として調査を進めた。調査区の北部には部分的ではあるが竪穴住居跡1棟（ST4）が存在し、中央部では一辺５ｍの隅丸長方形を呈する竪穴住居跡1棟（ST3）が検出された。

調査区の北部には重機によると考えられる攪乱が数カ所存在しており、そのうち規模の大きなものは長さ６ｍ、幅５ｍを測るものが存在していた。

3．グリッド

調査区内に於けるグリッドは、４ｍ×４ｍを１単位として1990年の調査グリッドに基き設定した。グリッド杭の名称は新たに調査区の北東部分に起点を置きここをA-０と定め、西方向へアルファベット順、南方向へ数字を用いた。

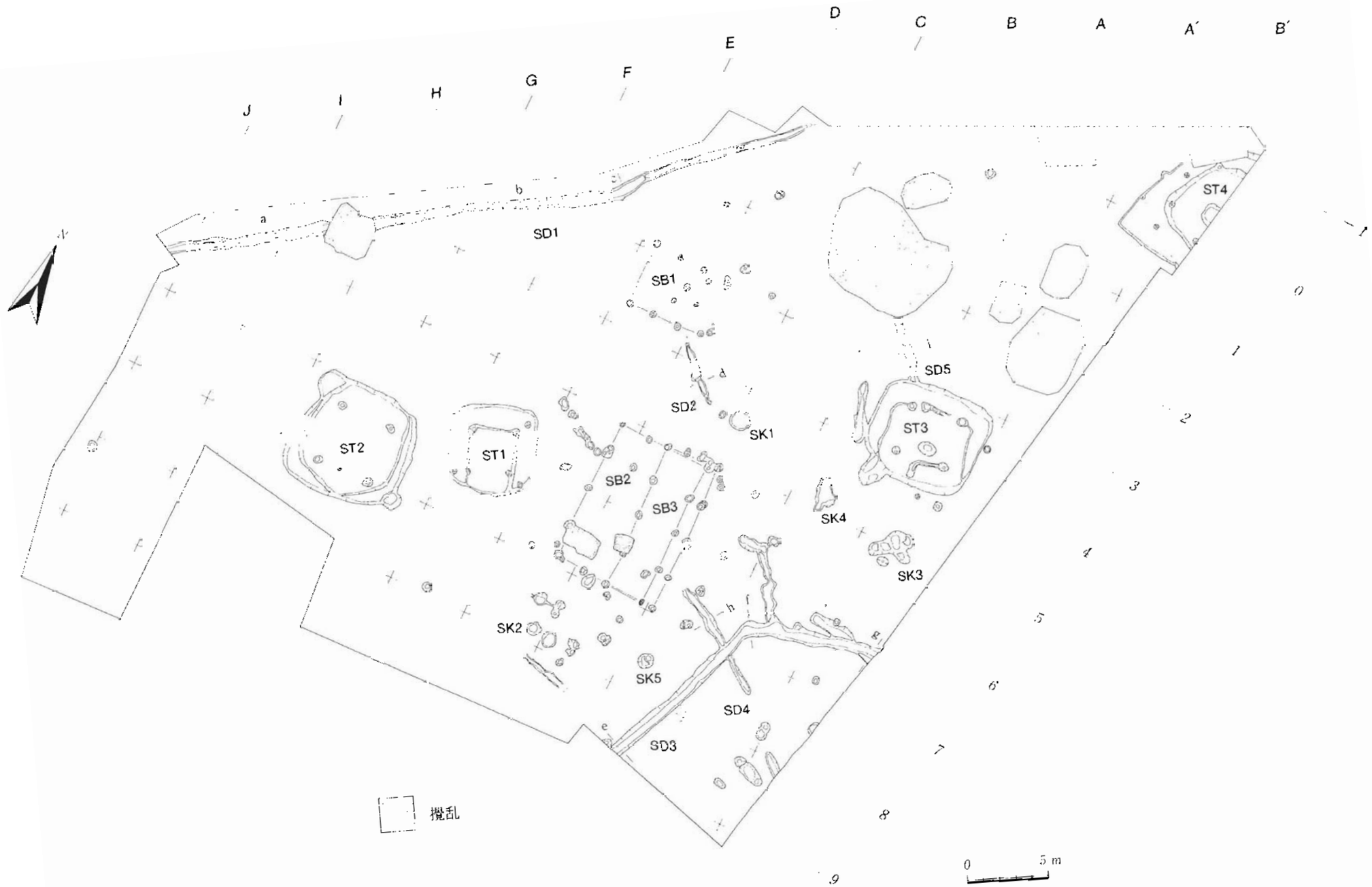

J
I
H
G
F
E
D
C
B
A
A′
B′
SD1
SB1
SD2
SK1
SD5
ST4
ST3
ST2
ST1
SB2
SB3
SK4
SK3
SK2
SK5
SD4
SD3
撹乱
0
5 m

fig. 3　遺構全体図

Ⅳ　調査の成果

1．基本層準（fig. 4）

1992年の調査に先立って行われた南国市教育委員会による試掘調査に於て調査区域の堆積状況が明らかである。掲載の土層断面図は調査区の東部に設定された南北方向のトレンチ東壁セクション図と調査区の北部に設定された東西方向のトレンチ北壁セクション図である。

Ⅰ層：表土及び盛土

調査区の東側を中心にして旧耕作土が存在する。また、調査区の南側及び東側には砕石による盛土部分が存在している。

Ⅱ層：暗灰褐色粘質土層

色調は暗灰褐色又は暗灰色であり、黒ボクが多く混入する。SD1などの調査区で検出された比較的新しい遺構埋土と共通すると考えられる。

Ⅲ層：黒色粘質土層

調査時には黒色土で使用する。一般に黒ボクとして使用する場合が多い。弥生後期の住居址埋土はこの土と考えられるが、遺構内出土遺物が本層に及ぶものが存在することから、幾つかの生活面が本層内に存在する可能性がある。調査区の北東部分ではⅢ層の堆積が厚く、中位にはアカホヤの二次堆積も見られる。

Ⅲ層下には遺構検出面と成った茶褐色粘質土(Ⅳ層)が存在し、更にこの下層には黄褐色砂礫層(Ⅴ層)が見られる。Ⅳ層はⅤ層の上位に恒常的に見られるが、部分的に厚く堆積している。各遺構はⅣ層の薄い箇所に多く存在する傾向が認められる。

2．遺構と遺物

(1)　竪穴住居

ST1（fig. 5）

調査区中央部に位置する。先述したように検出面は河成の堆積層である黄褐色砂礫層の直上に存在する茶褐色土層である。本来はその上部に存在する黒色土層の中位から遺構は掘り込まれたものと考えられるが、遺構埋土も同様な黒色土であり識別がし難く下層で行わざるを得なかった。但し、遺構に伴うと考えられる遺物の出土は検出面より高く、ST1は黒色土層の中位から掘込まれた可能性が強い。遺構埋土は黒色土であり、遺構中央部を中心に20㎝～30㎝大の砂岩円礫と弥生後期土器破片を多量に出土した。平面形態は隅円方形を呈し、南側がやや膨らむ。主軸方向は南北方向であり、*N-18°-W*である。規模は南北４ｍ45㎝、東西４ｍ24㎝を測る。南側を除く各辺に幅70㎝～１ｍ10㎝の高床部が存在している。検出面からの深さは中央床面で22㎝～30㎝であり、高床部では８㎝～14㎝を測る。高床部は西側の一部で地山削り出し

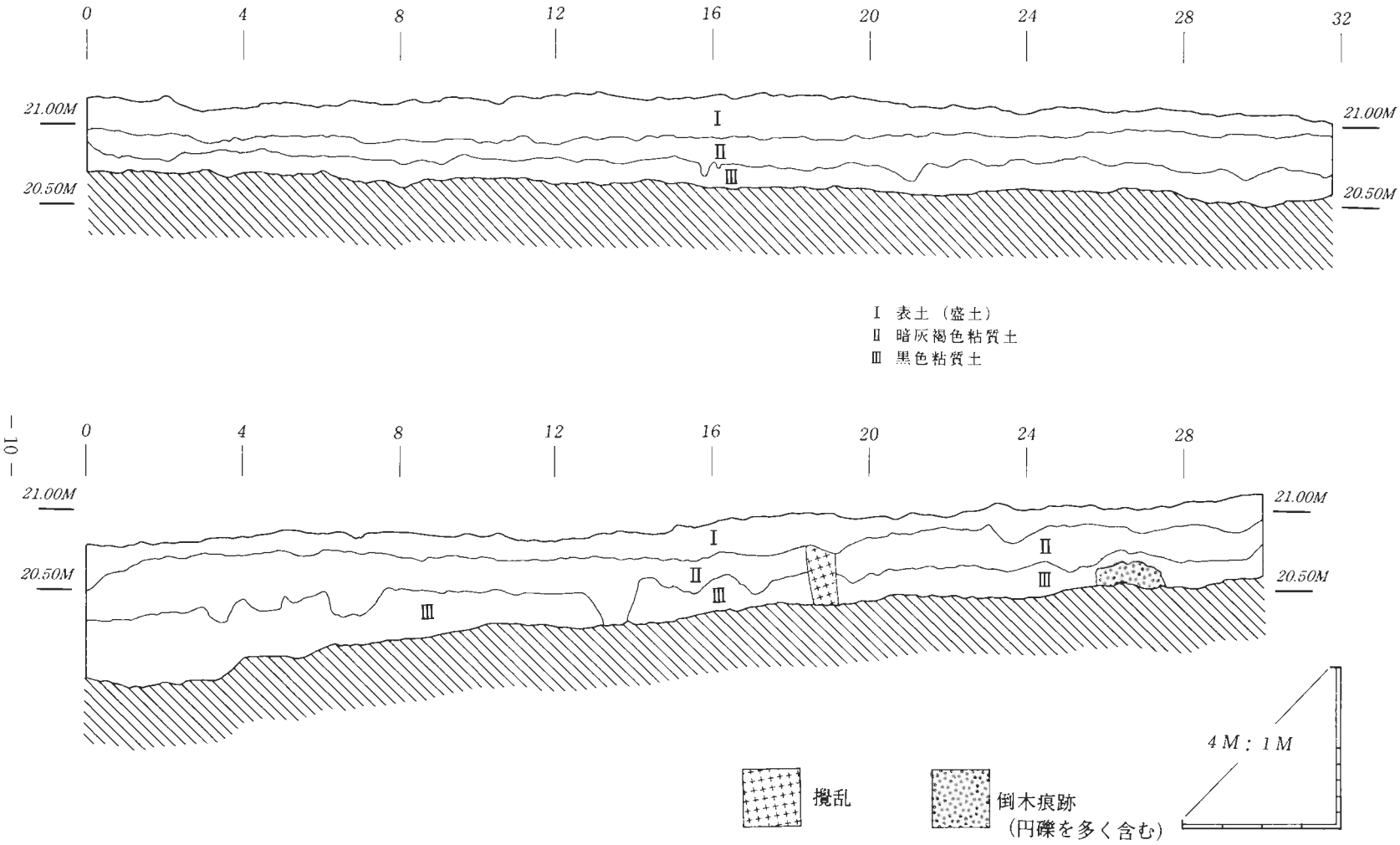


fig. 4　南北セクション図(上)・東西セクション図(下)

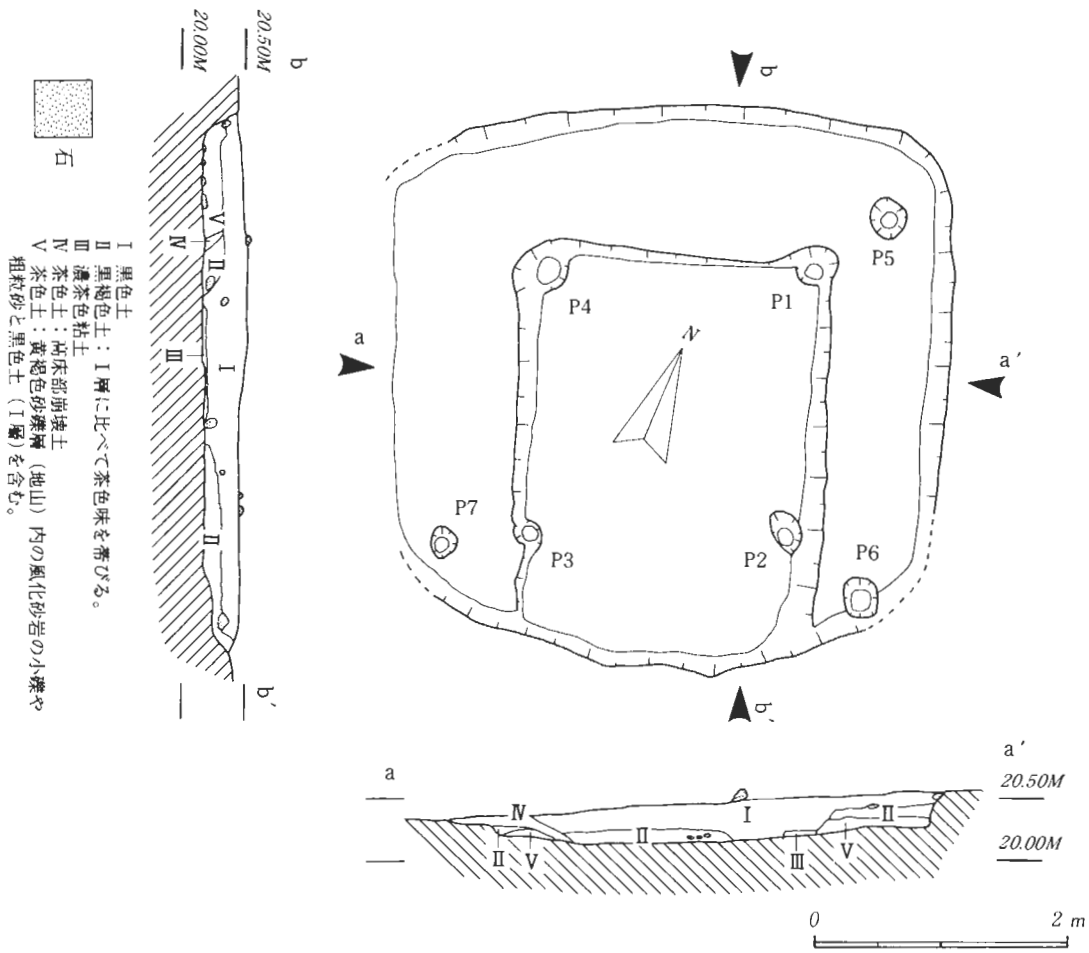


fig. 5　ST1　平面図・セクション図

により形成され、他の部分では盛土により形成されている。この形成土は明茶褐色粗砂と砂岩小礫を含む茶色土である。ST1の上屋構造に伴うと考えられる柱穴は住居内に７個存在している。高床部と中央床面の境に存在する４個の柱穴は直径又は長径が20㎝～39㎝の規模を持つ円形乃至は楕円形を呈し、中央床面からの深さは11㎝～29㎝を測る。高床部で存在したものは３個であり、北西部分にも存在した可能性がある。直径20㎝～26㎝の規模を持った円形を呈し、床面から５㎝～９㎝の深さを測り、浅い皿状を成す。(ST1柱穴計測表参照)　住居内では炉跡や壁溝は検出されなかった。また、遺構外にST1に伴う遺構の存在は確認できない。

ST1からの出土遺物は破片を含めて1,208点であり、口縁部形態から器種を明確にし得るものは84点である。出土遺物で図示可能なものは１～27である。１～10は鉢である。この中には小容量のものがあり、体部が内湾する碗形を呈するもの(１～５)、体部がやや内湾するもの(９,10)、体部が直線的に立ち上がるもの(７,９)が見られる。６は体部が内湾するもので大容量ののものである。11は手捏ね成形による。12は小形の鉢底部と考えられ、突出した平坦面を持

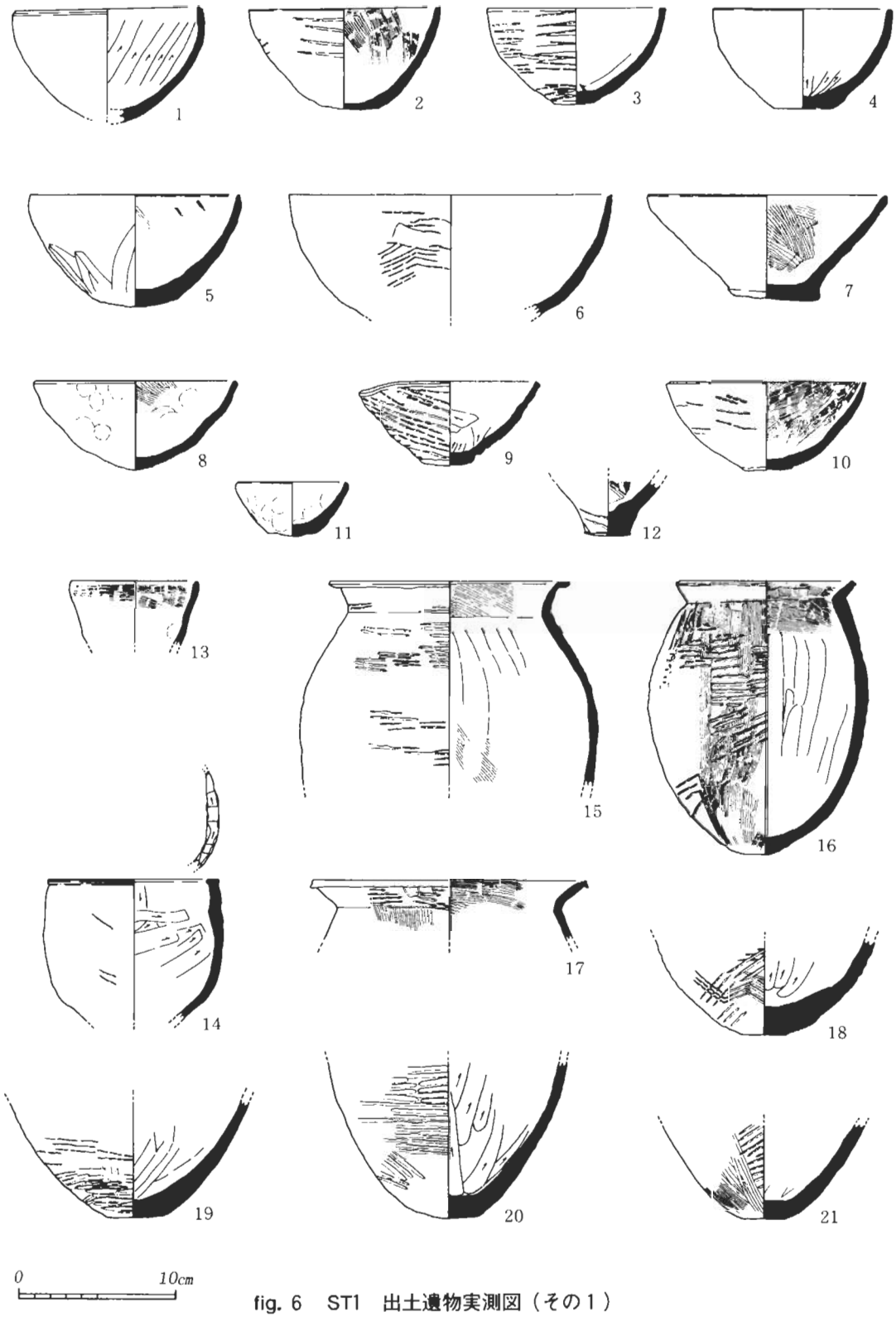


fig. 6　ST1　出土遺物実測図（その１）

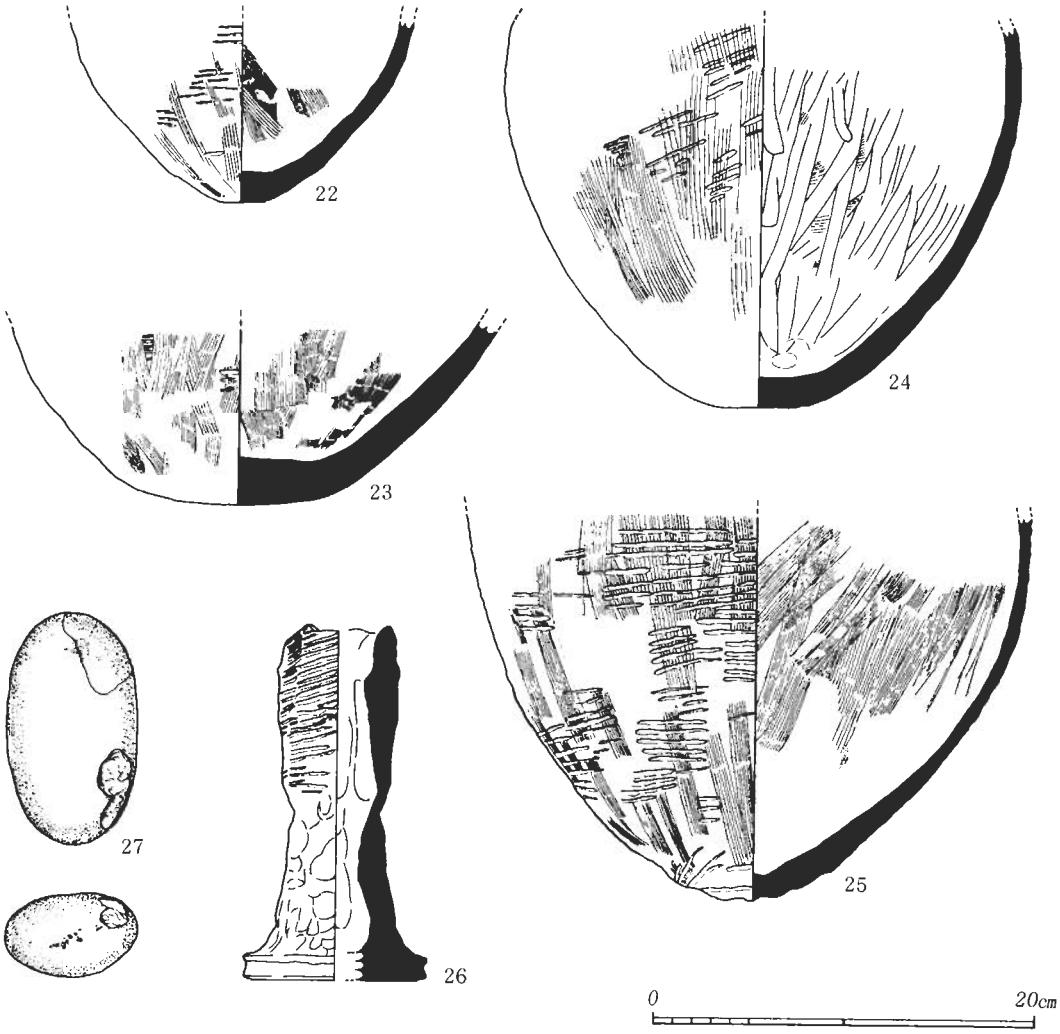
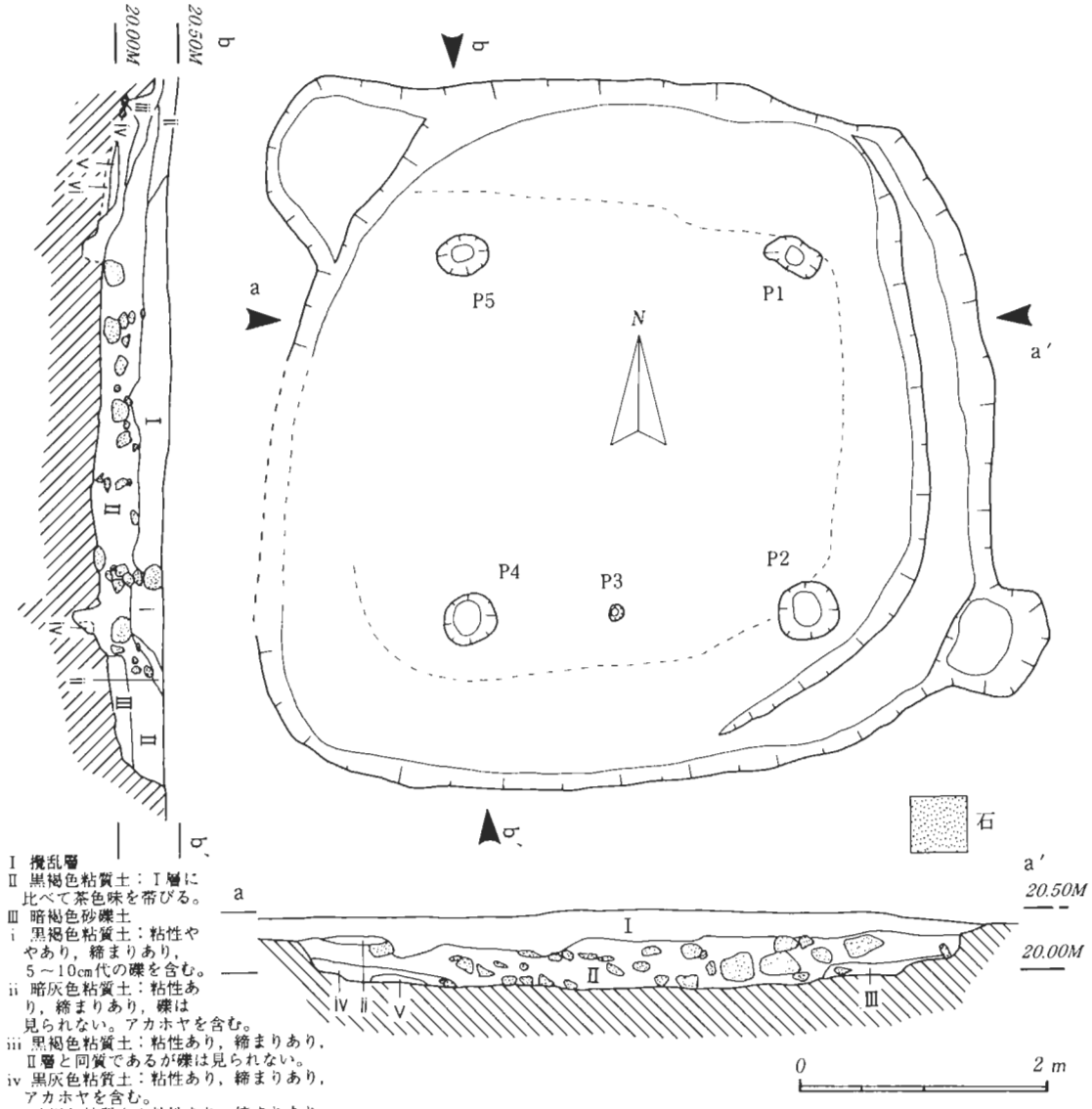


fig. 7　ST1　出土遺物実測図（その２）

つ。13は小型の壺口縁部か。14は甕成形段階の途中で口縁部を施したものか。15～21は甕である。この内18～21は甕の底部であり、狭い平底を成す。22～25は壺又は甕の底部と考えられる。26は支脚である。欠損部分が多いが口縁部は傾斜を持ち支部と成るものか。27は敲石か擦り石と考えられる。部分的にベンガラと考えられる朱が付着する。遺物の出土状況は１，４，12,24は床面直上から、６，７，９，10はベッド上から、20は壁際から出土している。



I 攪乱層
II 黒褐色粘質土：I層に比べて茶色味を帯びる。
III 暗褐色砂礫土
i 黒褐色粘質土：粘性ややあり，締まりあり，5～10cm代の礫を含む。
ii 暗灰色粘質土：粘性あり，締まりあり，礫は見られない。アカホヤを含む。
iii 黒褐色粘質土：粘性あり，締まりあり，II層と同質であるが礫は見られない。
iv 黒灰色粘質土：粘性あり，締まりあり，アカホヤを含む。
v 暗褐色粘質土：粘性あり，締まりあり，礫は見られない。
vi 明褐色土：地山に相当する。

fig. 8　ST2　平面図・セクション図

ST2（fig. 8）

調査区の中央部西寄りに存在する。検出時点では遺構の中央部に攪乱坑が存在し、辛うじて壁際部分が残された状態であった。平面形態は隅円方形を呈する。この攪乱は幸い住居址の床面までは至らず西壁の一部を破壊していたに過ぎない。規模は東西５ｍ80cm、南北５ｍ70cmを測る。住居の北西側隅角部に幅１ｍ10cm～１ｍ70cm、長さ１ｍの張り出し部分が存在し、南東側には幅96cm、長さ64cmの規模を持つ掘り込みが存在する。何れも新旧関係を認められないことから前者は出入口、後者は貯蔵坑的なもので住居に伴うものと考えられる。北東側から南側に掛けて地山削り出しによる三日月状の段部が存在している。西側を除く床面上には壁際から幅80cmから１ｍで盛土による高床部分が存在するが、構成土層の固結は弱い。検出面からの深

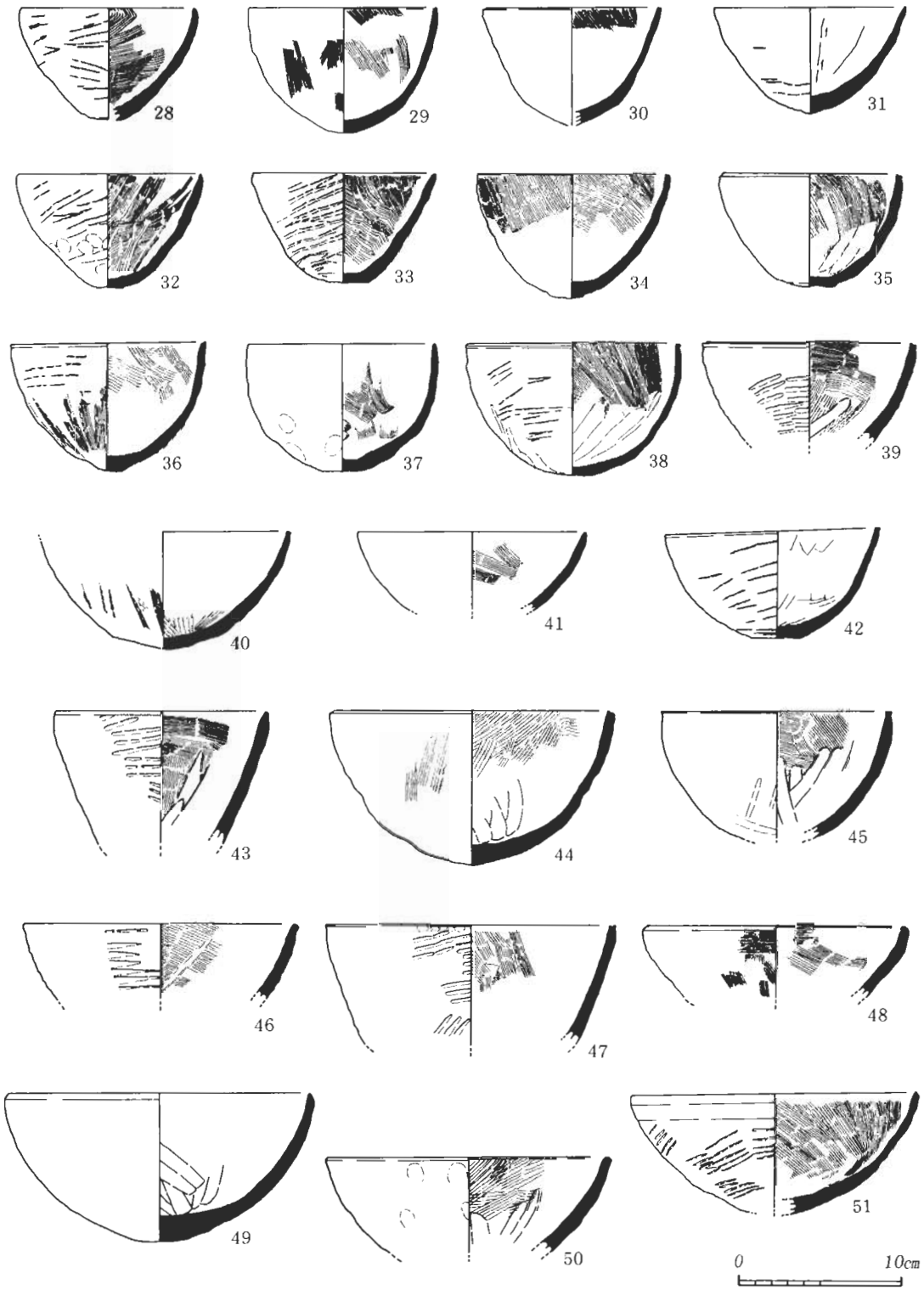
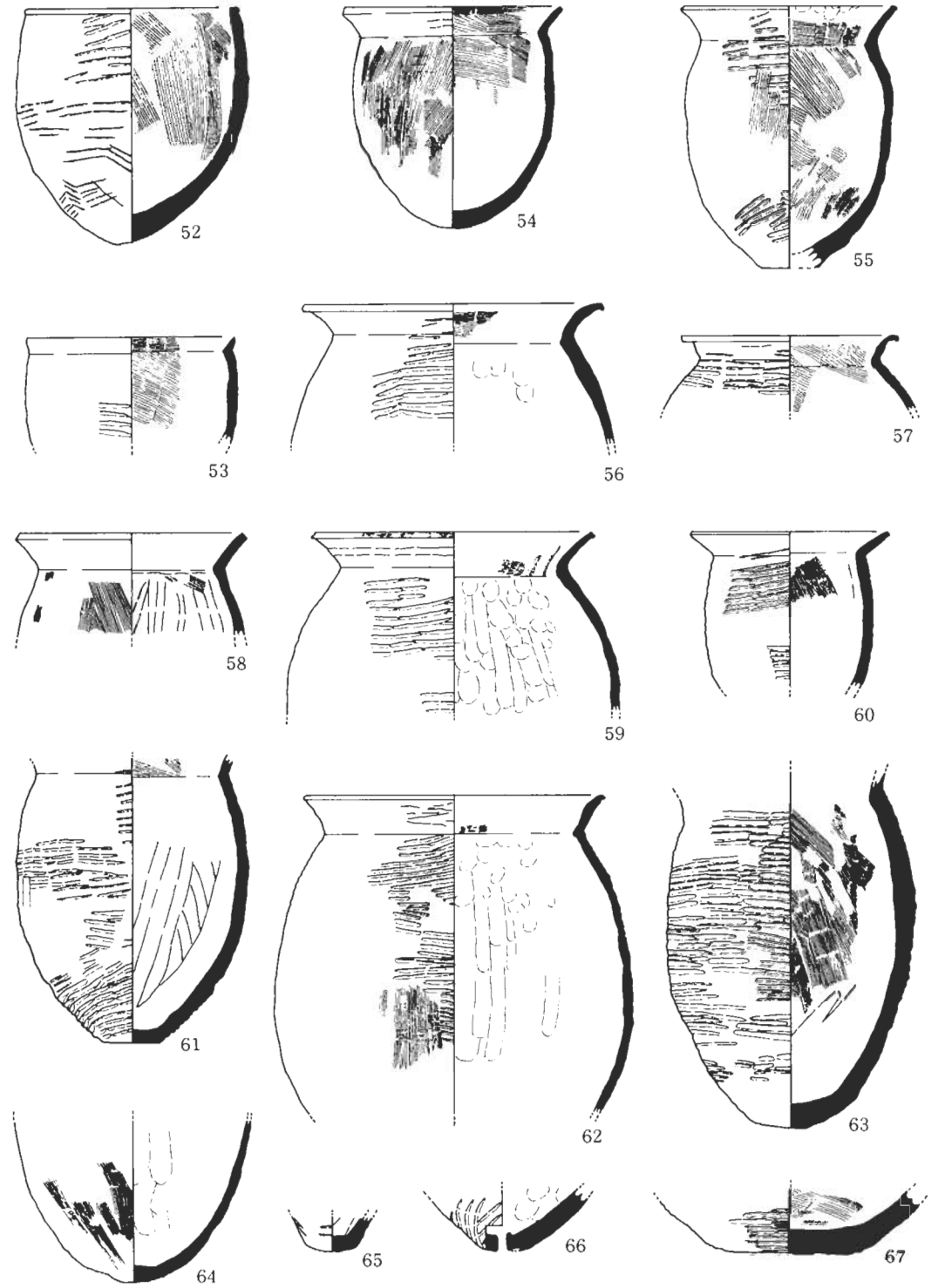


fig. 9　ST2　出土遺物実測図（その１）



0 10cm

fig. 10　ST2　出土遺物実測図（その２）

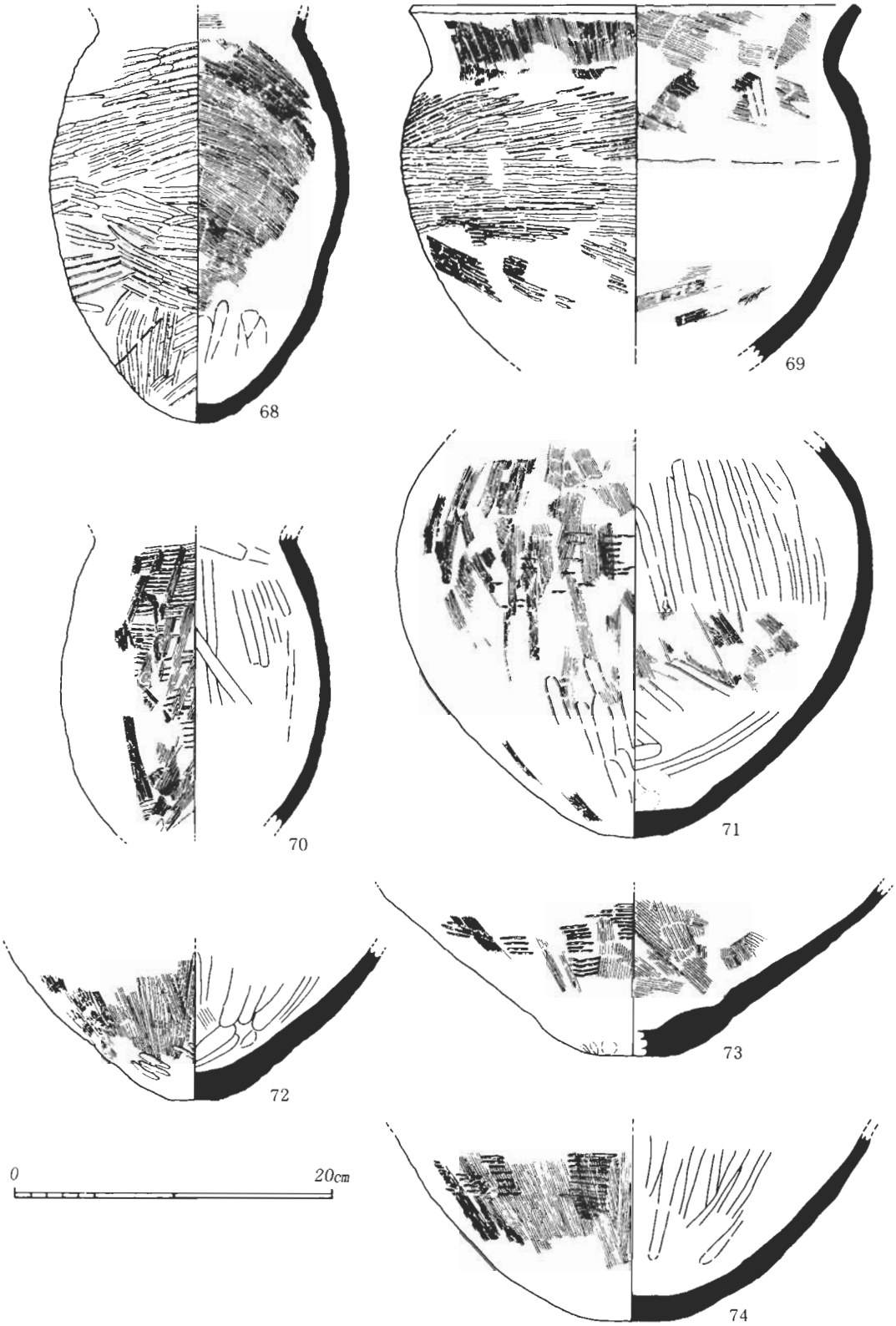


fig. 11　ST2　出土遺物実測図（その３）

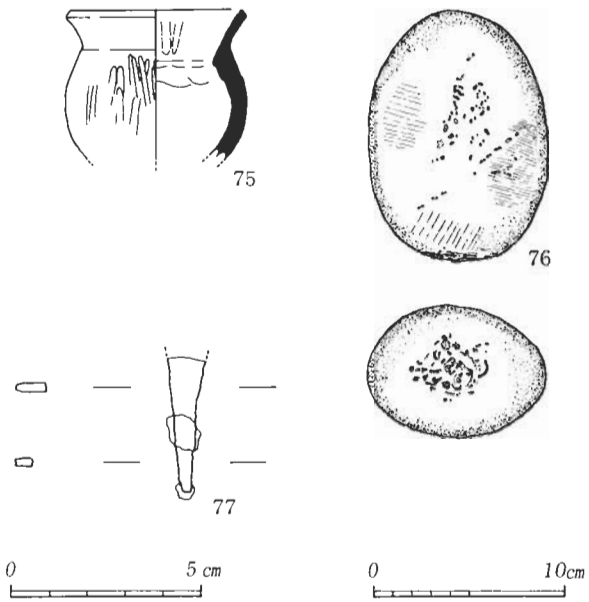


fig. 12　ST2　出土遺物実測図（その４）

さは中央床面で60㎝、北西側張り出し部では20㎝、南東側の掘り込み部分では60㎝、北側から南側に至る三日月状の段部では26㎝を測る。遺構埋土は主に黒褐色土であるが先述したように住居址の上部は攪乱を受けおり、状況は摑めない。床面直上を中心にして弥生後期土器片と10㎝～30㎝大の円礫が多量に出土している。拳大以上の円礫の出土は北部と中央部に集中している。床面には柱穴が５個検出されており、この内４個については上屋構造に伴うものと考えられる。規模は25㎝～49㎝の円形又は楕円形を呈し、床面からの深さは27㎝～53㎝を測る。(ST2柱穴計測表参照)　その他炉跡や住居に伴う付属構造物は存在を認めなかった。

ST2からの出土遺物は破片を含めて1,200点であり、口縁部形態から器種が特定できるものは163点である。出土遺物の中で図示可能なものは28～77である。28～53は鉢である。鉢には容量の小さなものがあり、この中で体部が内湾して立ち上がるもの(28～32,34～39)、体部がやや内湾して立ち上がるもの(40～42,45,46,48～51)、体部が直線的に立ち上がるもの(33,43)が存在している。比較的容量の大きな鉢には体部が内湾するもの(44)と体部が直線的に立ち上がるもの(47)がみられる。また、52は甕の成形段階の途中で口縁部を施したものであり、53は短い口縁部が付き坩形を呈する。54～64,67～70は甕である。69は大きく開いた口頸部を持つもので胴部の最大径は上位に存在する。65は甕または鉢の底部と考えられ突出した面を成す。66は甑の底部である。71～74は壺の胴・底部と考えられ、外面はタタキ目を丁寧に刷毛で消す。75は小形の壺であり、篦磨きを施す。76は敲石または擦り石と考えられ、一部にベンガラを留める。77は、鉄鏃の茎部である。

遺物の出土状況は38,42,43,45,47,51,52,54,56,57,60,61,62,63,70,73,74は床面直上から、29,55はベッド上から、36は北側の張り出し部から、30,34,35,50,59は壁際から、31～33の鉢はST2の付属施設と考えられる南東側の張り出し部分から出土したものである。

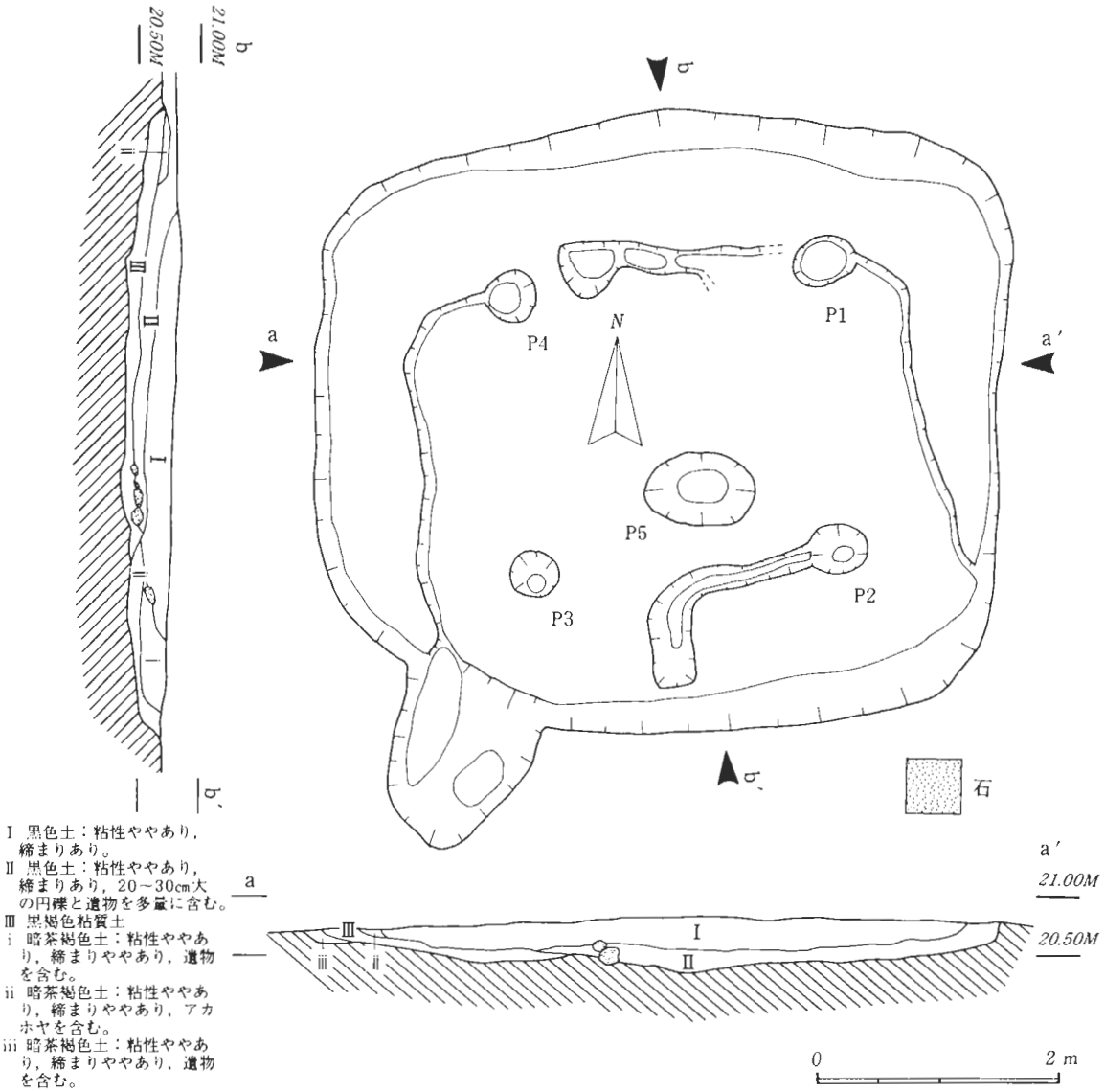


fig. 13　ST3　平面図・セクション図

ST3（fig.13）

調査区の東部中央に位置する。南東部分を攪乱により一部破壊されている。茶褐色土層（Ⅳ層）上面で検出を行ったが、遺物の出土はこれよりもかなり上位から見られた。平面形態は南辺と北辺が外側に膨らみを持つ隅円方形を呈し、規模は南北５ｍ、東西５ｍ60cmを測る。南側を除く各辺に幅67cm～81cmの高床部が存在する。これは主に黒褐色土による盛土で形成されており、埋土である黒色土に較べて固結が強い。但し、北側の高床部は存在が不明確であり、地山が緩い傾斜を成して削り出され、床面との境界と考えられる部分に住居内溝が存在していた。遺構埋土は大きく３層に分かれており、第Ⅱ層である黒色土には多量の土器片と人頭大の河原石が

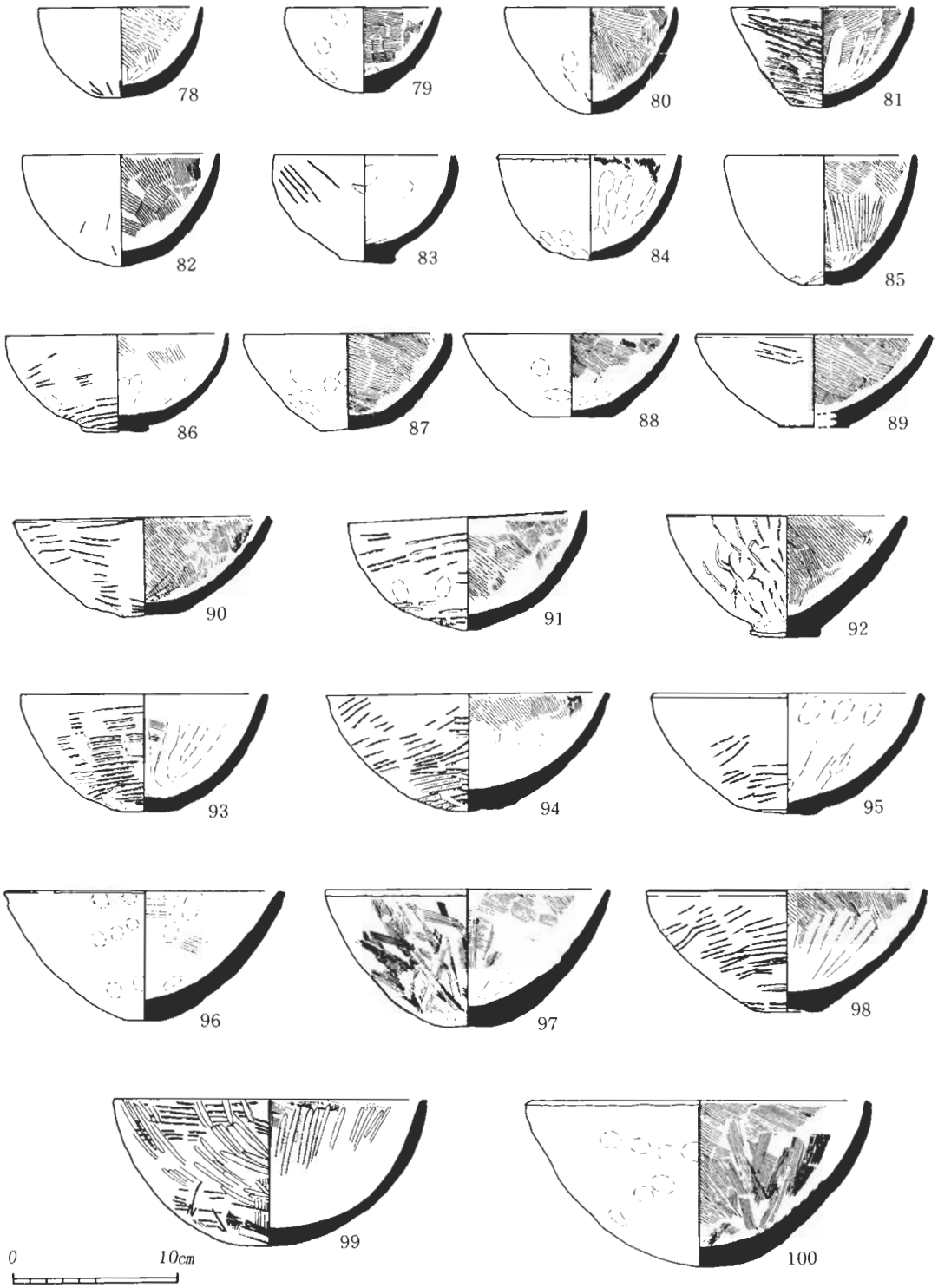


fig. 14　ST3　出土遺物実測図（その１）

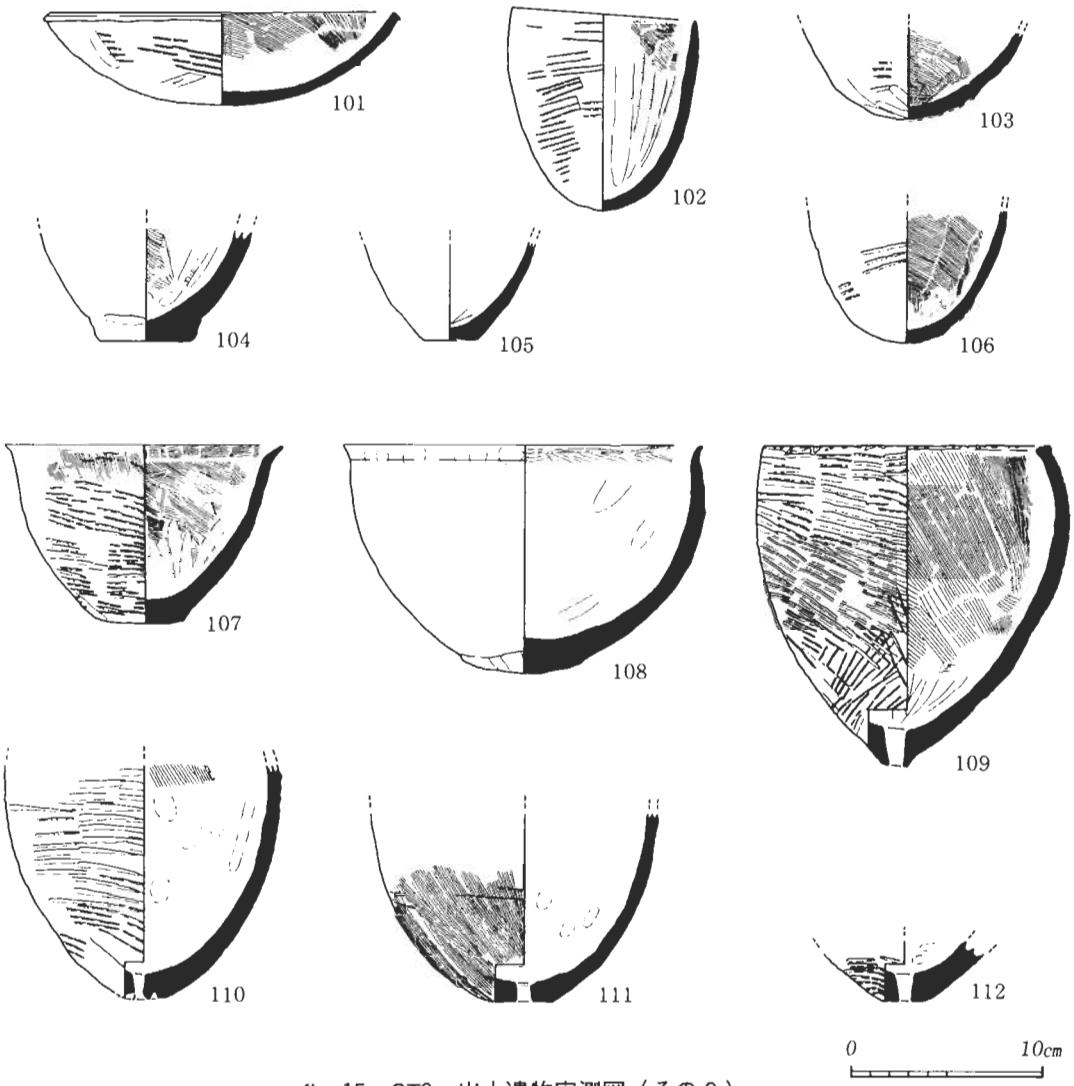


fig. 15　ST3　出土遺物実測図（その２）

含まれていた。第Ⅲ層の床面直上からは完形に近い土器が出土しており、炭化木の痕跡をとどめるものやアカホヤの堆積塊が見られた。検出面からの深さは中央床面までが37㎝、高床部が20㎝～34㎝である。床面の中央部やや南寄りに中央穴が存在する。平面形態は楕円形を呈し、長径92㎝、短径62㎝、床面からの深さ10㎝を測る。ここからは焼土や炭化物の出土は見られない。住居内溝は先述した北部のものと南部のＬ字状に屈曲するものとが存在する。規模は前者が幅18㎝～40㎝、床面からの深さ15㎝を測り、後者が幅14㎝～30㎝、床面からの深さ５㎝を測る。主柱穴は４個が存在している。平面形態は楕円形を呈し、規模は長径が42㎝～55㎝、床面からの深さは25㎝～40㎝を測る。（ST3柱穴計測表参照）　床面の直上中央穴の北西側40㎝には

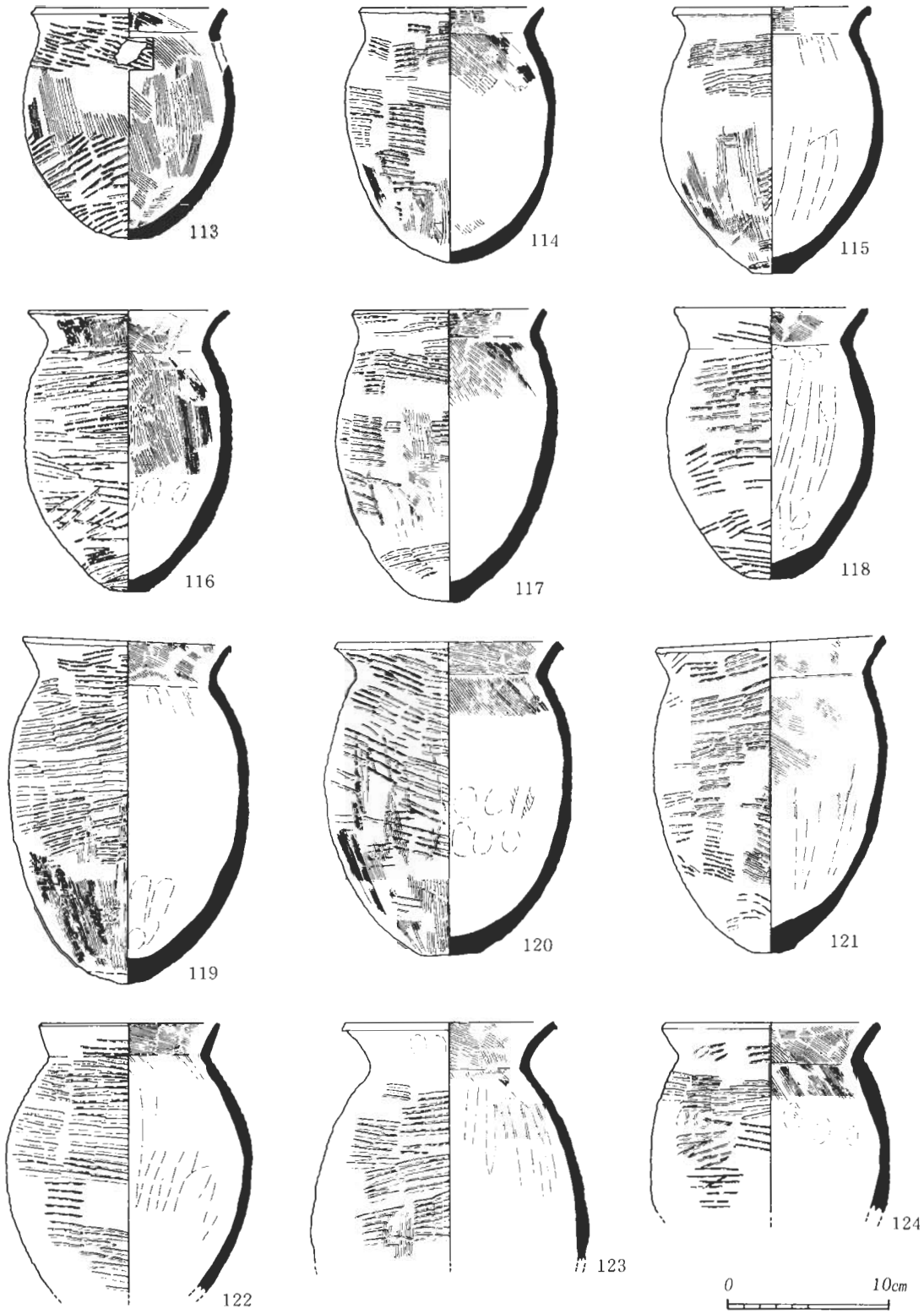


fig. 16　ST3　出土遺物実測図（その３）

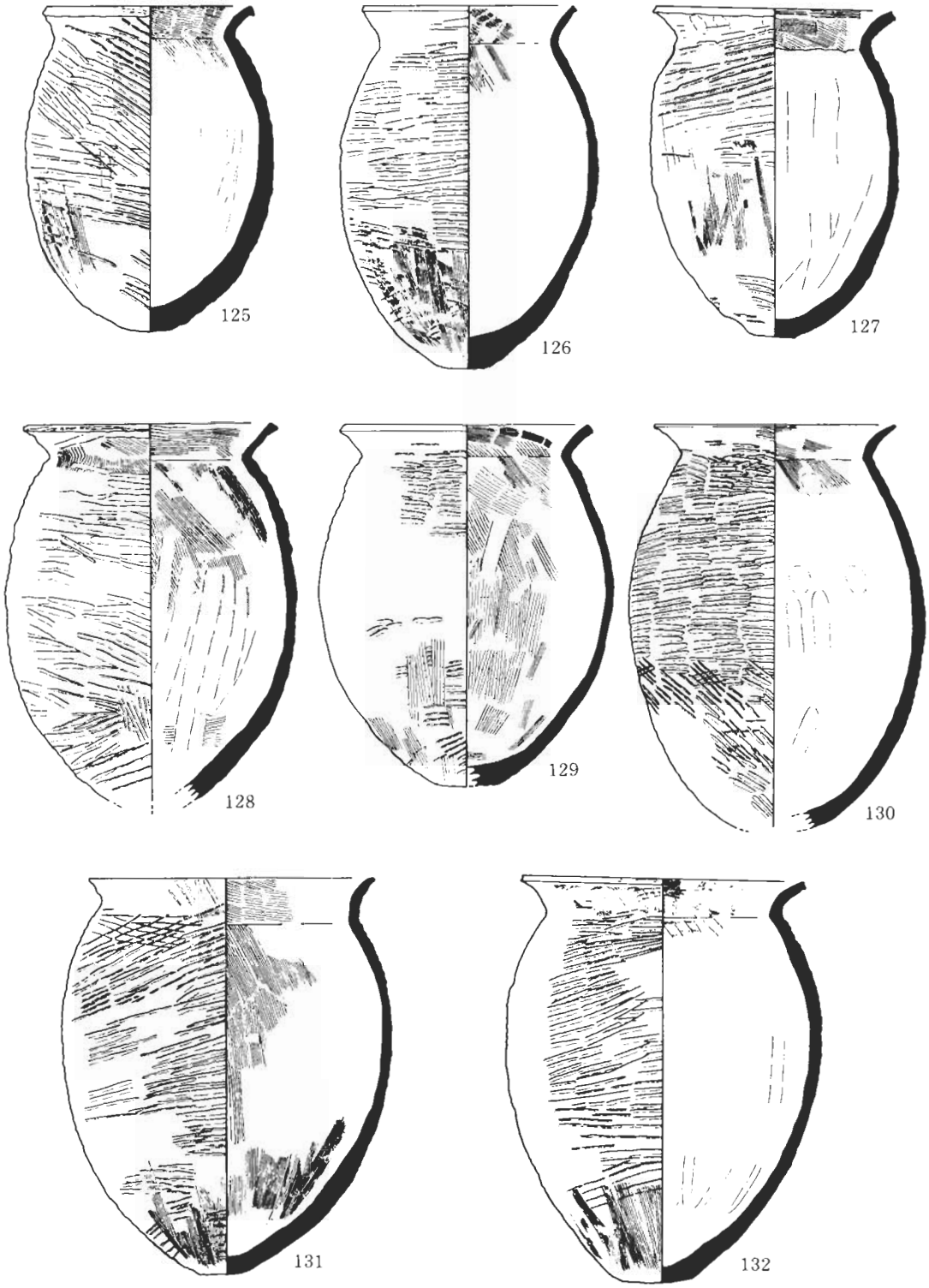


fig. 17　ST3　出土遺物実測図（その４）

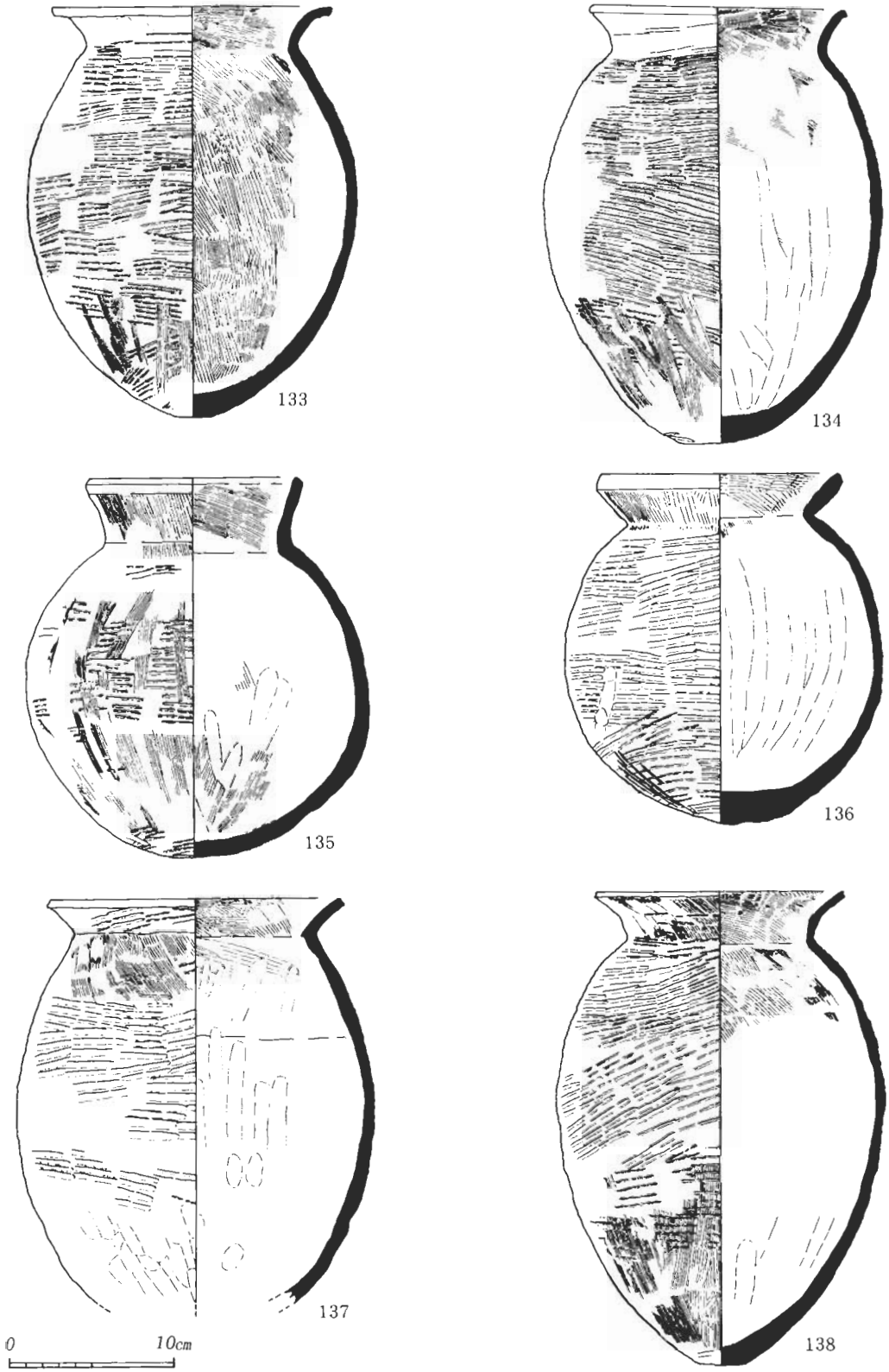


fig. 18　ST3　出土遺物実測図（その５）

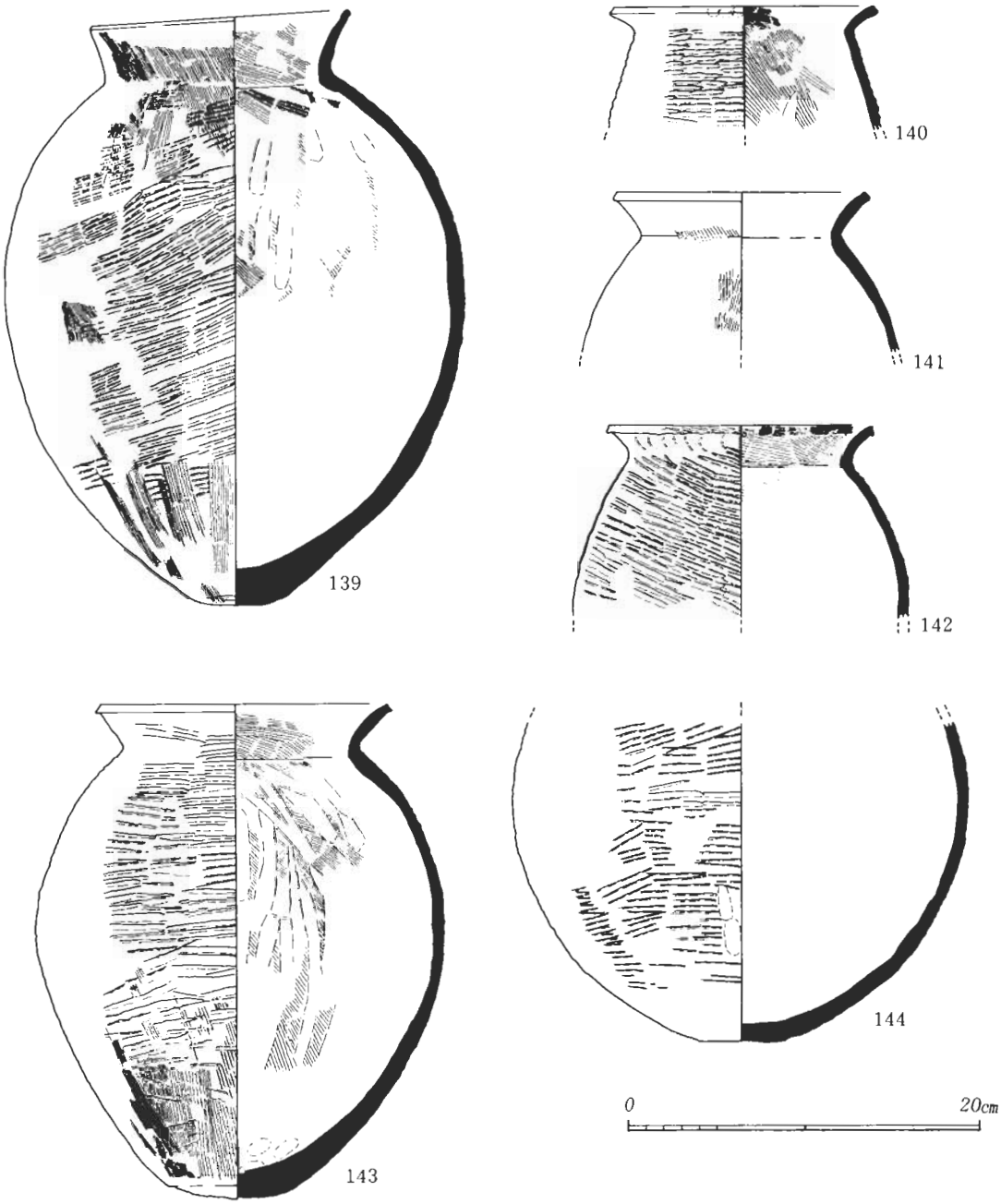


fig. 19　ST3　出土遺物実測図（その６）

台石と考えられる扁平な河原石が存在した。この他にST3の南側と東側には柱穴群が存在するが、これらは円形又は隅円方形を呈し、規模は直径26㎝～32㎝や一辺44㎝、検出面からの深さ５㎝～20㎝を測る。これは上屋構造に伴う可能性がある。

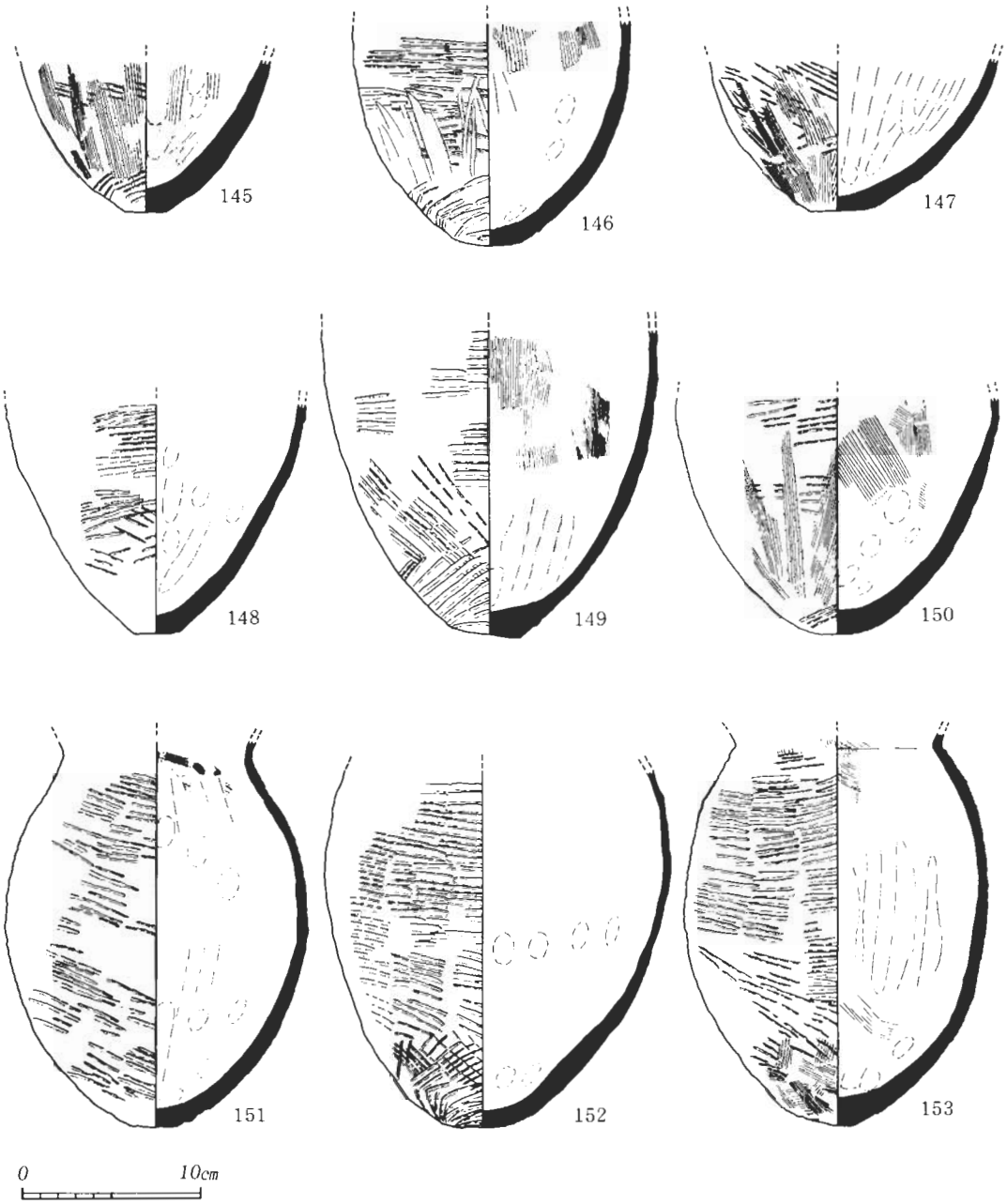


fig. 20　ST3　出土遺物実測図（その７）

ST3からの出土遺物は破片を含めて2,827点であり、口縁部形態から器種の特定できるものは360点である。出土遺物として図示できるものは78～158である。78～108は鉢である。容量の小さなものの中には体部が内湾して立ち上がるもの(78～85)、体部がやや内湾して立ち上が

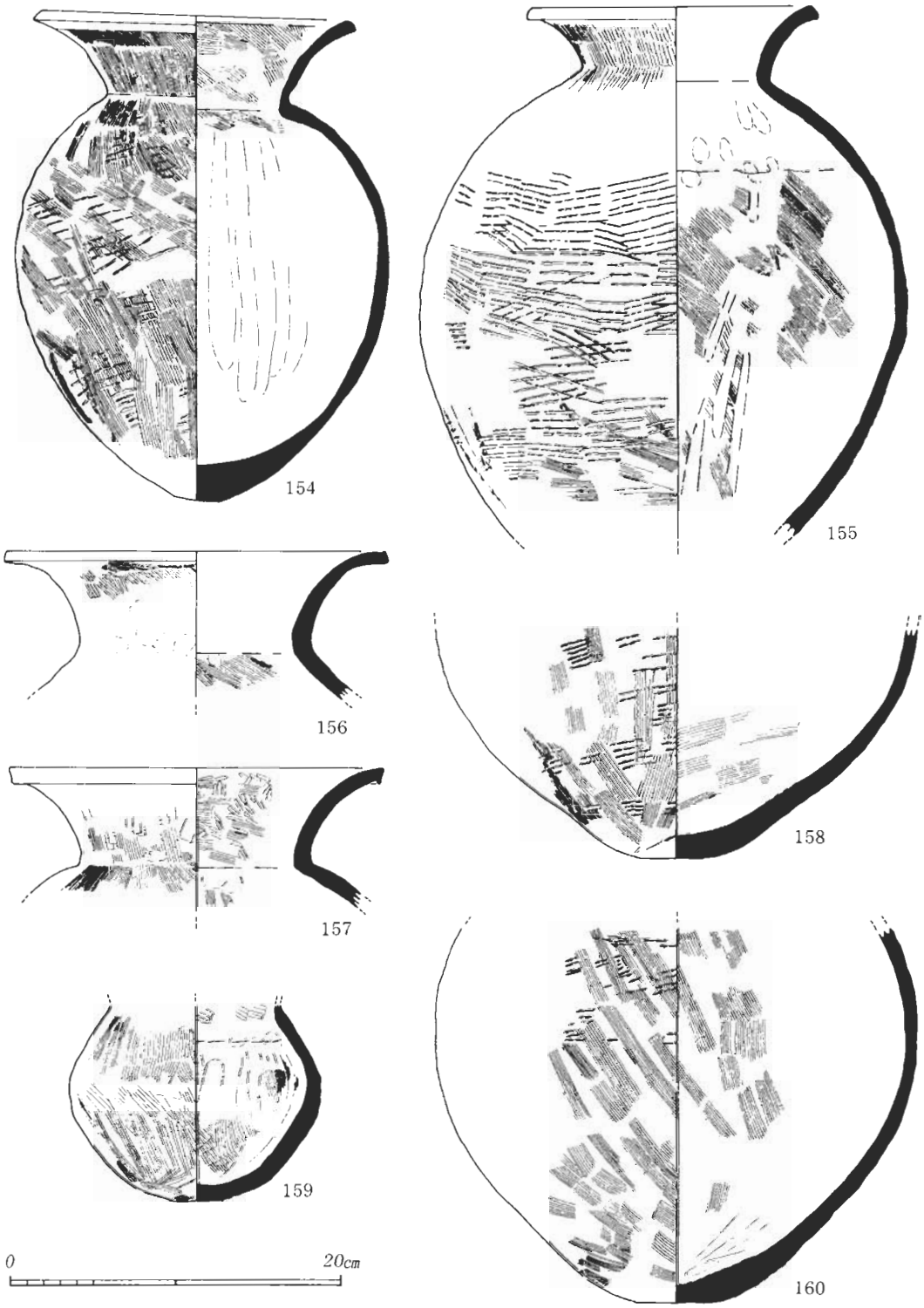


fig. 21　ST3　出土遺物実測図（その８）

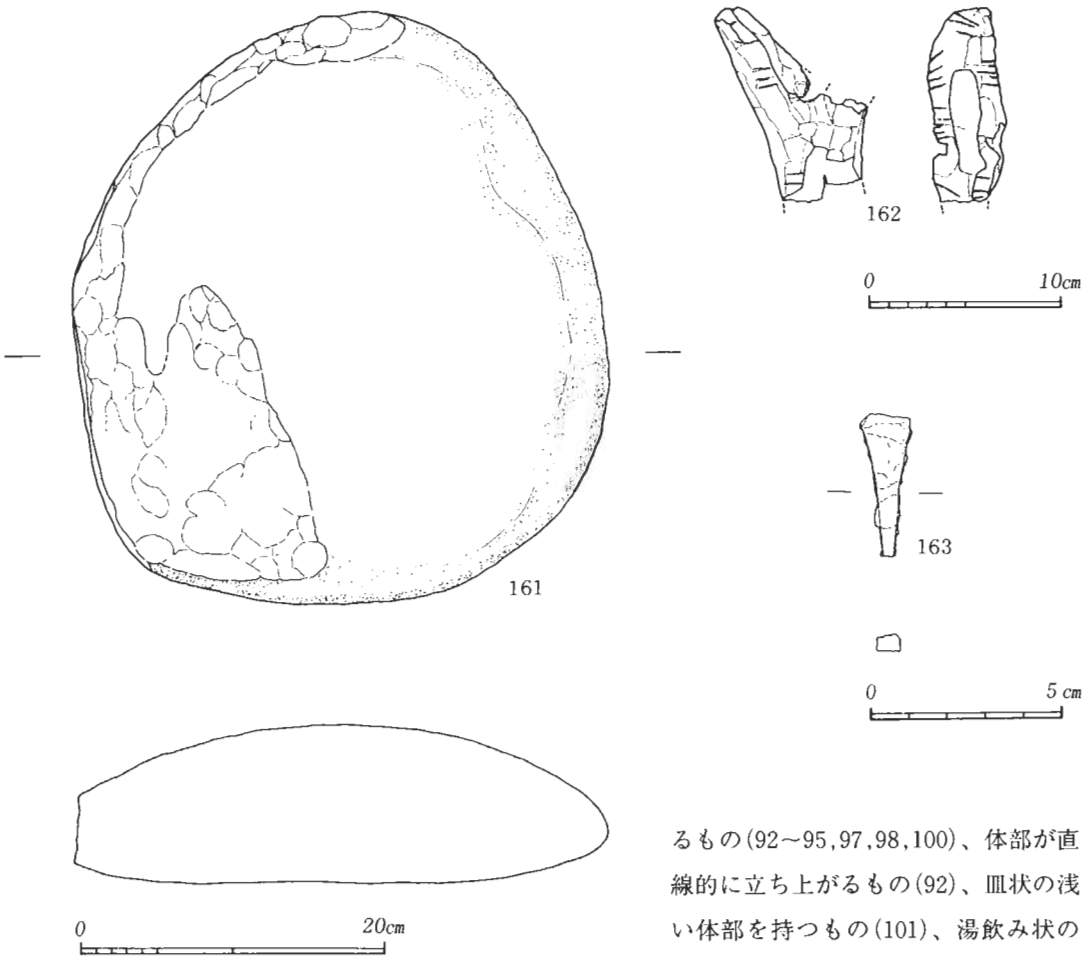


fig. 22　ST3　出土遺物実測図（その９）

るもの(92～95,97,98,100)、体部が直線的に立ち上がるもの(92)、皿状の浅い体部を持つもの(101)、湯飲み状の深い体部を持つもの(102)が存在する。109～112は甑である。深い鉢状を呈した尖底のもの(109)や底部に穿孔途中の孔を残しその隣に新しい孔を穿ったもの(110)等が見られる。113～153は甕である。多くは胴部砲弾形を呈するが、球形の胴部を持つもの(135,136)が存在している。また、113は胴部上位に焼成後に施された穴が開く。154～160は壺である。155は胴部上位と口縁部に篦磨きを施す。156,157は口縁部が外反して大きく開く。159はやや小型のもので、胴部中位の張った算盤玉形を呈する。158と160は壺の底部であり、タタキ目を刷毛目で丁寧に消す。161は中央ピットの傍らに存在した台石である。162は支脚の支部である。163は鉄鏃の茎部と考えられる。遺物の出土状況は94,99,111,117,121,128,129,132,141,151,155,160,161が床面直上から、106,136,138,139,146が中央穴から、78,82,84,96,100,101,137,142,144,147はベッド上から、88,91,95,98,112,118,123,159が壁際から出土している。

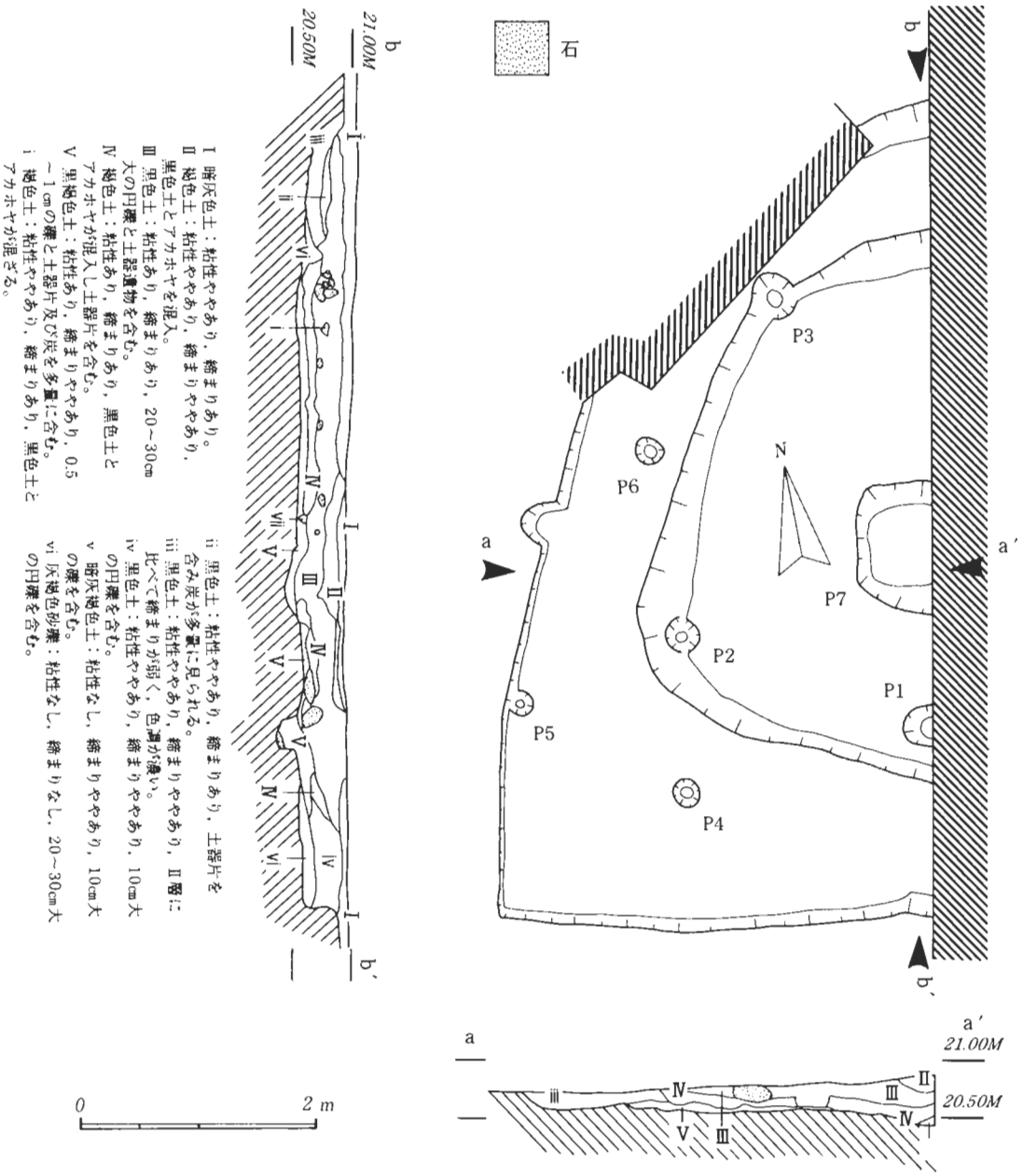


fig. 23　ST4　平面図・セクション図

ST4（fig.23）

調査区の東部北端に位置する。東側は調査区外に及び、今回の調査ではST4全体のほぼ西半分が対象となった。又、ST4は後世の耕作に伴うと考えられる削平が厳しく、南部と北西部では攪乱を受けている。平面形態は隅円方形を呈すると考えられるが、多角形の可能性もある。規模は一辺4.5ｍ程度である。確認し得た北、西、南には壁際から70㎝～80㎝の幅で、中央床面よりやや高い（５㎝～12㎝）高床部が存在する。北側と西側の高床部と中央床面との境には灰

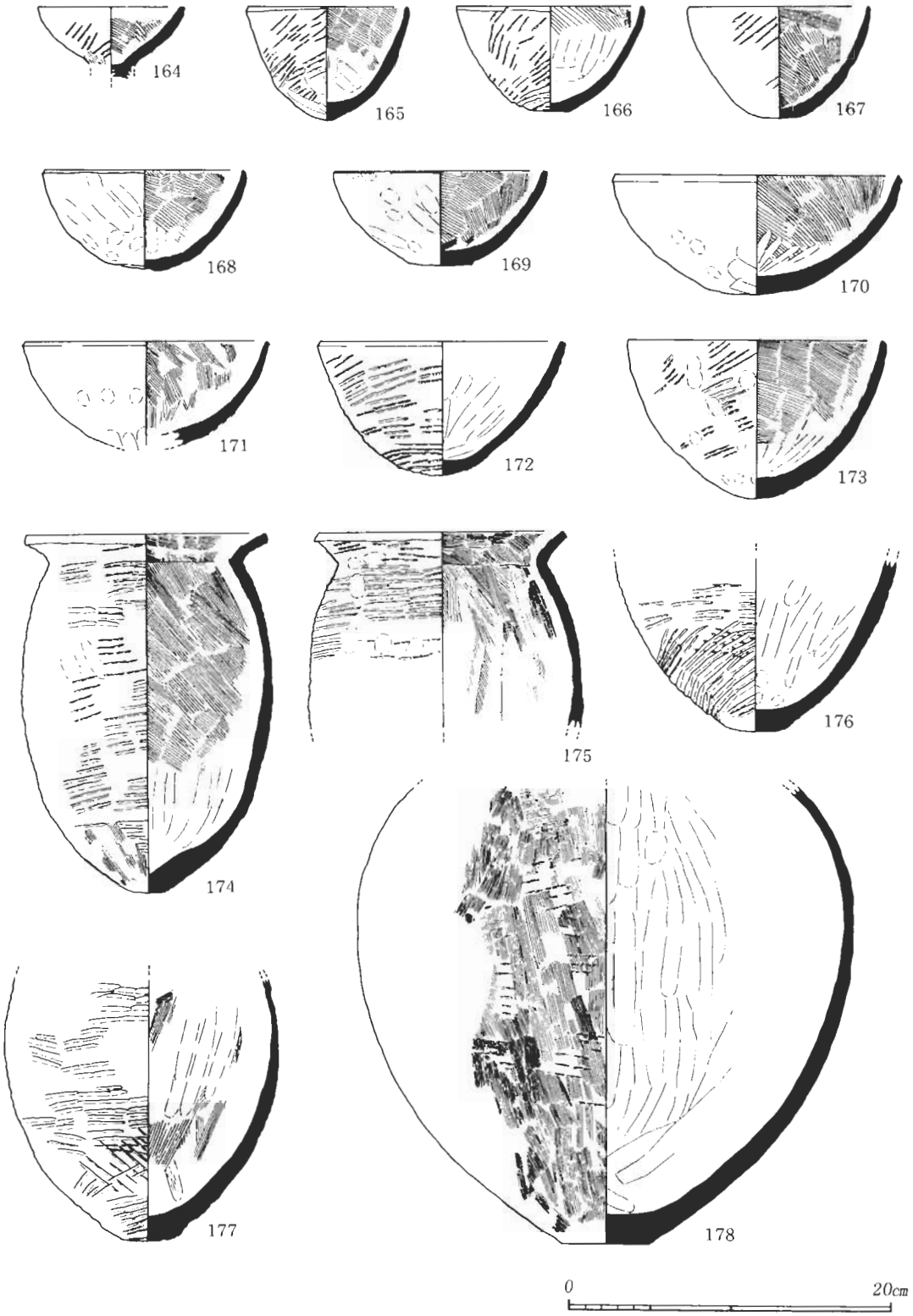


fig. 24　ST4　出土遺物実測図（その１）

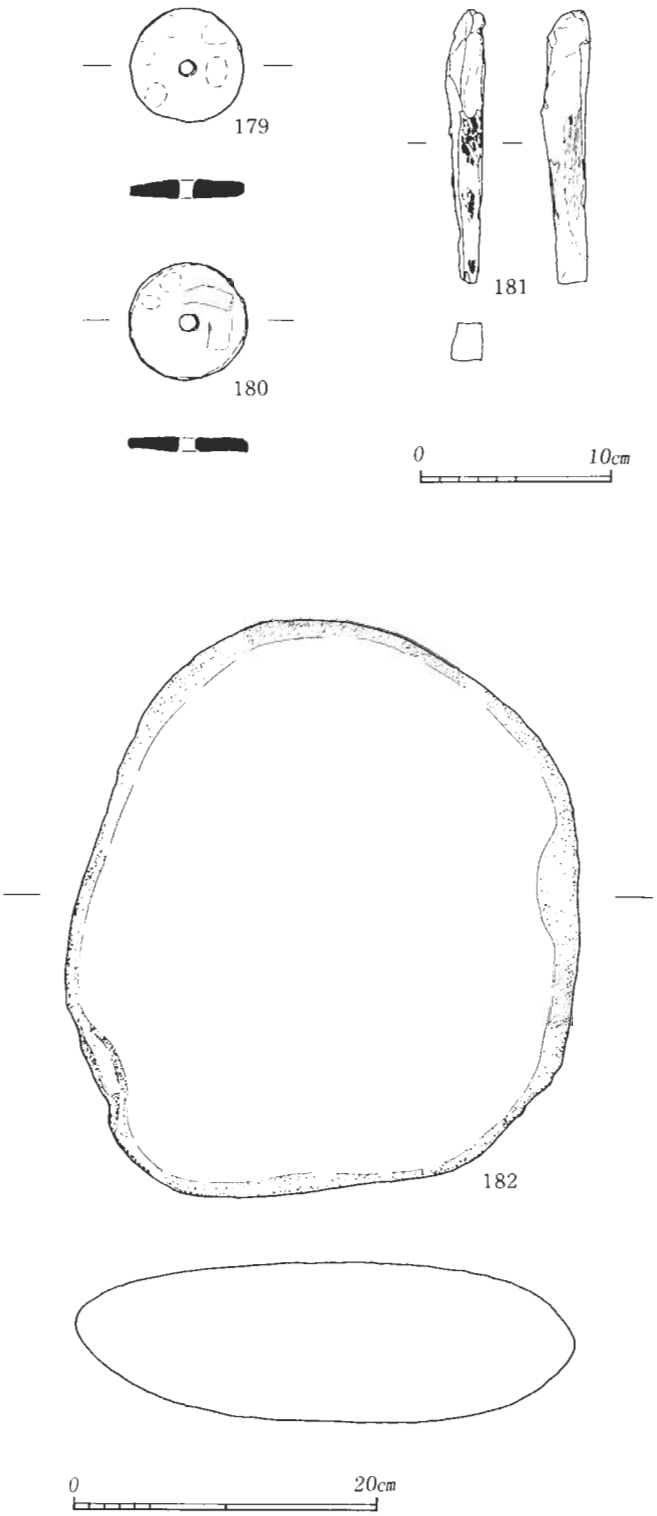


fig. 25　ST4　出土遺物実測図（その２）

褐色砂礫土で形成された土手部分や地山の削り出し部分が存在し、高床部は外側の壁に向かって緩やかに下る。不明瞭な高床部分を意識的に区画する意味を持つ土手状の構築物か。遺構埋土としては褐色土(Ⅱ層)、黒色土(Ⅲ層)、褐色土(Ⅳ層)、黒褐色土(Ⅴ層)が存在しており、この内Ⅲ層には拳大の円礫と弥生後期土器片が多く含まれていた。アカホヤの混入が見られ、特に中央部分ではそれが著しい。床面及び高床部で検出できた柱穴は６個であり、東壁に沿って中央やや南寄りには中央穴が存在している。(ST4柱穴計測表参照)中央穴の平面形態は隅円方形を呈し、残存規模は南北94cm、東西54cmを測り、床面からの深さは16cmである。埋土として先のⅤ層が主に存在しているが、これには多量の炭化物の混入が見られた。また、上端部には土手状の盛土部分が存在している。中央穴の南側約20cmには台石と考えられる扁平な河原石も存在している。

ST4から出土した遺物は破片を含めて471点あり、口縁部形態から器種の特定が可能なものは56点である。出土遺物として図示できるものは164～182である。164～173は鉢であり、164はやや浅めの体部に台部が付くと考えられる。容量の小さいものの中で体部が内

湾するもの(165～167)、体部がやや内湾して立ち上がるもの(168,169)が存在し、容量のやや大きなものでは体部が内湾して立ち上がるもの(172,173)、体部がやや内湾して立ち上がるもの(170,171)が見られる。174～177は甕であり、178は球形に近い体部を持つ壺と考えられる。179,180は土製の紡錘車である。181は泥岩製の砥石、182は床面に据えられていた台石である。

遺物の出土状況は169,170,171,173,174,175,179,180が床面直上からの出土である。

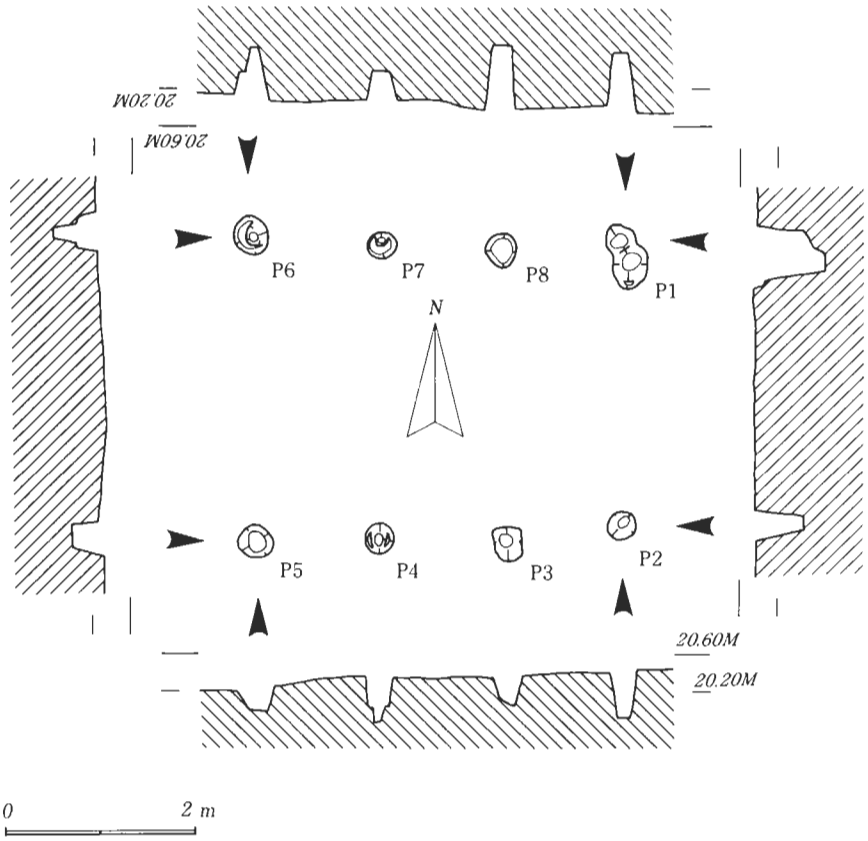


fig. 26　SB1　平面図・エレベーション図

(2)　掘立柱建物

SB1 (fig.26)

調査区の中央部北側に位置する。検出面は茶褐色土及び上層の黒褐色土が砂礫層上に比較的厚く堆積している箇所である。棟方向は*N-90°-E*である。規模は桁行3間(3 m90cm)、梁間1間(3 m)を測る。この掘立柱建物を構成する柱穴群は、平面形態円形及び楕円形を呈し、規模は26cm～36cm、検出面からの深さは13cm～34cmである。(SB1柱穴計測表参照)　遺構埋土は何れも黒色土であり、10cm～20cm大の円礫を含んでいるものが多い。円礫は柱痕部分と考えら

れる直径10㎝～15㎝の周囲に存在することから、柱を安定させる為に置かれた可能性がある。

出土遺物は何れも弥生後期土器の細片であり、P1から４点、P2から１点、P3から２点、P4から１点、P5から１点、P8から２点である。

SB2（fig.27）

調査区中央部に位置する。棟方向は*N-1°-E*であり、規模は桁行４間（７ｍ20㎝）、梁間３間（４ｍ80㎝）と考えられる。梁間方向の柱を検出できなかったが、これは本来この掘立柱建物が

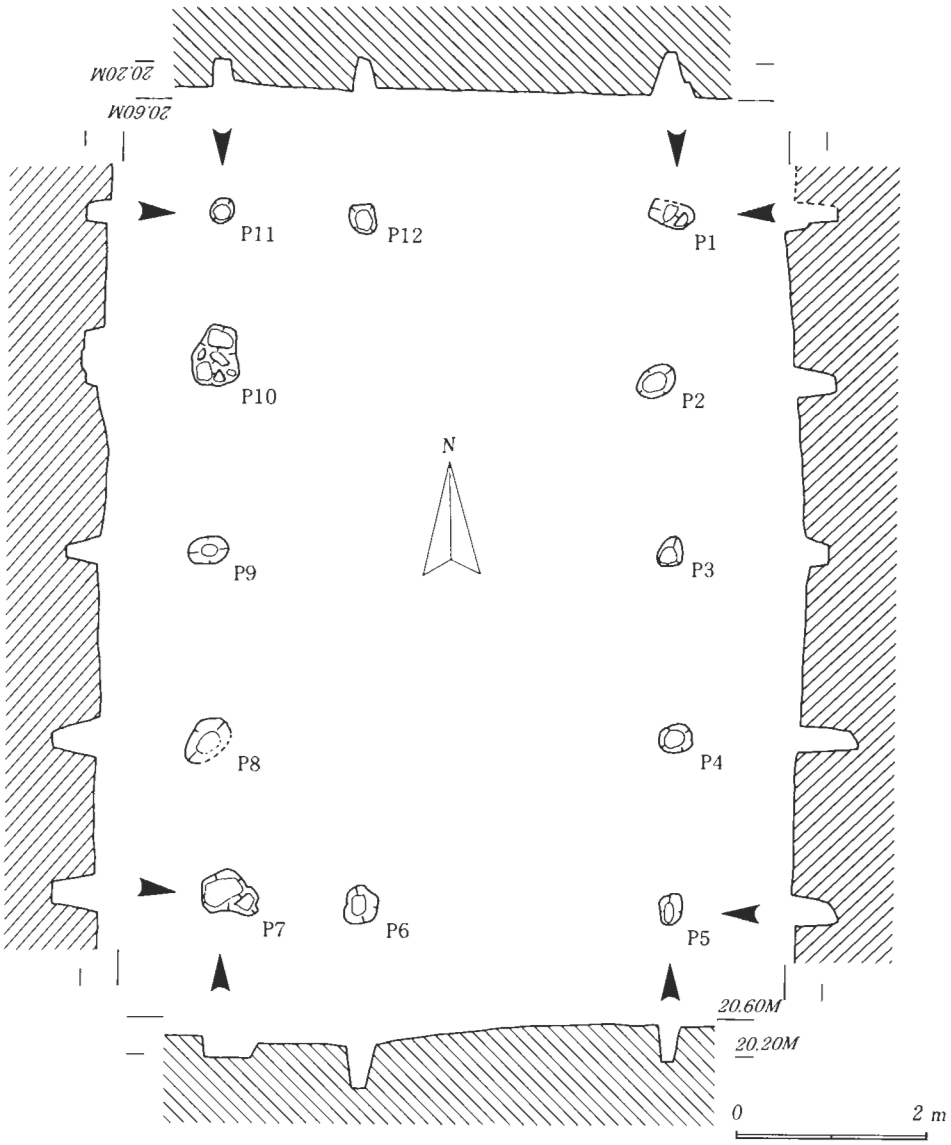


fig.27　SB2　平面図・エレベーション図

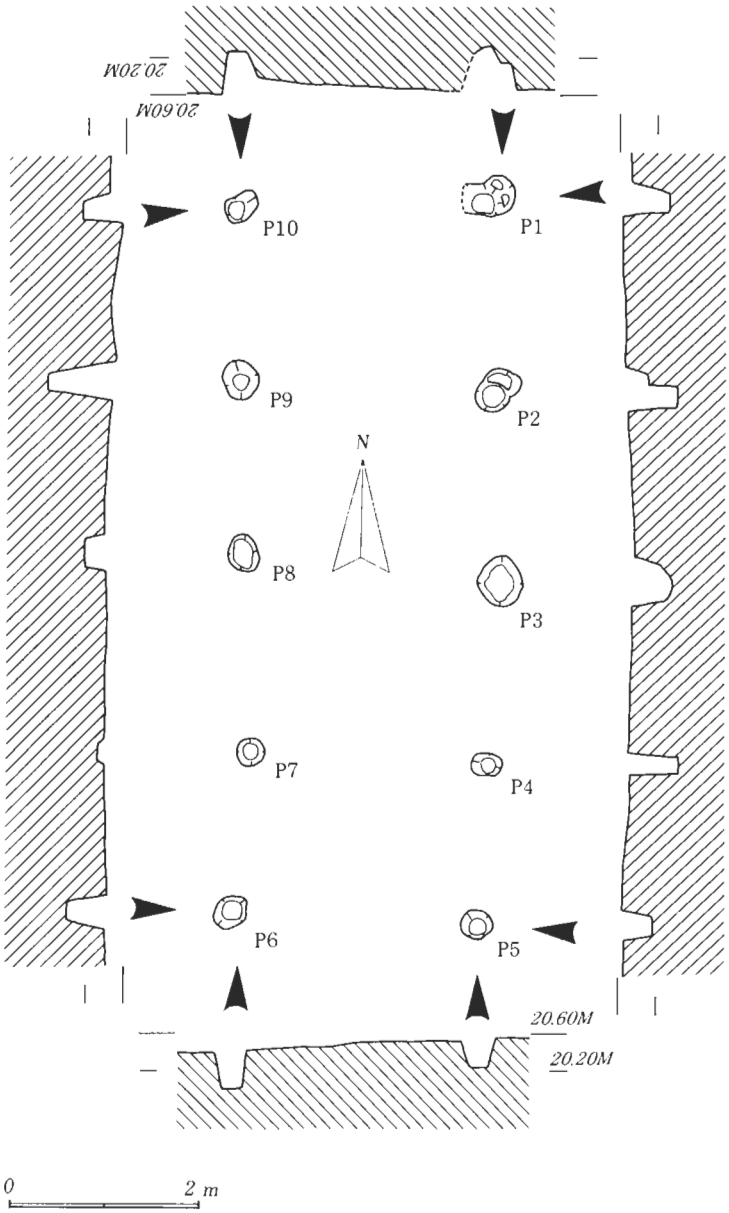


fig. 28　SB3　平面図・エレベーション図

持つ構造的なものの可能性がある。構成する柱穴は平面形態円形又は楕円形を呈するものが多く、規模は26cm～60cm、検出面からの深さは10cm～33cmを測る。(SB2柱穴計測表参照)　遺構埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

SB3 (fig.28)

調査区の中央部に位置する。棟方向は*N-1°-W*である。規模は桁行4間(7m60cm)、梁間1間(2m60cm)を測る。掘立柱建物を構成する柱穴の平面形態は円形又は楕円形が多く、規模は18cm～54cmであり、検出面からの深さは3cm～37cmを測る。(SB3柱穴計測表参照)　遺構埋土は黒色土である。

出土遺物は何れも破片であり、P8から備前・甕が1点、P9から土師質土器1点である。

(3)　土坑

SK1 (fig.29)

調査区の中央部南側に位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長軸90cm、短軸74cmを測る。長軸方向は*N-5°-E*である。底部は平らな面を成し、壁は概ね急に立ち上がる。検出

面からの深さは24㎝～40㎝である。遺構埋土としては２層が存在し、この内黒褐色粘質土層（Ⅰ層）には拳大の円礫が存在する。

出土遺物として図示できるものは存在しないが、細片は瓦質の三足鍋脚部１点、土師質土器６点がある。

※ 92-14NKの調査及び整理ではSK1をC-7グリッドP3で取り扱う。

SK2（fig.29）

調査区の中央部南側に位置する。平面形態は不整方形を呈し、規模は一辺約65㎝を測る。主軸方向は*N-33°-E*である。底部は鍋底状を成し、検出面からの深さは30㎝である。遺構埋土は黒褐色土単純一層である。

出土遺物としては土師質土器の細片が１点存在する。

※ 92-14NKの調査及び整理ではSK2をD-7グリッドP1で取り扱う。

SK3（fig.29）

調査区の東部中央に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸２ｍ20㎝、短軸66㎝～１ｍ75㎝を測る。長軸方向は*N-73°-E*である。底部には階段状の段部が存在し、中央の東よりでは最も深く成る。検出面からの深さは最大で１ｍ12㎝である。遺構埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物はすべて細片であり、弥生土器が２点、瓦が１点存在している。

※ 93-5NKの調査及び整理ではSK3をSK13で取り扱う。

SK4（fig.29）

調査区の東部中央に位置する。平面形態は不整形を呈し、規模は長軸１ｍ80㎝、短軸１ｍを測る。長軸方向は*N-9°-W*である。底部は緩やかな凹面を成し、検出面からの深さは20㎝である。遺構埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物は弥生土器細片が７点存在する。

※ 93-5NKの調査及び整理ではSK4をSK14で取り扱う。

SK5（fig.29）

調査区の東部南側に位置する。平面形態は不整楕円形を呈し、規模は長径85㎝、短径65㎝を測る。長軸方向は*N-16°-E*である。底部は北側に深い落ち込み部分があり、南側には浅い段部が存在する。検出面からの深さは14㎝～36㎝である。遺構埋土は黒色土単純一層である。

出土遺物は破片であり、瓦質土器が１点存在する。

※ 93-5NKの調査及び整理ではSK5をSK15で取り扱う。

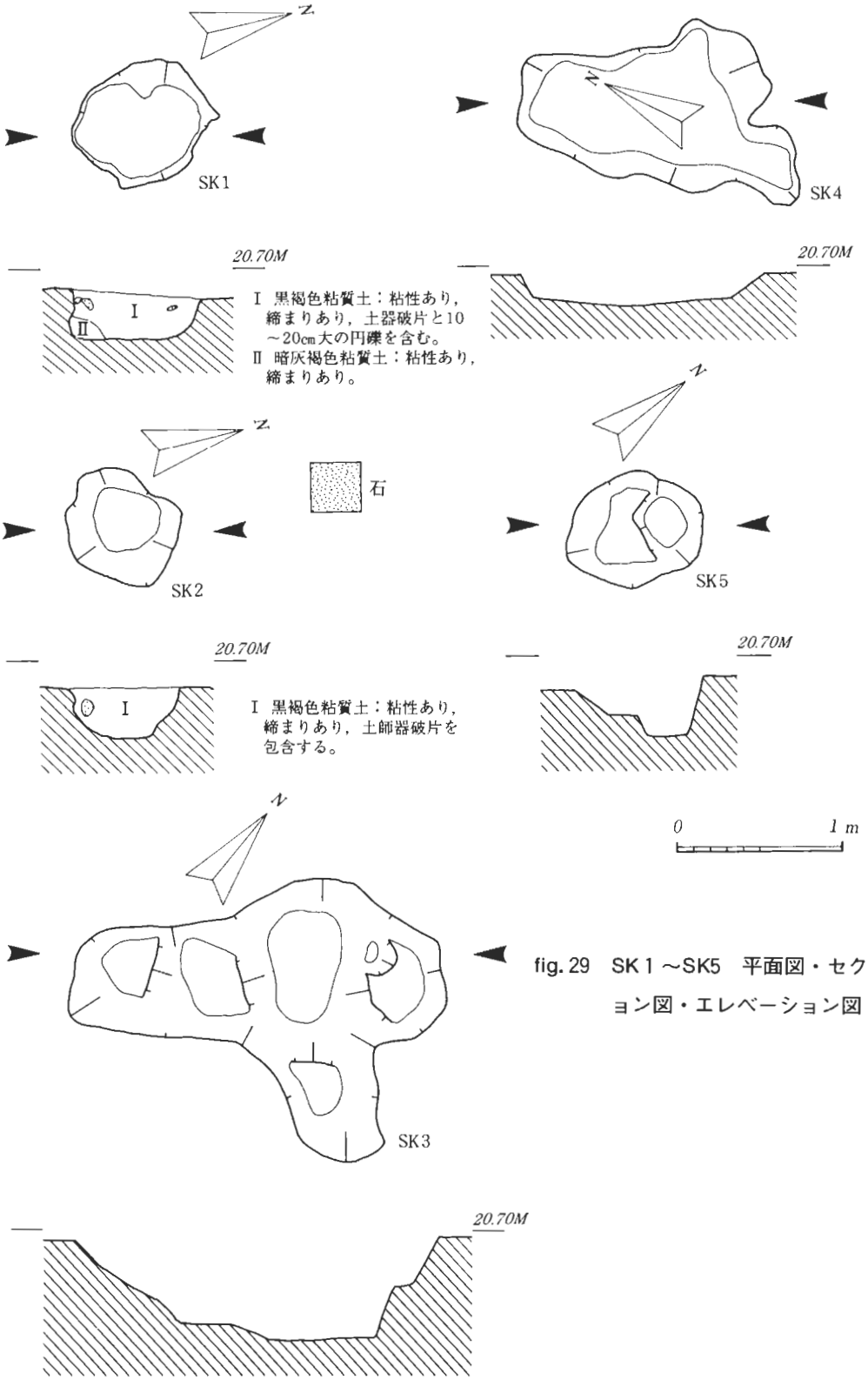


fig. 29　SK 1 ～SK5　平面図・セクション図・エレベーション図

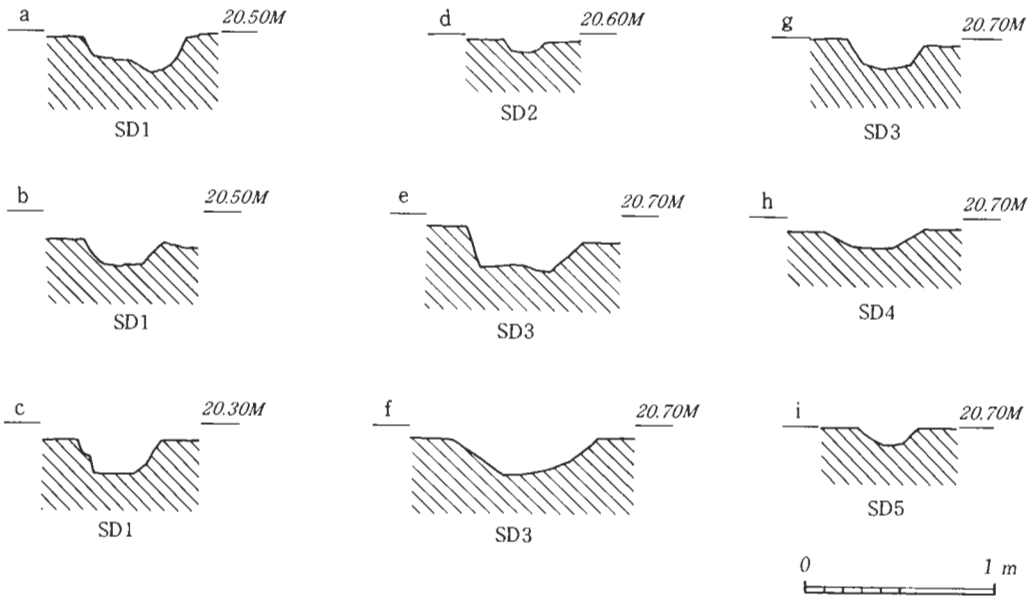


fig. 30　SD 1 ～SD5　エレベーション図

(4)　溝状遺構

SD1（fig. 3 ・30）

調査区の西北部に位置する。北壁際から検出可能であるが規模は小さく、西行して西壁に隔される段階では明確な溝形態を成す。主軸方向は*N-33°-E*であり、確認延長は32ｍ80㎝、幅は40㎝～48㎝である。断面形態は逆台形を呈し、検出面からの深さは25㎝～38㎝である。遺構埋土は黒色粘質土単純一層であり、10㎝～25㎝大の円礫を含んでいる。検出面が茶褐色土層の上層である黒色粘質土層（Ⅲ層）であることから、埋土と検出土層の区別に際し、SD1に含まれる土の粘性が高く締りが強いことが基準となった。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては須恵器１点、弥生土器９点が存在する。

SD2（fig. 3 ・30）

調査区の東部に位置する。検出は部分的であり、東南部ではSD3によって切られる。主軸方向は*N-45°-E*である。幅は40㎝を測り、検出面からの深さは８㎝である。遺構埋土は黒褐色土単純一層であり、出土遺物は皆無である。

SD3（fig. 3 ・30）

調査区の東南部に位置する。北西から南東行する浅い溝SD2とSD4を切って存在する。調査区の東壁と南壁に隔されており、「く」の字状の屈曲部を持つ。主軸方向は南壁側で*N-70°-E*、

東壁側で*N-14°-E*である。確認延長は15m20cm、幅は48cm～64cmを測る。断面形態は逆台形を呈し、検出面からの深さは9cm～30cmである。遺構埋土は黒色土である。

出土遺物の中で図示できるものは無い。細片としては瓦質土器3点、弥生土器3点が出土している。

SD4（fig. 3・30）

調査区の東部南側に位置する。SD3に切られて存在しており、確認延長は6m10cmを測る。主軸方向は*N-33°-W*である。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは8cmである。遺構埋土は黒褐色土である。

出土遺物は皆無である。

SD5（fig. 3・30）

調査区の東部に位置する。ST3との先後関係は不明確であり、北東側では攪乱土坑に切られている。主軸方向は*N-50°-W*である。確認延長は3m40cmを測る。断面形は逆台形を呈し、検出面からの深さは10cmである。遺構埋土は黒色土である。

出土遺物は皆無である。

(5) 包含層からの出土遺物（fig.31）

調査区内に於ける出土遺物は概ね遺構内からのものに限られる。換言すれば遺物が出土する箇所では遺構が見つかる場合が多い。ここで上げた遺物は後世の削平又は攪乱による遺構の破壊を受けた部分か、又は本文中で述べたように遺構埋土と検出面の関係で調査時に遺構を見逃した可能性のある部分から出土した遺物の中で図示できるもの2点である。

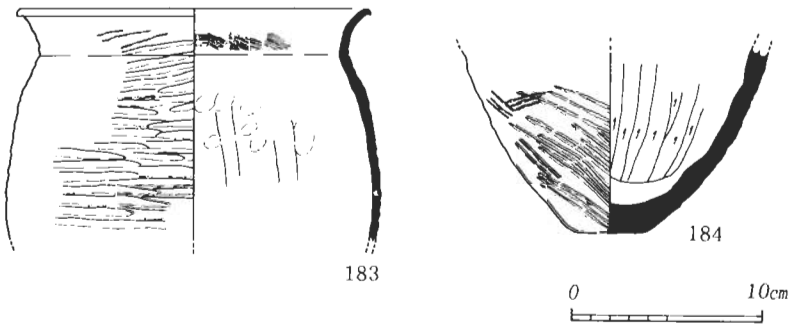


fig. 31　包含層出土遺物実測図

3．まとめ

今回の調査における出土遺物は殆どが遺構からのものである。主体は弥生時代後期末の竪穴住居からのものである。各住居址出土の土器や土製品について口縁部を中心とした器種別の組成を示すと下表の様になる。各住居址共組成における共通点として、鉢が全体の半分を越え、甕と鉢で全体の九割以上を占めている。鉢、甕、壺を除く遺物としては、ST1とST3から出土している支脚とST4から出土している高杯と紡錘車があるが、点数が突出したり、特異な出土状況を示したものでは無かった。以下では全体の九割以上を占める鉢と甕を中心にその様相を纏める。

鉢には容量面（法量）でA：小さなものとB：大きなものが存在するが、各々について口縁部の形態から①端部を丸く修めるもの、②端部が面を成すもの、③鍔状の短い口縁を成すもの、に分けられる。各住居跡におけるA、Bの鉢の①、②、③の出現率は表に示すとおりである。Aの容量の小さい鉢では①の出現頻度が②に比べて多かったものが、Bの容量が大きな鉢ではST4を除き逆に②の出現頻度が多く成っている。但し、②の遺物群には端部が窪んだ面を成す箇所と丸く修める箇所が同一個体口縁に存在することから、規制とか認識の徹底が図られていたとは考え難い。

鉢の容量に関わる法量分布（口径－器高）はグラフに示す通りである。容量面で今回出土した鉢の主体を占めるのは口径10cm～13cm代、器高５cm～８cm代のものであり、大多数は口径18cm以下のもので占められる。法量（口径及び器高）が大きく成るに従って出現頻度も低い。ST3を除くと資料の点数に限りがあり偏りを否めないが、ST1では器高が７cmに満たないものが主体であり、ST2では器高が７cm前後以上のもので占められる。

今回の出土例から見る限り容量の大きな鉢は供膳形態の中で一定位置は占めるものの数量的に多いものではない。これは土器以外の代替品の存在も考慮する必要があろう。鉢がやや纏まって出土したST3では法量面での多様性が表されている。また、器高の低い皿タイプ（101）や器高の高い湯飲みタイプ（102）の存在に示される器形面での多様性も窺わせる。このことからST3に関しては他のSTに比べて時間的に長い幅を考慮する必要があると思われる。またST1とST2の出土鉢に関しては時間的な影響よりも各住居の構成員によるもの、またはそれに対応した変化を表すものであろう。

STNo.	壺	甕	鉢	高杯	支脚	その他
ST1	7	28	33	－	1	－
ST2	7	54	102	－	－	－
ST3	27	149	183	－	1	－
ST4	2	12	42	1	－	2

ST別器種組成

	STNo.	①	②	③
A	ST1	41.9	30.2	2.3
	ST2	44.1	30.4	2.0
	ST3	53.6	27.3	7.1
	ST4	47.6	26.2	－
B	ST1	9.3	16.2	－
	ST2	6.9	16.7	－
	ST3	2.7	7.7	1.6
	ST4	16.7	9.5	－

※小数点第２位以下四捨五入。

鉢類別出現率（％）

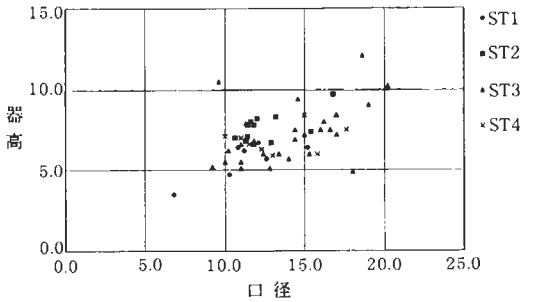
甕には口縁部の形態から見て①口縁部が短く直線的に立ち上がるもの、②口縁部が外反するもの、の大きく二つのグループが存在する。また、口縁端部は(a)丸く修めるもの、(b)面を成すもの、が存在し、それぞれに下方への肥厚が認めれるものがある。①と②ではST1で出現頻度が拮抗するものの、その他では②が多く見られる。(a)と(b)では(b)の頻度が多い。

甕は鉢に比べて残存状態が悪く、竪穴住居4棟合わせての出土甕から容量に関わる法量値(器高－胴径）を示した。出土資料の分布中心は口径11cm～15cm、器高15cm～23cm、胴径13cm前後～18cm前後であり、容量の小さなものが主体と考えられる。器高と胴径の関わりは容量はもとより、その形態的な特徴を表現し得るものと考えるが、器高/胴径の数値が1.1から1.5の範囲に分布し、形態的に球形を指向する135や136では1.1から1.2の値を示す。最大径は殆どが胴部に持ち、各住居址におけるばらつきは少ない。容量が大きく、形態的に特異なものとしてはST2の69やST3の139が上げられる。

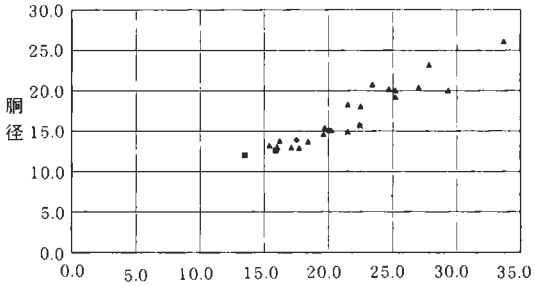
壺は口縁部形態を留めるものが僅少な中で、殆どを口縁部が大きく外反するものが占め、二重口縁・袋状口縁がそれぞれ1点と小型の壺が数点見られるに過ぎない。

底部には平らな面を持つものに対し、尖底を呈するもの、丸底を呈するものが存在する。このうち、尖底や丸底を呈するものは底部全体の25％～37％に達し、平底を呈するものであっても、押し潰しただけの平坦面や粘土を貼付しやや突出した凸面を成したものが多く見られる。

ここで取り上げたST出土の遺物群は型式的にはヒビノキⅡ式からヒビノキⅢ式の範疇で押さえられるものと考えられ、主体はヒビノキⅡ式で構成されるものである。各住居址は空間的には同時期に存在した可能性も考えられるが、ST2とST1がやや先行し、ST3が先述の様にやや長めの時間幅を持って存在し、ST4が後出するものと考えられる。これらを前回の調査におけるST1出土の遺物群と比較した場合、壺出土点数や装飾を施した壺の存在などに違いが見受けられるが、ST3はこれと同時期乃至はやや先行して存在したものと考えられる。



鉢（口径－器高）グラフ



甕（器高－胴径）グラフ

参考文献

1.『金地遺跡』1992年　南国市教育委員会　　2.『西分増井遺跡』1990年　春野町教育委員会

3.『ひびのき遺跡』1977年　土佐山田町教育委員会

4.『林田遺跡』1985年　土佐山田町教育委員会

ST　柱穴計測表

ST1

ピットNo.	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物・その他
P1	35×30	29	楕円形	
P2	32×20	21	楕円形	
P3	20×23	11	楕円形	
P4	46×39	25	楕円形	
P5	30×26	6	不整円形	
P6	32×25	9	隅円長方形	
P7	25×20	5	不整円形	

ST2

ピットNo.	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物・その他
P1	42×26	41	不整楕円形	
P2	直径49	27	円形	
P3	12×14	10	不整円形	
P4	46×44	32	楕円形	
P5	42×35	53	不整円形	

ST3

ピットNo.	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物・その他
P1	55×39	25	楕円形	
P2	49×44	30	楕円形	
P3	42×39	40	楕円形	甕口縁・鉢口縁・破片1点
P4	44×42	40	楕円形	
P5	92×62	10	不整円形	中央穴 106・136・138・139・146

ST4

ピットNo.	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物・その他
P1	30×(20)	15	(楕円形)	
P2	直径26	20	円形	
P3	35×30	26	楕円形	
P4	直径21	5	円形	
P5	直径18	6	円形	
P6	22×19	10	不整円形	
P7	94×(54)	16	隅円方形	中央穴 甕頸部・破片3点

※　(　) 内は残存規模・推定形態。

SB　柱穴計測表

SB1

ピットNo.	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物・その他
P1	28×32	38	不整円	弥生土器1点
P2	直径28	25	円形	弥生土器1点
P3	28×36	23	不整長方形	弥生土器2点
P4	直径28	25	円形	弥生土器1点
P5	直径36	18	円形	弥生土器1点
P6	直径40	24	円形	弥生土器2点
P7	28×32	26	楕円形	
P8	32×36	34	楕円形	

SB2

ピットNo.	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物・その他
P1	28×44	22	隅円長方形	
P2	32×44	20	楕円形	
P3	24×30	12	不整円形	
P4	30×36	32	不整円形	
P5	24×34	24	楕円形	
P6	32×40	24	不整円形	
P7	40×48	22	不整方形	
P8	36×56	24	楕円形	
P9	32×42	18	楕円形	
P10	48×64	10	不整形	
P11	直径24	15	円形	
P12	28×36	11	不整楕円形	

SB3

ピットNo.	規模(cm)	深さ(cm)	平面形	出土遺物・その他
P1	40×56	24	不整形	
P2	28×48	29	不整形	
P3	48×54	22	楕円形	
P4	22×32	26	隅円長方形	
P5	直径32	16	円形	
P6	32×40	20	楕円形	
P7	直径32	6	円形	
P8	32×40	11	不整楕円形	陶器1点
P9	36×42	36	楕円形	弥生土器1点
P10	28×36	23	隅円長方形	

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
1	6	13 A-1	ST1 床面直上	鉢	11.6	[7.3]	—	—	底部は丸底を成すと考えられる。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は外傾するやや窪んだ面を成す。	(内・外)撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 石英粒、チャート粒、0.5～3㎜の砂粒を含む。	
2	6	13 A-2	ST1	鉢	12.1	6.7	—	3.5	底部は不明瞭な面を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は面を成す。	(内)細かい刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)橙色5YR6/6 石英粒、チャート角粒、0.5～2㎜の砂粒を含む。	
3	6	13 B-1	ST1	鉢	11.2	6.2	—	2.8	底部は押し潰した平坦面を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は平らな面を成す。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR7/6 1～2㎜の石英粒、チャート粒を含む。	
4	6		ST1 床面直上	鉢	10.8	6.4	—	3.6	底部は不明瞭な平らな面を成す。口唇部は概ね丸く修める。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)撫でを施し、箆状工具による圧痕が残る。	(内・外)にぶい黄褐色10YR5/4 1～3㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
5	6	13 B-2	ST1	鉢	13.4	7.2	—	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して立ち上がる。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)削り又は撫でを施す。	(内・外)明赤褐色5YR5/6 1～4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
6	6		ST1 高床部	鉢	20.4	[7.8]	—	—	体部は内湾して立ち上がる。口唇部は内傾する面を成す。	(内)撫で後磨きを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。 (口)横位の撫で。	(内・外)暗褐色7.5YR3/3 1～4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
7	6	13 C-1	ST1 高床部	鉢	15.2	6.4	—	5.6	底部は高台状を呈し、端部に粘土のはみだしが見られる。体部は直線的に立ち上がる。口縁部は粘土帯を貼付し外側に肥厚する。	(内)刷毛を施す。 (外)撫でを施し、指頭圧痕を残す。	(内)黒褐色10YR3/1 (外)明黄褐色10YR6/4 1～5㎜の砂粒、石英粒を含む。	
8	6	13 C-2	ST1	鉢	12.6	5.7	—	—	底部は尖底風の丸底を成す。体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)撫でを施す。指頭圧痕が残る。 (外)右下がりのタタキ後撫でを施す。指頭圧痕が残る。	(内・外)褐色7.5YR4/6 1～6㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
9	6	13 D-1	ST1 高床部	鉢	11.0	5.4	—	3.2	底部は中央の盛り上がった面を成す。体部はほぼ直線的に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)右下がりのタタキを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 1～5㎜の石英粒を含む。	
10	6	13 D-2	ST1 高床部	鉢	12.6	5.7	—	2.9	底部は中央のやや窪んだ平底を成す。体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部はやや窪んだ面を成す。	(内)細かい刷毛を施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 石英粒、チャート粒、5㎜以下の砂粒を含む。	
11	6		ST1	鉢	6.8	3.5	—	—	底部は丸底を呈する。	(内・外)撫でを施し、指頭圧痕を残す。	(内・外)にぶい黄褐色10YR6/4 1～4㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
12	6		ST1 床面直上	鉢	—	[3.2]	—	2.8	底部は突出し、狭い凸面を成す。	(内)刷毛を施す。 (外)タタキ後丁寧な撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 1～5㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
13	6		ST1	壺	8.0	[4.0]	—	—	口縁部は直線的にやや拡がる。口唇部は丸味を持つ。	(内)刷毛後撫でを施し、指頭圧痕を残す。 (外)刷毛後撫でを施す。	(内・外)にぶい橙色 1～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
14	6		ST1	鉢	10.8	[6.0]	11.5	—	胴部は内湾して立ち上がる。口唇部は平らな面を成す。	(内)箆削り又は撫で。 (外)右下がりのタタキ後撫でを施す。 (口)箆状工具による圧痕。	(内)黒褐色10YR3/1 (外)灰黄褐色10YR4/2 1～10㎜大の砂粒と1～4㎜大の石英粒、赤色チャート粒を含む。	
15	6		ST1	壺	15.0	[13.0]	—	—	頸部はやや緩く屈曲し、口縁部は外反する。口唇部は部分的に外側に肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施し、口縁部では刷毛目を残す。 (外)タタキ後撫でを施す。 (口)横位の刷毛目が見られる。	(内)にぶい黄褐色10YR7/4 (外)橙色7.5YR6/4 1～3㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
16	6	19 A-1	ST1	壺	11.0	17.5	13.9	2.2	底部は狭い平らな面を成す。頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部は外側にやや肥厚し外傾する凹面を成す。	(内)指頭による撫で、上位では横位の刷毛目を残す。 (外)右上がり又は横位のタタキ後刷毛を施す。	(内・外)にぶい黄橙色10YR7/4 1～3㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	

※［　］内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
17	6		ST1	甕	17.4	[3.8]	—	—	甕部は「く」の字状に外反する。口唇部は外側へやや肥厚し、外傾する凹面を成す。	(内)口縁部に横位の刷毛を施す。 (外)頸部以下に刷毛，口縁部ではタタキ。	(内・外)明黄褐色 1～3mm大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
18	6		ST1	甕(底部)	—	[6.2]	—	3.0	底部は不明瞭な面を成す。	(内)撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)にぶい褐色 7.5YR5/4 1～6mm大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
19	6		ST1	甕(底部)	—	[7.2]	—	3.0	底部は狭い平らな面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)橙色7.5YR8/6 (外)にぶい褐色7.5YR5/4 1～4mm大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	外面に煤が付着する。
20	6	18 A-1	ST1 整際	甕(底部)	—	[10.0]	—	4.0	底部は狭い平らな面を成す。	(内)指頭による撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)明黄褐色10YR7/4 1～6mm大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
21	6		ST1	甕(底部)	—	[8.8]	—	2.8	底部は狭い平らな面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)褐色7.5YR4/6 1～3mm大の砂粒、石英粒を含む。	
22	7		ST1	甕(底部)	—	[9.5]	—	3.0	底部は不明瞭な狭い面を成す。	(内)底部端から刷毛を施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)黒褐色10YR3/1 1～5mm大の砂粒、石英粒を含む。	
23	7	18 A-2	ST1	壺(底部)	—	[9.8]	—	7.5	底部は不明瞭な平らな面を成す。	(内)撫で又は細刷毛。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)明黄褐色10YR7/6 1～6mm大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
24	7		ST1 床面直上	壺	—	[20.2]	27.0	4.0	底部は不明瞭な狭く平らな面を成す。	(内)刷毛後指頭による撫でを施す。 (外)右上がりのタタキ後粗い刷毛を施す。	(内)明黄褐色10YR7/6 (外)橙色5YR6/6 1～3mm大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
25	7	19 A-2	ST1	壺	—	[20.5]	—	—	底部はやや突出した丸底を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR7/4 1～3mm大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
26	7		ST1	支脚？	—	18.9	—	[9.6]	底部は安定した平らな面を成す。	(内)指頭による撫でを施す。 (外)下位には指頭圧痕が顕著に残り、中位以上では右上がりのタタキを施す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR6/4 1～7mm大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	ゴブレット状の形態を示す。
27	7		ST1	敲石	全長 12.3	全幅 7.0	全厚 4.5	重量 550g	構成粒子は細かく、硬い。鼠歯状痕、剝離痕、擦痕を留め、一部にはベンガラが付着する。			砂岩製。
28	9		ST2	鉢	10.8	[6.9]	—	2.4	底部は狭い平らな面を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)細かい刷毛。 (外)タタキ後撫で。	(内)にぶい黄橙色10YR7/3 (外)にぶい黄橙色10YR7/4 1～4mm大の砂粒を含む。	
29	9	13 E-1	ST2 東部地山削り出し部	鉢	11.4	7.8	—	—	底部は丸底を成す。体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部は内傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後細かい刷毛を施す。	(内)にぶい橙色7.5YR6/4 (外)にぶい黄橙色10YR6/4 1～3mm大の砂粒、石英粒を含む。	
30	9	13 E-2	ST2 整際	鉢	10.6	[7.4]	—	—	体部は内湾の後直線的に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。口縁部では細かい刷毛目が残る。 (外)撫でを施す。部分的に細かい刷毛目が残る。	(内・外)橙色7.5YR6/6 1～5mm大の砂粒、石英粒、紋色チャート粒を含む。	
31	9	14 A-1	ST2 張り出し部(南)	鉢	11.8	6.6	—	—	底部は丸味を持った尖底を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後撫で	(内・外)橙色5YR6/8 1～3mm大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
32	9	14 A-2	ST2 張り出し部(南)	鉢	11.4	7.1	—	1.4	底部は狭い平らな面を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)刷毛を施す。 (外)タタキ後撫でを施し、体部中位から下位に掛けては指頭圧痕が残る。	(内)にぶい黄橙色10YR7/4 (外)橙色7.5YR6/6 3mm大の砂粒、石英粒を含む。	
33	9	14 B-1	ST2 張り出し部(南)	鉢	11.3	6.8	—	3.2	底部は押し潰した平らな面を成す。体部は直線的に立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)細かい刷毛を施す。 (外)右上がりのタタキを施す。	(内・外)明黄褐色10YR7/6 5～10mm大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	

※［ ］内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
34	9	14 B-2	ST2 壁際	鉢	11.8	7.8	—	2.0	底部は狭い平らな面を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛を施す。(外)刷毛後撫でを施す。	(内)にぶい黄橙色10YR7/4 (外)にぶい黄橙色10YR6/4 1～3㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
35	9	14 C-1	ST2 壁際	鉢	10.6	7.0	—	3.2	底部は凹面を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は外傾した凹面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。(外)撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 1～7㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
36	9	14 C-2	ST2 張り出し部(北)	鉢	12.0	8.2	—	—	底部は実底を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は内傾する面を成す。	(内)刷毛を施す。(外)下位ではタタキ後刷毛を施し、上位ではタタキ後撫でを施す。	(内)橙色7.5YR6/6 (外)にぶい黄橙色10YR7/4 1～6㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
37	9	14 D-1	ST2	鉢	11.6	8.0	—	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)細い刷毛後撫でを施す。(外)撫でを施し、指頭圧痕を残す。	(内)にぶい黄橙色 10YR7/4 (外)にぶい黄色 2.5Y6/4 1－10㎜大の砂粒を含む。	
38	9	14 D-2	ST2 床面直上	鉢	13.2	8.3	—	—	体部は内湾して立ち上がる。口唇部は平らな面を成す。	(内)細かい刷毛後撫でを施す。(外)タタキ後撫で。	(内・外)にぶい橙色 10YR7/4 1～3㎜の石英粒、チャート粒を含む。	
39	9		ST2	鉢	12.4	[5.7]	—	—	体部は内湾して立ち上がる。口唇部は外傾する凹面を成す。	(内)横位又は縦位の刷毛後撫でを施す。(外)タタキを施す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR7/3 1～4㎜大の砂粒、赤色チャート粒を含む。	
40	9	19 B-1	ST2	鉢	15.4	7.4	—	—	底部はやや尖った丸底を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は外傾する平らな面を成す。	(内)粗い刷毛を施す。(外)細かい刷毛を施す。	(内・外)褐色7.5YR6/6 1～5㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
41	9		ST2 床面直上	鉢	14.0	[5.0]	—	—	体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)刷毛を施す。(口)横位の撫でを施す。	(内・外)橙色5YR6/6 0.5～2㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
42	9	19 B-2	ST2 床面直上	鉢	12.9	6.7	—	2.9	底部は平らな面を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。(外)右上がりのタタキ後撫でを施す。	(内)灰黄褐色10YR5/2 1～6㎜の砂粒、石英粒を含む。	
43	9		ST2 床面直上	鉢	13.0	[7.6]	—	—	体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部で内湾し、端部は丸く修める。	(内)横位又は縦位の刷毛後撫でを施す。(外)タタキを施す。(口)横位の刷毛目が残る。	(内)にぶい黄色 2.5Y6/4 (外)にぶい黄褐色 10YR5/3 1～4㎜大の砂粒を含む。	
44	9		ST2	鉢	16.8	9.7	—	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して立ち上がる。口縁部は外側にやや肥厚し、口唇部は外傾する面を成す。	(内)粗い刷毛後撫でを施す。(外)撫でを施すが、粗い刷毛目が残る。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR7/4 1～4㎜大の砂粒、赤色チャート粒を含む。	
45	9		ST2 床面直上	鉢	14.0	[8.0]	—	—	体部は内湾して立ち上がる。口唇部は平らな面を成し、外側に肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。(外)撫でを施し、箆状工具による圧痕が見られる。(口)横位の刷毛目が残る。	(内・外)橙色7.5YR6/6 1～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
46	9		ST2	鉢	17.0	[4.7]			体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口縁部分で器厚が薄くなる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛を施す。(外)横位のタタキを施す。	(内)にぶい黄橙色10YR7/4 (外)橙色7.5Y7/6 1～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
47	9		ST2 床面直上	鉢	18.0	[6.9]	—	—	体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛を施す。(外)タタキを施し、口縁部には指頭圧痕が見られる。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR6/4 1～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
48	9		ST2	鉢	15.8	[4.5]	—	—	体部は直線的に外上方に立ち上がる。口縁部で内湾し、端部は丸く修める。	(内)刷毛を施す。(外)細かい刷毛を施す。(口)内・外面及び端部に横位の撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR7/6 1～2㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
49	9	19 C-1	ST2	鉢	18.6	9.3	—	—	底部は尖り底を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は不明瞭な外傾する面を成す。	(内)刷毛状工具による撫でを施す。(外)撫でを施す。部分的に刷毛目が残る。	(内・外)橙色5YR6/6 1～6㎜大の砂粒、石英粒を含む。	

※〔 〕内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
50	9		ST2 壁際	鉢	17.4	[6.0]	—	—	体部はやや内湾して外上方に開く。口唇部は太く丸味を持つ。	(内)粗い刷毛後撫でを施す。 (外)撫でを施し、指頭圧痕を残す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR6/4 1～4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
51	9	19 C-2	ST2 床面直上	鉢	17.5	[7.5]	—	—	体部はやや内湾して立ち上がる口縁部は外側にやや肥厚する。	(内)粗い刷毛後に口唇部では横位の撫でを施す。 (外)右上がりのタタキ。後に口唇部では横位の撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 1～4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
52	10	19 D-1	ST2 床面直上	鉢	11.4	14.4	13.9	—	底部は尖底風の丸底を呈す。口唇部は部分的に平らな面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)縦位の刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。 (口)横位の刷毛目が見られる。	(内・外)明黄褐色10YR6/6 1～7㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
53	10		ST2	壺	12.5	[6.6]	12.8	—	口縁部は短く外上方に立ち上がる。口唇部は細く丸味を持つ。	(内)刷毛を施し、口唇部では横位の刷毛が見られる。 (外)タタキを施す。口縁部では後に撫でか。	(内・外)にぶい黄色 2.5YR6/3 1～5㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
54	10	19 D-2	ST2 床面直上	壺	12.8	13.5	12.0	1.8	底部は狭い平底を成す。頸部は「く」の字状に屈曲し、直線的に短く立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後丁寧な刷毛を施す。	(内・外)にぶい橙色 7.5YR6/4 1～5㎜大の砂粒、石英粒を含む。	内外面に赤色顔料の付着が見られる。
55	10	20 A-1	ST2 東部地山削り出し部	壺	12.4	15.9	12.6	[3.6]	底部は狭い面を成す。口縁部はやや外反する。端部は外傾する面を成し、外側に肥厚する。	(内)胴部では縦位、口縁部では横位の刷毛を施す。口唇部は外傾する面を成し、外側に肥厚する。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)明黄褐色10YR6/6 1～7㎜大の砂粒を含む。	
56	10		ST2 床面直上	壺	17.9	[8.5]	—	—	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部は外傾する面を成し、下方にやや肥厚する。	(内)指頭圧痕を残す。口縁部では横位の刷毛を施す。 (外)タタキを施し、口縁部では後に撫でを施す。	(内)黄橙色7.5YR7/8 (外)にぶい黄橙色 10YR5/4 1～5㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
57	10		ST2 床面直上	壺	13.0	[4.5]	—	—	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は外反する。口唇部は直立する面を成し、下方にやや肥厚する。	(内)刷毛を施す。口唇部では横位の撫でが見られる。 (外)外面は横位のタタキを施す。	(内・外)明黄褐色 10YR6/6 0.5～2㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
58	10		ST2	壺	13.4	[6.2]	—	—	頸部は「く」の字状に曲がる。口唇部は外側に肥厚し、外傾する面を成す。	(内)細かい刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後細かい刷毛を施す。	(内)橙色7.5YR6/6 (外)にぶい橙色7.5YR6/4 1～3㎜大の砂粒を含む。	外面に煤が付着する。
59	10		ST2 壁際	壺	16.6	[10.9]	20.0	—	頸部は「く」の字状に曲がり、口縁部はやや外反する。口唇部は外側に肥厚し、外傾する面を成す。	(内)胴部では指頭による撫でを施し、指頭圧痕を残す。口縁部は横位の刷毛後撫でを施す。 (外)横位又は右上がりのタタキを施す。 (口)横位の刷毛目が残る。	(内)明黄褐色10YR7/6 (外)橙色7.5YR7/6 1～7㎜の砂粒、石英粒を含む。	
60	10		ST2 床面直上	壺	11.7	[9.5]	10.0	—	頸部は「く」の字状に屈曲する。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)右上がりのタタキ後撫でを施す。	(内)にぶい黄橙色10YR7/4 (外)にぶい橙色7.5YR7/4 1～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
61	10	20 A-2	ST2 床面直上	壺	—	[17.2]	14.0	3.6	底部は平らな面を成す。頸部は緩やかに曲がる。	(内)頸部以下で撫でを施し、口縁部では刷毛目が残る。 (外)タタキを施す。	(内・外)にぶい黄褐色 10YR7/4 1～3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	

※［　］内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
62	10		ST2 床面直上	甕	17.8	[19.5]	21.6	—	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はやや外反する。口唇部は外側に肥厚し、外傾する面を成す。	(内)胴部では指頭による撫でを施し、上位に指頭圧痕を残す。口縁部は横位の刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後細かい刷毛を施す。	(内・外)にぶい黄橙色10YR6/4 1～4㎜大の砂粒、石英粒を含む。	外面に煤が多く付着する。
63	10	22 B-1	ST2 床面直上	甕	—	[21.5]	14.8	—	底部は丸底を呈す。頸部は緩やかに曲がる。	(内)細かい刷毛後撫でを施す。 (外)胴部中位以下で右下がり、上位では右上がりのタタキを施す。	(内・外)褐色7.5YR4/4 3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
64	10	18 B-1	ST2	甕	—	[9.8]	—	1.4	底部は狭い平らな面を成す。	(内)細かな刷毛後撫でを施す。 (外)細かな刷毛を施す。	(内)にぶい黄橙色10YR7/4 (外)にぶい黄橙色10YR6/4 1～3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
65	10		ST2	鉢？(底部)	—	[2.1]	—	—	底部は突出する。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内)橙色7.5YR6/6 (外) にぶい黄橙色10YR7/4 1～4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
66	10		ST2	甑(底部)	—	[3.6]	—	2.5	底部は狭い平らな面を成し、直径6㎜の円孔を焼成前に外側より穿つ。	(内)指頭による撫でを施し、指頭圧痕を留める。 (外)右上がりのタタキを施す。	(内)にぶい黄橙色10YR6/4 (外)褐灰色7.5YR6/1 1～7㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
67	10		ST2	甕(底部)	—	[3.8]	—	7.0	底部は平底を成す。	(内)刷毛を施す。 (外) タタキを施す。	(内)にぶい黄橙色10YR7/4 (外)黄褐色2.5Y5/4 1～2㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
68	11	22 C-1	ST2	甕	—	[25.8]	18.8	—	底部は丸底を呈す。頸部は「く」の字状に曲がる。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外) タタキを施す。	(内・外)明褐色7.5YR7/6 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
69	11		ST2	甕	28.0	[12.1]	29.6	—	最大径を胴部中位に持つ。口唇部は外傾する面を成す。	(内)細い刷毛後撫でを施す。 (外)胴部でタタキ。口縁では刷毛を施す。 (口)撫でが施される。	(内・外)橙色7.5YR7/6 8㎜大の砂粒、赤色チャート粒、石英粒を含む。	
70	11		ST2 床面直上	甕	—	[19.0]	17.0	—	頸部は「く」の字状に曲がる。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)褐灰色10YR6/1 (外)褐色2.5YR8/4 1～12㎜大の砂粒を含む。精緻。	胴部中位以上に煤が付着する。
71	11		ST2	壺	—	[25.0]	29.6	4.0	底部は狭い平らな面を成す。最大径は胴部の中位やや上に持つ。	(内)細い刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後細かい刷毛を施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 6㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
72	11		ST2 埋際	壺(底部)	—	[9.7]	—	3.0	底部は狭い平底を成す。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)にぶい褐色7.5YR5/4 1～3㎜大の砂粒、石英粒、を含む。	
73	11		ST2 床面直上	壺(底部)	—	[11.0]	—	4.0	底部は狭い平底を成す。頸部は直線的に外上方に立ち上がる。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)黄褐色10YR5/6 (外)黄橙色7.5Y7/8 1～3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
74	11		ST2 床面直上	壺(底部)	—	[22.5]	—	4.9	底部は狭い平底を成す。胴部は内湾気味に外上方に立ち上がる。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 1～8㎜大の砂粒、石英粒、を含む。	
75	12		ST2	小壺	9.0	[7.9]	9.6	—	体部は内湾して立ち上がる。頸部の湾曲は緩やかで、口縁部はやや外反する。口唇部は外傾する面を成す。	(内)胴部で指頭による撫でを、口縁部では施磨きを施す。 (外)縦位の施磨きを施す。	(内)にぶい黄褐色10YR7/4 (外)淡黄色2.5YR8/4 1㎜大の砂粒、石英粒を含む。精緻。	
76	12		ST2	敲石	全長13.3	全幅9.4	全厚7.0	重量1,260 g	端部を中心として顕著な敲痕が残る。2～3方向の擦痕が存在し、赤色顔料が残る。			砂岩製。
77	12		ST2	鉄鏃	全長[3.4]	全幅[最大][1.0]	全厚[0.2]	重量[1.9] g	有茎鏃で頭部は欠損する。			

※［ ］内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
78	14	14 E-1	ST3 高床部	鉢	10.0	5.5	—	2.6	底部は平らな面を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は太く丸味を持って修める。	(内)刷毛を施す。 (外)タタキ後撫でを施す。亀裂が入る。	(内)明赤褐色2.5YR5/6 (外)橙色7.5YR6/6 3㎜大の砂粒・石英粒を含む。	
79	14	14 E-2	ST3	鉢	9.2	5.2	—	2.1	底部はやや突出し中央の盛り上がった面を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は太く丸味を持って修める。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)撫でを施す。亀裂が多く見られる。	(内・外)にぶい黄橙色10YR7/4 0.5～2㎜大の砂粒を含む。	
80	14	15 A-1	ST3	鉢	10.2	6.2	10.4	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は細く丸く修める。	(内)刷毛を施す。 (外)撫でを施す。亀裂が入り、表面の剥落が激しい。	(内・外)明黄褐色10YR6/6 0.5～2㎜大の砂粒・石英粒・赤色チャート粒を含む。	
81	14	15 A-2	ST3	鉢	11.0	5.1	—	3.0	底部は不安定な面を成す。体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部は太く丸味を持って修める。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)にぶい黄褐色10YR5/3 5㎜大の砂粒を含む。	
82	14	15 B-1	ST3 高床部	鉢	11.8	6.8	—	—	底部はやや突出する。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は細く丸味を持って修める。	(内)刷毛を施す。 (外)撫でを施す。亀裂が多く見られる。	(内・外)明黄褐色10YR6/6 4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
83	14	15 B-2	ST3	鉢	11.0	6.6	11.2	3.1	底部は突出した平らな面を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は凹面をなす。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内)にぶい黄橙色10YR5/4 (外)にぶい黄橙色10YR5/4 4㎜大の砂粒・石英粒を含む。	
84	14	15 C-1	ST3 高床部	鉢	11.0	5.5	—	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)細かい刷毛後撫でを施す。 (外)撫でを施す。口縁部に指頭圧痕、底部に鉈圧痕を留める。	(内・外)にぶい黄褐色7.5YR6/4 0.5～2㎜大の砂粒・石英粒・赤色チャート粒を含む。	
85	14	15 C-2	ST3	鉢	11.3	7.9	11.6	2.3	底部は平らな面を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)細かい刷毛後粗い刷毛を施す。 (外)撫でを施す。	(内・外)にぶい橙色7.5YR6/4 4㎜大の砂粒・石英粒・赤色チャート粒を含む。	
86	14	15 D-1	ST3	鉢	13.4	6.0	—	3.7	底部は高台状にやや突出した平坦面を成す。体部は内湾して立ち上がる。口縁部は幅の狭い平らな面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)明赤褐色5YR5/6 5㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
87	14	15 D-2	ST3	鉢	12.4	6.0	—	3.7	底部は狭い平らな面を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛を施す。 (外)撫でを施し、指頭圧痕を残す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 3㎜大の砂粒、赤色チャート粒を含む。	
88	14	15 E-1	ST3 壁際	鉢	12.8	5.1	—	4.8	底部は安定した平らな面を成す。体部はやや内湾して、外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)撫でを施す。	(内・外)にぶい黄橙色10YR6/4 0.5～3㎜大の砂粒を含む。	
89	14	15 E-2	ST3	鉢	14.0	5.7	—	4.2	底部は狭い平らな面を成す。体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛を施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)にぶい黄橙色10YR6/4 5㎜大の砂粒を含む。	
90	14	16 A-1	ST 3	鉢	15.3	6.0	—	3.3	底部は安定した面を成す。体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部は外傾する凹面を成す。	(内)刷毛を施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内)にぶい赤褐色5YR5/4 (外)にぶい褐色10YR5/4 5㎜大の砂粒・石英粒・チャート粒を含む。	
91	14	16 A-2	ST3 壁際	鉢	14.4	6.9	—	—	底部は中央が突出する。口唇部は平らな面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)にぶい橙色7.5YR6/4 0.5～4㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
92	14	16 B-1	ST3	鉢	14.4	7.5	—	4.2	底部は高台状に突出した平坦面を成す。体部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)細かい刷毛を施す。 (外)撫でを施す。亀裂が多く見られる。	(内・外)明黄褐色10YR7/6 5㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
93	14	16 B-2	ST3	鉢	15.0	7.2	—	3.4	底部は不明瞭な平坦面を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は平らな面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内)にぶい褐色7.5YR5/4 (外)にぶい黄褐色10YR5/4 5㎜大の砂粒・石英粒・赤色チャート粒を含む。	

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	脚径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
94	14	16 C-1	ST3 床面直上	鉢	17.0	7.2	—	—	底部は丸底を成す。体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
95	14	16 C-2	ST3 壁際	鉢	16.0	7.5	—	3.7	底部は突出した面を成す。口縁部は外傾する面を成す。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内)赤橙色10YR6/8 (外)橙色5YR6/8 3㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	外面に煤が付着する。底部に植物繊維圧痕が見られる。
96	14	16 D-1	ST3 高床部	鉢	16.2	8.0	—	2.2	底部は不明瞭な平底を成す。体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口唇部はやや外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)撫でを施す。指頭圧痕を留める。	(内)黄橙色7.5YR7/8 (外)黄橙色10YR7/8 7㎜大の砂粒、石英粒、赤チャート粒を含む。	
97	14	16 D-2	ST3	鉢	17.0	8.4	—	—	底部は丸底を成す。体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)細かい刷毛を施す。	(内・外)にぶい黄橙色10YR7/4 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒・赤色チャート粒を含む。	
98	14	16 E-1	ST3 壁際	鉢	16.6	7.5	—	3.7	底部は中央のやや窪んだ安定した面を成す。体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒・赤色チャート粒を含む。	
99	14	20 B-1	ST3 床面直上	鉢	19.0	9.0	—	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して立ち上がる。口縁部は平らな面を成す。	(内)刷毛後箆磨きを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。体部上位から口縁部に掛けて縦位の箆磨きが施される。	(内・外)橙色7.5YR8/6 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
100	14	20 B-2	ST3 高床部	鉢	20.2	10.2	—	—	底部は丸底を成す。体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)細かい刷毛を施す。 (外)撫でを施し、指頭圧痕を残す。底部に弱い削りが見られる。	(内・外)橙色7.5YR6/6 5㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
101	15	20 C-1	ST3 高床部	鉢	18.0	4.9	—	—	底部は丸底を成す。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。皿タイプ。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。底部で弱い削りが見られる。	(内・外)にぶい黄橙色10YR7/4 5㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
102	15	20 C-2	ST3	鉢	9.6	10.5	10.0	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は太く丸味を持って終める。湯飲みタイプ。	(内)細かい縦毛後撫でを施す。 (外)タタキ後縦毛を施す。	(内・外)明赤褐色5YR5/6 3㎜大の砂粒を含む。	煤が付着する。
103	15		ST3	鉢(底部)	—	[4.5]	—	—	底部は丸底を成す。	(内)刷毛を螺旋状に施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)にぶい橙色10YR6/4 4㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
104	15	16 E-2	ST3	鉢(底部)	—	[6.0]	—	5.0	底部は突出した平坦面を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 0.5～2㎜大の砂粒を含む。	
105	15		ST3	鉢(底部)	—	[5.1]	—	2.8	底部は平らな面を成す。	(内)撫でを施す。一部に刷毛状工具による圧痕を留める。 (外)撫でを施す。	(内・外)明褐色7.5YR5/6 3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
106	15		ST3 中央穴	鉢(底部)	—	[7.0]	—	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して立ち上がる。	(内)細かい刷毛を施す。 (外)タタキを施す。	(内)明赤褐色5YR5/6 (外)橙色7.5YR6/8 0.5～2㎜大の砂粒・石英粒を含む。	
107	15	17 A-1	ST3	鉢	14.6	9.4	—	4.3	底部は安定した平らな面を成す。体部はやや内湾して外上方に立ち上がり、口縁部は短く直線的に外上方に開く。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)明赤褐色5YR5/6 0.5～3㎜大の砂粒を含む。	
108	15	20 D-1	ST3	鉢	18.6	12.1	18.4	—	底部はやや突出した丸底を呈す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口縁部が短く外反する。	(内)刷毛を施す。口縁部では横位の縦毛目が残る。 (外)撫でを施す。亀裂が入る。口縁部は横位の撫でを施し、指頭圧痕が残る。	(内)にぶい黄橙色10YR7/4 (外)橙色7.5YR6/6 0.5～3㎜大の砂粒・石英粒を含む。	

※［　］内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
109	15	20 D-2	ST3	甕	15.0	17.0	16.4	—	底部は突出する。先端部に直径8㎜の円孔を穿つ。口縁部は内湾して内上方に立ち上がる。口唇部は内傾する面を成し、刻みが施される。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内)明褐色7.5YR5/6 (外)にぶい黄橙色10YR6/4 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
110	15	21 A-1	ST3	甕(底部)	—	[12.5]	—	—	底部は尖り気味の丸底を成す。底部に直径5㎜の円孔が穿たれており、この横には直径3㎜の不貫通孔が存在する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)黄灰色2.5Y4/1 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
111	15		ST3 床面直上	甕	—	[10.0]	—	3.4	底部は狭い平らな面を成す。底部中央に直径8㎜の円孔を穿つ。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 4㎜大の砂粒、チャート粒、石英粒を含む。	
112	15		ST3 壁際	甕(底部)	—	[3.2]	—	2.4	底部は狭い平らな面を成す。底部の端寄りに直径6.5㎜の円孔を穿つ。	(外)タタキを施す。	(内)褐灰色10YR4/1 (外)にぶい黄褐色10YR5/3 3㎜大の石英粒、赤色チャート粒を含む。	
113	16		ST3	甕	11.6	15.4	13.2	2.3	底部は狭い平らな面を成す。口縁部は直線的に短く外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。焼成後に胴部上位に1.3×2.3㎝の規模を持つ穴が開く。	(内)刷毛を施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。(刷毛目は胴部中位にのみ見られる。)	(内)黄灰色2.5Y4/1 (外)黒褐色2.5Y3/1 5㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
114	16	21 A-2	ST3	甕	11.3	16.0	13.0	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して立ち上がる。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に短く外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、下方に肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)にぶい黄色2.5Y6/3 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
115	16	21 B-1	ST3	甕	12.0	16.2	13.8	2.5	底部は狭い平底を成す。口縁部は短く外反する。口唇部は丸く修め、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)にぶい黄橙色10YR5/3 (外)黒褐色10YR3/2 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	胴部中位以上には煤が付着する。
116	16	21 B-2	ST3	甕	12.4	17.7	12.9	2.4	底部は狭い平底を成す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側に肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施し、胴部中位以下には指頭圧痕が残る。 (外)タタキを施し、後に口縁部では刷毛を施す。 (口)刷毛目が残る。	(内)灰黄褐色10YR5/2 (外)にぶい黄橙色7.5YR6/3 0.5～4㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
117	16	21 C-1	ST3 床面直上	甕	11.6	18.4	13.7	2.9	底部は狭い平らな面を成す。頸部は緩やかに屈曲し、口縁部は直線的に短く外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)にぶい黄橙色10YR6/3 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
118	16		ST3 壁際	甕	12.0	17.1	13.0	2.6	底部は狭い平らな面を成す。頸部は緩やかに曲がり、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部はやや内傾する面を成す。	(内)撫でを施す。口縁部は刷毛目を残す。 (外)タタキを施す。	(内)黒褐色10YR3/2 (外)にぶい黄褐色10YR5/4 0.5～4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
119	16	24 A-1	ST3	甕	13.0	21.5	14.9	—	底部は丸底を成す。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。 (口)刷毛目が残る。	(内・外)にぶい褐色7.5YR5/4 0.5～6㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
120	16	24 A-2	ST3	甕	13.6	19.7	15.4	3.5	底部は狭い平らな面を成す。頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側に肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。 (口)刷毛目が残る。	(内・外)橙色7.5YR6/6 0.2～5㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
121	16	24 B-1	ST3 床面直上	甕	14.0	19.6	14.6	2.7	底部は狭い平底を成す。頸部は緩やかに曲がり、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は丸く修め、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)橙色10YR6/8 0.5～8㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を多く含む。	胴部中位と口縁部に煤の付着が顕著。
122	16	24 B-2	ST3	甕	11.0	[17.0]	15.3	—	頸部は「く」の字状に曲がり、直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)撫で整施す。口縁部は横位の刷毛目を残す。 (外)タタキを施す。	(内・外)褐灰色10YR4/1 2㎜大の砂粒、石英粒を含む。	外面の胴部中位以上に煤が付着する。

※［ ］内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
123	16	24 C-1	ST3 壁際	甕	13.0	[15.0]	17.4	—	口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。	(内)刷毛後撫でを施す。口縁部では刷毛目を残す。 (外)タタキ後刷毛を施す。口縁部では指頭による撫でを施し、圧痕を留める。	(内・外)にぶい橙色 7.5YR6/4 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
124	16		ST3	甕	13.0	[12.0]	14.8	—	頸部は「く」の字状に曲がり、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施し、部分的に撫でを施す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR6/4 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
125	17	24 C-2	ST3	甕	12.6	20.0	15.1	2.5	底部は不明瞭な平底を成す。頸部は「く」の字状に曲がり、口縁部は短く外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、下方に肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。 (口)刷毛目が残る。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR6/3 3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
126	17	24 D-1	ST3	甕	13.0	22.4	15.8	3.0	底部は狭い平らな面を成す。頸部は「く」の字状に曲がり、直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。 (口)刷毛目が残る。	(内・外)橙色5YR6/6 1～6㎜大の砂粒、石英粒を含む。	胴部中位に煤が付着する。
127	17	24 D-2	ST3	甕	14.4	20.2	15.1	2.5	底部は不明瞭な狭い平底を成す。口縁部は外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)撫でを施す。口唇部では横位の刷毛目が見られる。 (外)タタキ後刷毛を施す。口縁部には(指頭による?)圧痕を留める。 (口)撫でを施す。	(内)黄橙色7.5YR7/8 (外)にぶい黄橙色 10YR5/4 1～4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
128	17	22 C-2	ST3 床面直上	甕	15.0	[23.3]	17.8	—	頸部は「く」の字状に曲がり、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。口縁部では後に撫でを施す。 (口)刷毛目を留める。	(内)赤褐色5YR4/6 (外)褐灰色5YR4/1 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
129	17	22 C-3	ST3 床面直上	甕	15.0	22.5	18.0	4.2	底部は狭い面を成す。口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)粗い刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR7/4 0.5～8㎜大の砂粒・石英粒を含む。	胴部中位以上に煤が付着する。 胴部下位は表面剥落が激しい。
130	17		ST3	甕	14.6	[25.0]	18.0	—	口縁部は外反して外上方に立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。 (口)横位の細い刷毛を留める。	(内)にぶい橙色7.5YR7/4 (外)浅黄橙色10YR8/4 0.5～3㎜大の砂粒・石英粒・赤色チャート粒を含む。	胴部中位以上に煤が付着する。
131	17	23 A-1	ST3 中央穴	甕	17.6	24.7	20.2	3.0	底部は狭い平底を成す。頸部は緩やかに曲がり、口縁部は外反して外上方に立ち上がる。口唇部は丸く修める。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。 (口)撚状原体の圧痕を留める。	(内・外)橙色7.5YR6/6 0.5～9㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
132	17	23 A-2	ST3 中央穴	甕	17.0	25.2	19.2	4.2	底部は狭い平底を成す。頸部は「く」の字状に曲がり、口縁部は外反して、外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。口縁部では細かい刷毛目。 (外)タタキ後刷毛を施す。口縁部では細かい刷毛目。 (口)細かい刷毛を施す。	(内・外)明黄褐色10YR6/6 5㎜大の砂粒、石英粒を含む。	胴部中位以上に煤が付着する。
133	18	23 A-3	ST3	甕	16.8	25.2	20.0	2.0	底部は狭い平底を成す。口縁部は外反して立ち上がる。口唇部は直立から内傾する面を成し、下方にやや肥厚する。	(内)刷毛を施す。 (外)タタキ後主に刷毛を施し、口縁部では後に撫でを施す。	(内)褐灰色10YR5/1 (外)明黄褐色7.5YR7/6 3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	

※［　］内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
134	18	23 B-1	ST3	甕	15.1	27.0	20.4	4.2	底部は不明瞭な平底を成す。頸部は緩やかに曲がり、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側に肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。口縁部では刷毛目を残す。 (外)タタキ後刷毛を主に施すが、口縁部では後撫でを施す。 (口)刷毛目を残す。	(内・外)にぶい黄褐色 10YR4/3 0.5～6㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	胴部中位に煤が付着する。
135	18	23 B-2	ST3	甕	12.6	23.4	20.8	—	底部は丸底を成す。胴部は中位で最大径を持ち球形を成す。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。 (口)横位の撫でを施す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR7/4 0.5～3㎜大の砂粒、4㎜大の石英粒、赤色チャート粒を含む。	
136	18	23 B-3	ST3 中央穴	甕	14.4	21.5	18.3	—	底部は不明瞭な平底を成す。胴部は球形を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は内傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)胴部でタタキを施し、頸部以上で刷毛を施す。	(内・外)橙色7.5YR7/4 0.5～6㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
137	18	23 C-1	ST3 高床部	甕	17.6	[25.0]	21.6	—	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)橙色7.5YR7/6 (外)にぶい黄橙色10YR5/3 0.5～6㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
138	18	23 C-2	ST3 中央穴	甕	15.0	29.3	20.0	3.0	底部は狭い平底を成す。頸部は「く」の字状に曲がり、口縁部は外反する。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。 (口)刷毛目が残る。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR6/4 0.5～6㎜大の砂粒、石英粒を含む。	胴部中位以上には煤が付着する。
139	19	25 B-1	ST3 中央穴	甕	14.6	33.7	26.1	3.2	底部は狭い平らな面を成す。口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫で。 (外)タタキ後刷毛。口縁部では刷毛。 (口)横位の刷毛。	(内)にぶい橙色7.5YR7/4 (外)橙色7.5YR7/6 3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
140	19		ST3	甕	14.8	[7.0]	—	—	頸部は「く」の字状に屈曲し、口縁部は直線的に外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側に肥厚する。	(内)刷毛を施す。 (外)タタキを施す。口縁部では後に撫でを施す。 (口)指頭圧痕を留める。	(内)にぶい黄橙色 10YR7/4 (外)にぶい黄橙色 10YR7/3 0.5～2㎜大の砂粒・石英粒を含む。	煤が付着する。
141	19		ST3 床面直上	甕	14.0	[9.0]	—	—	頸部は「く」の字状に曲がり、口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)刷毛を施す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR7/4 5㎜大の砂粒、石英粒、緑色チャート粒を含む。	胴部上位から口縁部にかけて煤が付着する。
142	19	21 C-2	ST3 高床部	甕	15.0	[11.0]	19.6	—	頸部は「く」の字状に曲がり、口縁部は外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側に肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施し、口縁部では刷毛目が残る。 (外)タタキを施し、後に口縁部では指頭による押さえを施す。 (口)刷毛目が残る。	(内)にぶい黄褐色10YR7/3 (外)にぶい黄褐色10YR6/4 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	外面の胴部中位以上口縁部に至まで煤が付着する。
143	19	25 B-2	ST3	甕	16.2	27.8	23.2	6.0	底部は不明瞭な狭い平底を成す。頸部は「く」の字状に曲がり、口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施し、底部では指頭圧痕を留める。 (外)タタキ後刷毛を施す。口縁部では撫でが見られる。 (口)刷毛目が残る。	(内・外)明赤褐色 5YR5/6 5㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
144	19		ST3 高床部	甕	—	[18.3]	26.0	4.5	底部は狭い平らな面を成す。胴部は球形を指向する。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)明赤褐色 5YR5/6 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
145	20		ST3	甕(底部)	—	[8.5]	—	2.6	底部は狭い平らな面を成す。	(内)粗い刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)にぶい褐色7.5YR5/4 (外)褐色7.5YR4/3 5㎜大の砂粒を含む。	胴部中位に煤が付着する。
146	20	18 B-2	ST3 中央穴	甕	—	[12.6]	—	3.4	底部は中央の突出した不安定な面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。部分的に篦状工具による圧痕を留める。	(内)にぶい黄橙色 10YR7/3 (外)黒褐色10YR3/1 0.5～4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	胴部中位に煤が付着する。

※［　］内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	胴径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
147	20	18 C-1	ST3 高床部	甕 (底部)	—	[8.5]	—	3.0	底部は狭い平らな面を成す。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)褐灰色7.5Y4/1 (外)にぶい橙色7.5YR6/4 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
148	20	18 C-2	ST3	甕	—	[13.0]	—	2.4	底部は狭い平らな面を成す。	(内)撫でを施し、指頭圧痕を留める。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)暗灰黄色2.5Y4/2 (外)灰褐色7.5YR4/2 0.5～5㎜大の砂粒を含む。	一部に煤が付着する。
149	20	22 B-2	ST3	甕	—	[17.3]	—	3.6	底部は狭い平底を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)にぶい黄橙色10YR6/3 0.5～2㎜大の砂粒を含む。	
150	20	18 D-1	ST3 中央穴	甕 (底部)	—	[13.4]	—	3.0	底部は狭い平らな面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)にぶい黄橙色10YR7/3 (外)にぶい黄橙色10YR6/4 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
151	20	22 B-3	ST3 床面直上	甕	—	[22.0]	17.9	2.3	底部は中央のやや突出した面を成す。頸部は緩やかに曲がる。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)にぶい赤褐色5YR5/3 5㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
152	20	23 C-3	ST3	甕	—	[20.2]	19.3	3.0	底部は狭い平底を成す。	(内)撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内)にぶい黄橙色10YR7/3 (外)にぶい黄橙色10YR7/2 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
153	20	25 A-1	ST3	甕	—	[22.2]	26.8	3.1	底部は不明瞭で中央部がやや突出する。頸部は「く」の字状に曲がる。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。胴部下位に籠状原体の圧痕を留める。	(内・外)にぶい黄橙色10YR7/3 0.5～4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
154	21	25 C-1	ST3	壺	18.4	29.5	22.5	2.8	底部は狭い平らな面を成す。口縁部は外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。口縁部では刷毛が残る。 (外)タタキ後刷毛を施す。 (口)横位の撫で。	(内・外)橙色7.5YR6/6 5㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
155	21	25 C-2	ST3 床面直上	壺	16.7	[32.5]	29.2		口縁部は外反して立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。胴部上位では指頭圧痕が残る。 (外)タタキ後刷毛を施す。胴部上位と口縁部では磨きを施す。 (口)横位の撫で。	(内)褐灰色10YR6/1 (外) 浅黄橙色10YR8/3 0.5～3㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
156	21	18 D-2	ST3	壺 (口縁)	22.8	[9.0]	—	—	口縁部は外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)刷毛後撫でを施す。 (口)強い横位の撫でを施す。	(内)黄橙色10YR8/6 (外)橙色5YR7/8 0.5～3㎜大の砂粒・石英粒・赤色チャート粒を含む。	
157	21	18 E-1	ST3	壺 (口縁)	22.6	[8.6]	—	—	口縁部は外反して外上方に立ち上がる。口唇部はほぼ直立する面を成し、下方に肥厚する。	(内)刷毛後磨きを施す。頸部に指頭圧痕を留める。 (外)刷毛後磨きを施す。 (口)横位の撫でを施す。	(内)浅黄橙色7.5YR8/6 (外)橙色7.5YR7/6 0.5～5㎜大の砂粒・石英粒・赤色チャート粒を含む。	
158	21	21 D-1	ST3	壺 (底部)	—	[14.0]	—	4.0	底部は狭い平底を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)黄灰色2.5Y4/1 (外)黄橙色7.5YR7/8 5㎜大の砂粒を含む。	
159	21	18 E-2	ST3 埋際	壺	—	[12.0]	15.1	—	底部は丸底を成す。胴部の中位が外側に張り出す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)にぶい褐色7.5YR6/4 (外)にぶい褐色7.5YR5/4 3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
160	21	25 A-3	ST3 床面直上	壺 (底部)	—	[22.8]	29.0	5.0	底部は狭い平底を成す。胴部は球形を指向する。	(内)細かい刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)にぶい褐色7.5YR5/4 4㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
161	22		ST3 床面直上	台石	全長 38.6	全幅 34.8	全厚 10.5	重量 20.5kg				砂岩。

※［ ］内の数値は残存値。

金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	脚径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
162	22		ST3	支脚(支部)	全長 [10.3]	全幅 [3.8]	—	—		(外) タタキを施す。部分的に撫でを施し、圧痕を留める。	(内)暗褐色7.5YR3/3 4㎜大の砂粒を含む。	
163	22		ST3	鉄鏃	全長 [3.8]	全幅 [6.0]	全厚 [0.4]	重量 [2.3]g	有茎鏃で頭部は欠損。			
164	24	17 A-2	ST4	台付鉢	9.0	[4.5]	—	—	台部は接合部分から欠損する。体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は太く丸味を持って修める。	(内)刷毛を施す。口縁部は横位の撫で。 (外)タタキ後刷毛を施す。口縁部は横位の撫で。	(内・外)にぶい褐色 7.5YR5/4 4㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
165	24	17 B-1	ST4	鉢	10.0	7.1	—	—	底部はやや尖った丸底を成す。体部は内湾して立ち上がる。口縁部は凹面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)暗褐色10YR3/3 0.5～2㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
166	24	17 B-2	ST4	鉢	11.5	6.6	—	1.3	底部は狭い平らな面を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)粗い刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)黄褐色2.5YR5/4 0.5～3㎜の砂粒を含む。	
167	24	17 C-1	ST4	鉢	11.0	7.0	—	2.4	底部は不明瞭な面を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)口縁部に細かな刷毛、体部に粗い刷毛を施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)褐色7.5YR4/4 2㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
168	24	17 C-2	ST4	鉢	12.3	6.3	—	3.0	底部はやや突出した面を成す。体部は内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)にぶい赤褐色 5YR4/4 0.5～2㎜大の砂粒を含む。	
169	24	17 D-1	ST4 床面直上	鉢	13.0	5.9	—	3.9	底部はやや突出した平底を成す。体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)刷毛を施す。 (外)撫でを施す。	(内・外)橙色7.5YR6/6 6㎜大の砂粒・石英粒・赤色チャート粒を含む。	
170	24	17 D-2	ST4 床面直上	鉢	17.6	7.5	—	—	底部は平底を成す。体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)粗い刷毛後撫でを施す。 (外)撫でを施し、指頭圧痕を留める。底部では刷毛目が残る。 (口)横位の撫でを施す。	(内・外)明赤褐色5YR5/6 3㎜の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
171	24		ST4 床面直上	鉢	15.0	[6.6]	—	—	体部はやや内湾して立ち上がる。口唇部は外傾した面を成し、外側にやや肥厚する。	(内)刷毛を施す。 (外)撫でを施す。指頭圧痕を留める。	(内)にぶい黄橙色 10YR6/3 (外)明黄褐色10YR6/6 3㎜大の砂粒を含む。	
172	24	17 E-1	ST4	鉢	15.0	8.4	—	—	底部は丸底を成す。体部はやや内湾して外上方に立ち上がる。口唇部は凹面を成す。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内)明赤褐色5YR5/6 (外)黄褐色10YR5/6 0.5～2㎜大の砂粒を含む。	
173	24	17 E-2	ST4 床面直上	鉢	15.8	6.0	—	—	底部は丸底を成す。体部は内湾して立ち上がる。口唇部は面を成す。	(内)細かい刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後撫でを施す。	(内・外)褐色7.5YR4/4 6㎜の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
174	24	25 A-2	ST4 床面直上	甕	15.0	22.5	15.6	2.0	底部は狭い不明瞭な面を成す。頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部はやや外反して外上方に立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し外側に肥厚する。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。部分的に刷毛目が残る。	(内・外)橙色5YR6/6 1～6㎜大の砂粒、石英粒を含む。	胴部中位から口縁部に掛けて煤が付着する。
175	24	21 D-2	ST4 床面直上	甕(口縁)	15.0	[12.3]	17.0	—	頸部は「く」の字状に屈曲する。口縁部は直線的に外上方へ立ち上がる。口唇部は外傾する面を成し外側に肥厚する。	(内)刷毛を施す。 (外)タタキを施す。	(内・外)にぶい褐色 7.5YR5/4 0.5～6㎜大の砂粒、石英粒、赤色チャート粒を含む。	
176	24	22 A-1	ST4	甕(底部)	—	[10.9]	—	2.8	底部は突出した面を成す。	(内)指頭による撫でを施す。 (外)タタキ後刷毛を施す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR5/4 6㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
177	24	22 A-2	ST4	甕	—	[16.5]	17.0	2.4	底部は狭い平らな面を成す。	(内)刷毛後撫でを施す。 (外)タタキを施す。	(内)にぶい黄橙色10YR6/4 (外)黄褐色10YR5/6 4㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
178	24		ST4	壺	—	[28.8]	30.8	5.6	底部は狭い平らな面を成す。体部は球形を指向する。	(内)撫でを施す。 (外)タタキ後細かい刷毛を施す。	(内・外)橙色5YR6/6 0.5～2㎜大の砂粒を含む。	
179	25		ST4 床面直上	紡錘車	直径 6.0	厚さ 1.0	孔径 1.0	重量 33.7g	中央の軸通しは焼成前穿孔。	(A)撫でを施す。 (B)刷毛目を残す。	(内・外)にぶい黄色 2.5YR6/4 3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	

※［　］内の数値は残存値。

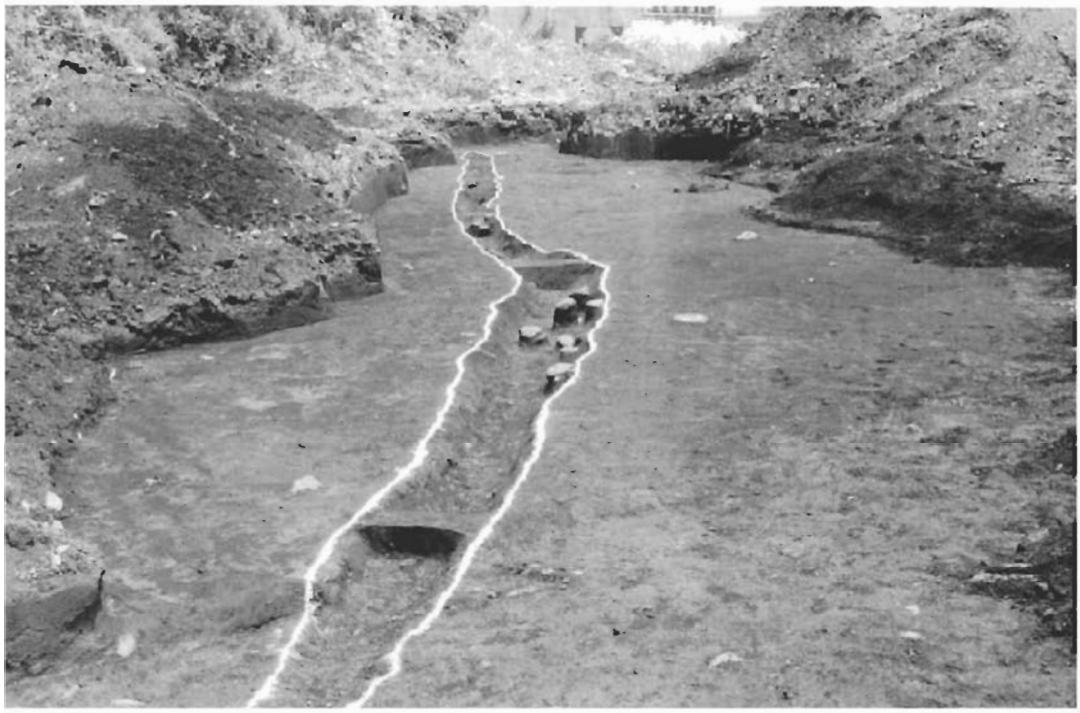
金地遺跡遺物観察表

遺物番号	fig. no	pl. No	出土地点	器種	法量(cm) 口径	器高	脚径	底径	形態的特徴	調整	胎土	その他
180	25		ST4 床面直上	紡錘車	直径 6.2	厚さ 0.8	孔径 1.0	重量 33.8 g	中央の輪通しは焼成前穿孔。	(A)刷毛後撫でを施し、指頭圧痕を残す (B)撫でを施す。	(内・外)にぶい黄橙色 10YR6/4 3㎜大の砂粒、石英粒を含む。	
181	25		ST4	砥石	全長 14.4	全幅 2.0	全厚 2.0	重量 90 g	使用面2面。1面には長軸に平行な線条が見られる。1面には長軸に対して斜位の線条が見られる。			泥岩製。
182	25		ST4	台石	全長 37.5	全幅 32.8	全厚 10.6	重量 20.05kg				砂岩。
183	31		包含層 1-7 グリッド	甕	18.2	[12.3]	19.8	—	頸部はやや緩やかに屈曲する。口縁部は外反する。口径部は外傾する面を成し、外側に肥厚する。	(内)細い刷毛後指頭による撫でを施す。 (外)横位又は右上がりのタタキを施す。 (口)横位の刷毛。	(内・外)にぶい黄褐色 10YR5/3 0.5～2㎜の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	
184	31		包含層 C-1 グリッド	甕	—	[9.5]	—	4.0	底部は狭い平らな面を成す。	(内)指頭による撫でを施す。 (外)底部に至るまでタタキを施す。	(内・外)にぶい黄褐色 10YR5/4 1～5㎜大の砂粒、石英粒、チャート粒を含む。	

※［　］内の数値は残存値。

図　　版

A



SD1　半截状況（北半）

B

SD1　半截状況（南半）

pl. 2

A

ST1　検出状況

B

ST1　半截状況

A

ST2　北側セクション

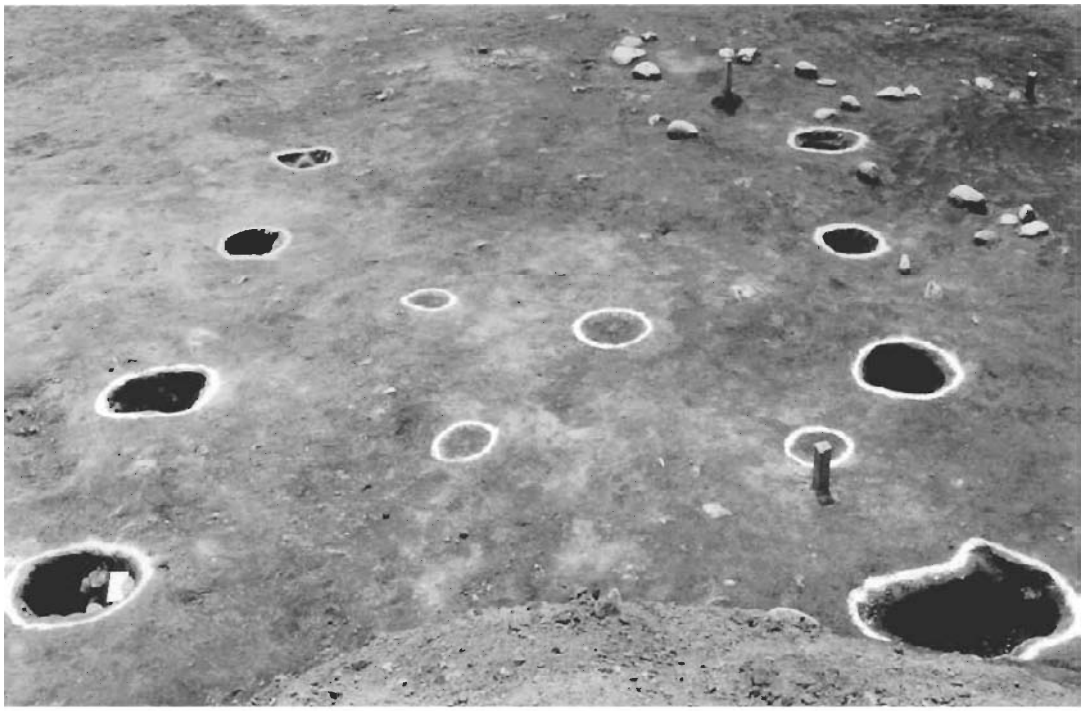
B

ST2　南北セクション

A

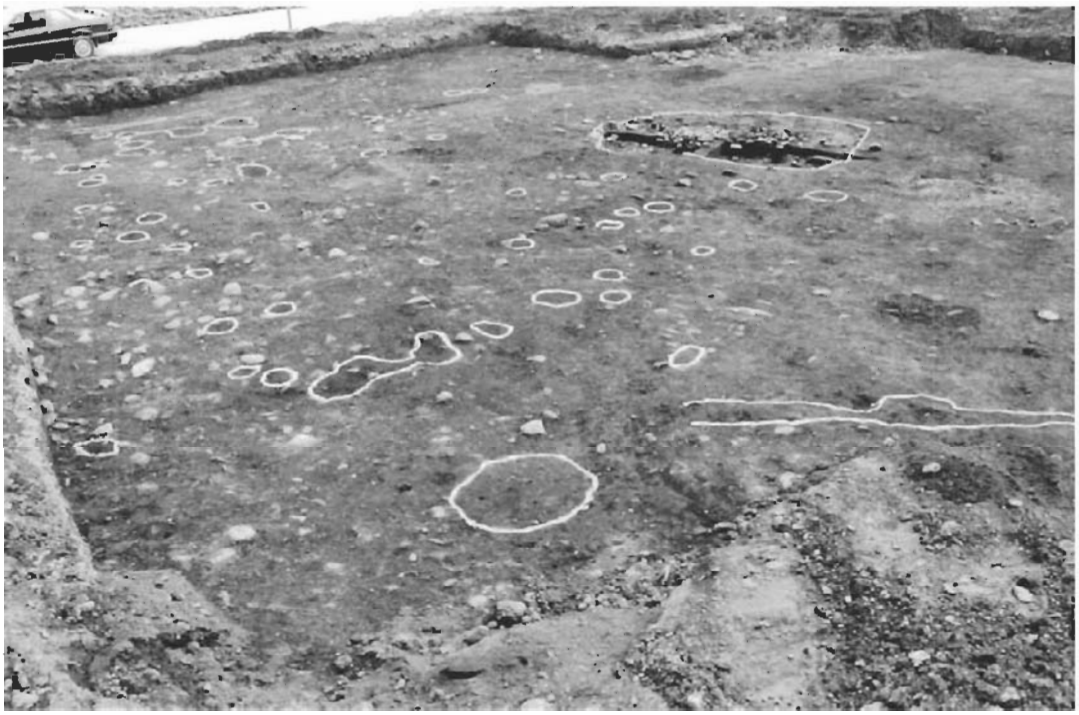
ST1 （右奥）・ST2（手前）完掘状況

B



SB1 完掘状況

A

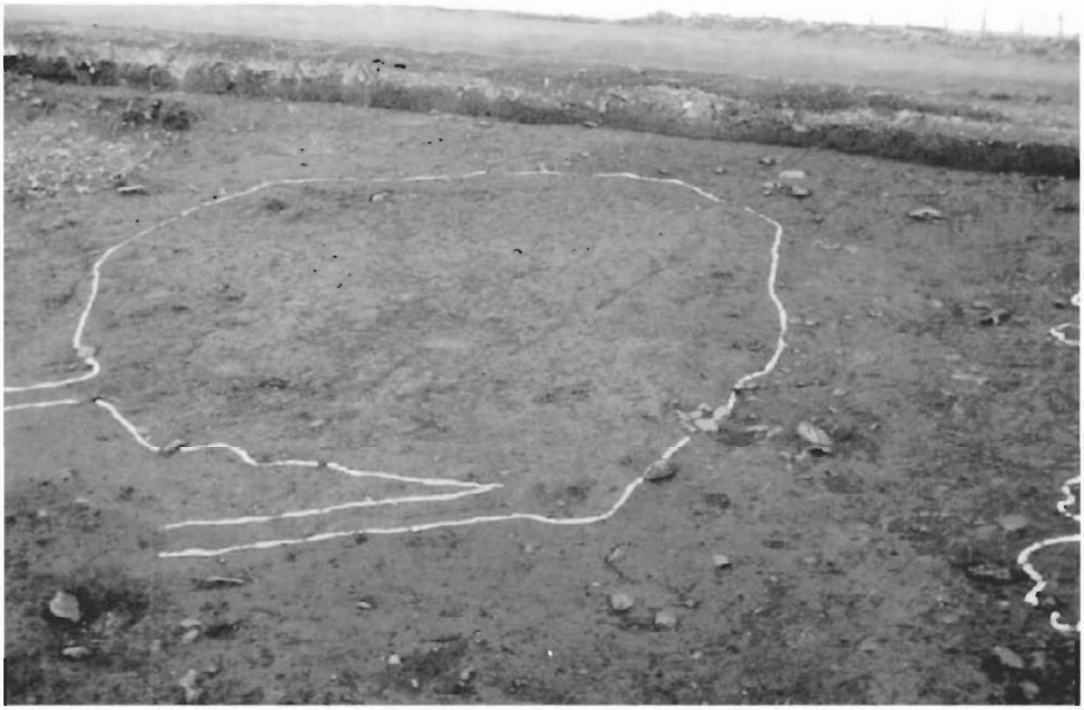


SB2・SB3　検出状況

B

SB2・SB3　完掘状況

A



ST3　検出状況

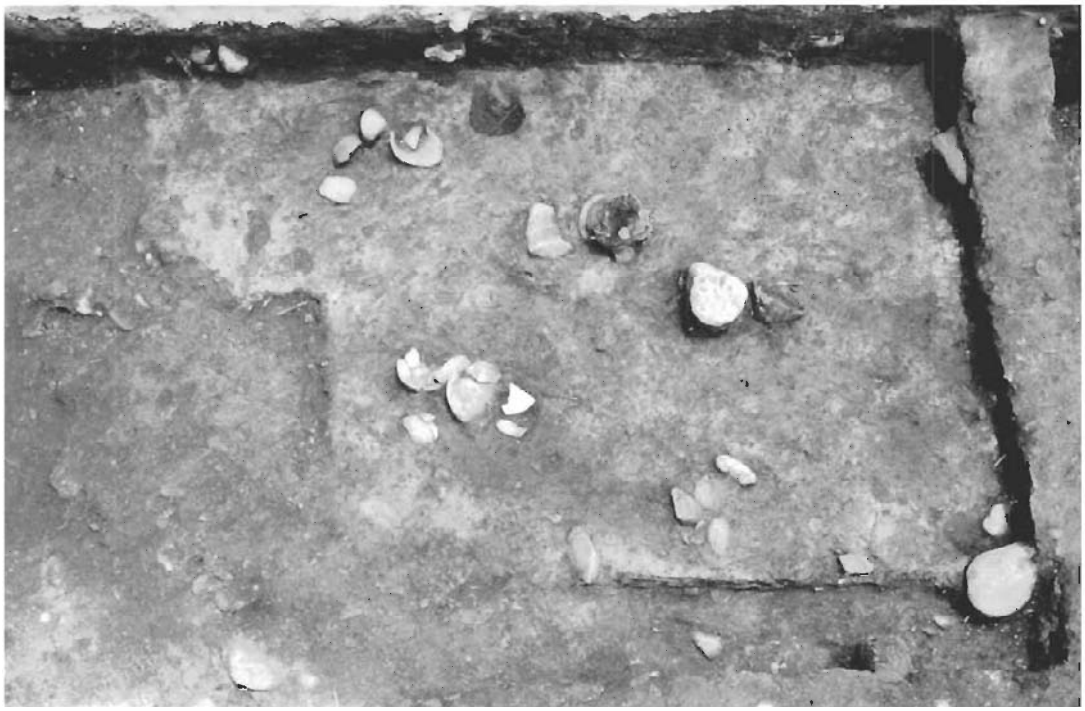
B

ST3　遺物出土状況

A

ST3　床面出土状況

B



ST4　床面出土状況

A

ST4　中央部セクション

B

調査区東半　完掘状況

A

調査区南東部遺構検出状況

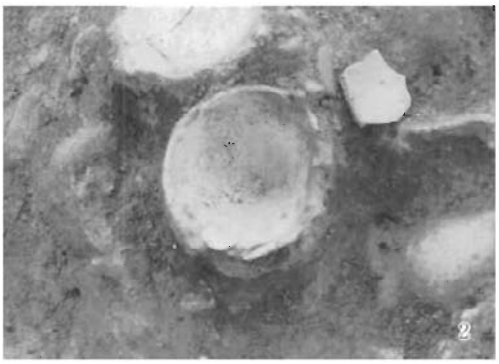
B

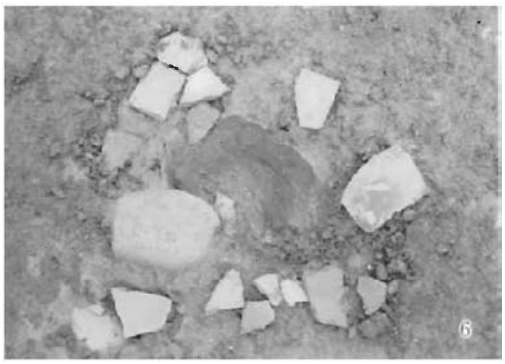
同　完掘状況

pl. 10

1 2

A





B

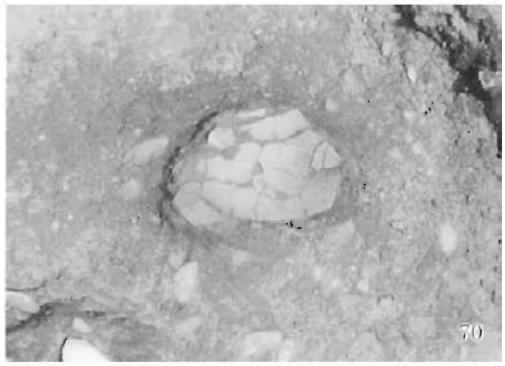
C

D

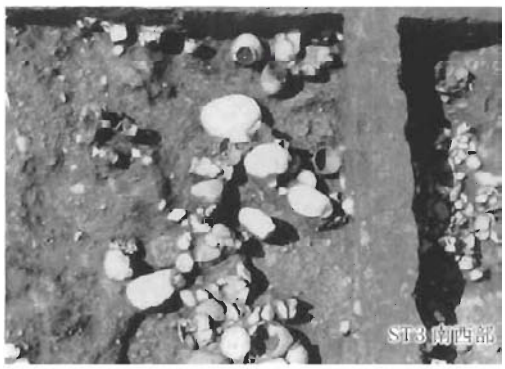
ST1・ST2　遺物出土状況

1 2

A



B



C

D

ST2・ST3　遺物出土状況

pl. 12

1 2

A

B

C

D

ST4　遺物出土状況・調査風景

1 2

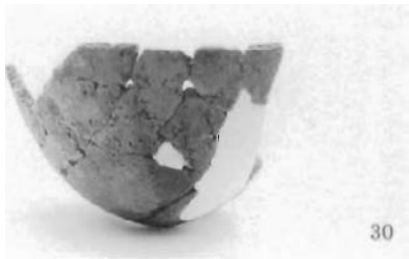
A

B

C

D

E

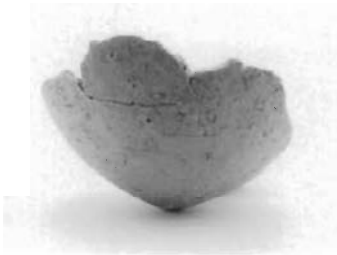


ST1・ST2　出土遺物　　0 10cm

pl. 14

1 2

A


31

32

B

33

34

C

35

36

D

37

38

E

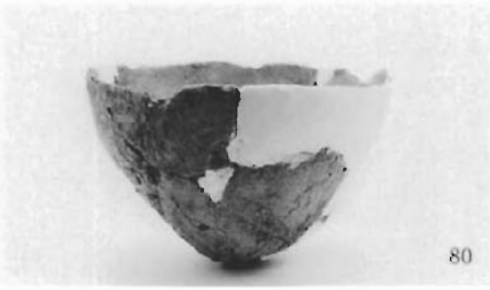
78

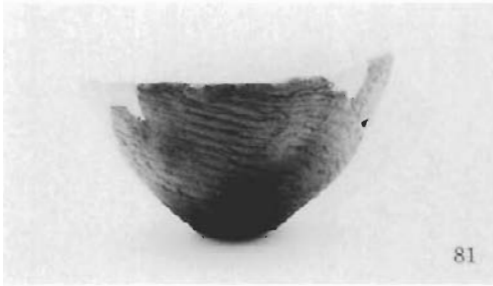
79

ST2・ST3　出土遺物　　0 10cm

1 2

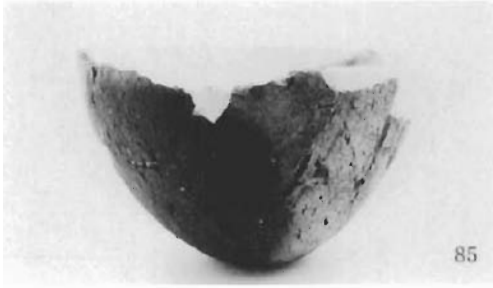
A





B

C



D

E

ST3　出土遺物　　0 10cm

pl. 16

1 2

A

B

C

D

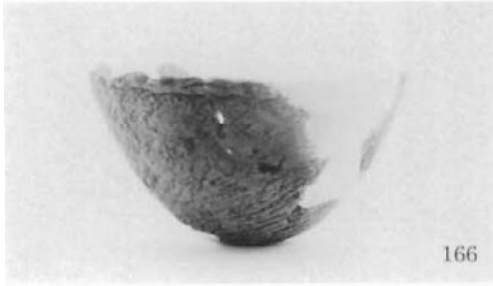
E

ST3　出土遺物　　0 10cm

1 2

A

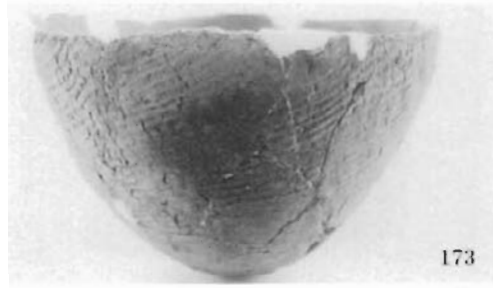
B



C

D

E



ST3・ST4　出土遺物　　0 10cm

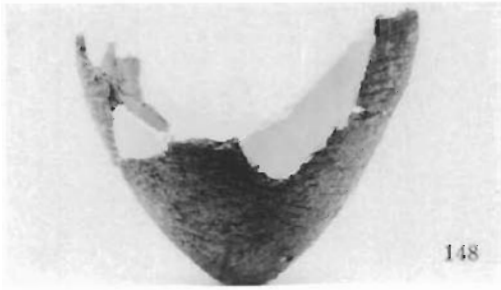
pl. 18

1 2

A

B

C



D

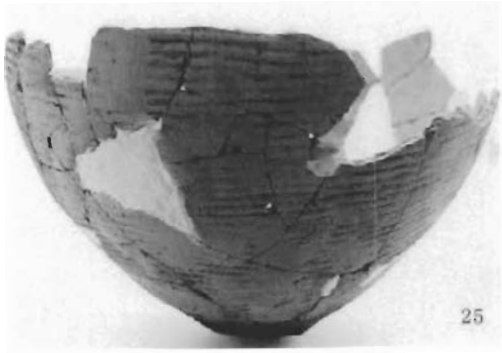
E

ST1～ST3　出土遺物　　0 10cm

1 2

A

16



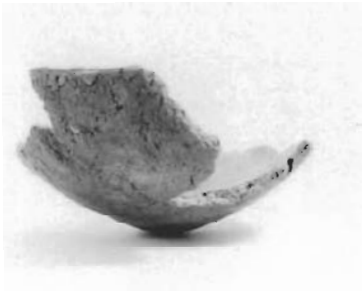
25

B

40

42

C



49

51

D

52

54

ST1・ST2　出土遺物　　0 10cm

pl. 20

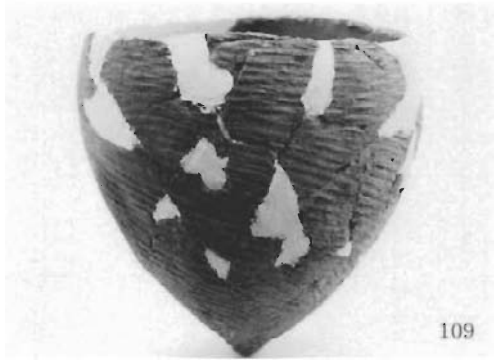
1 2

A

B

C

D

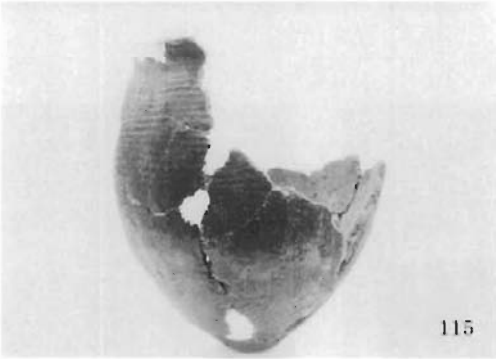


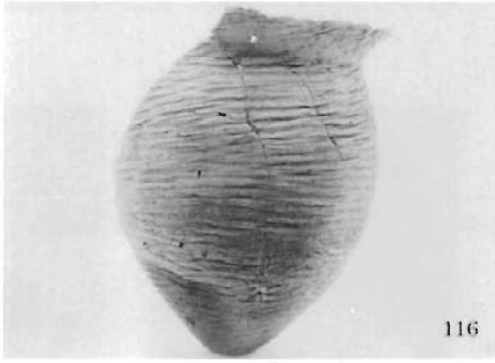
ST2・ST3　出土遺物　　0 10cm

1 2

A

B





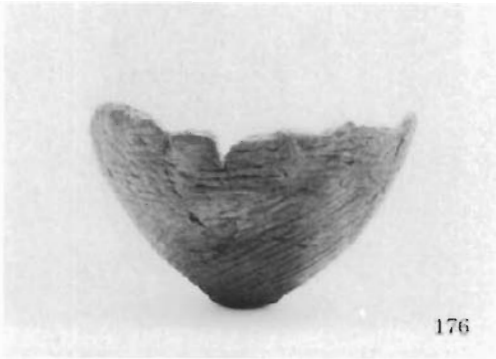
C

D

ST3・ST4　出土遺物　　0 10cm

1 2

A



1 2 3

B

0 10cm

C

ST2～ST4　出土遺物

0 10cm

1 2 3

A

B

C

ST3　出土遺物

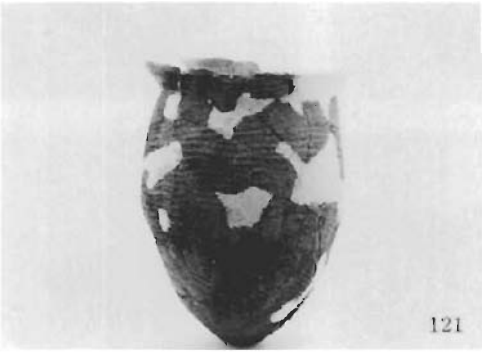
0 10cm

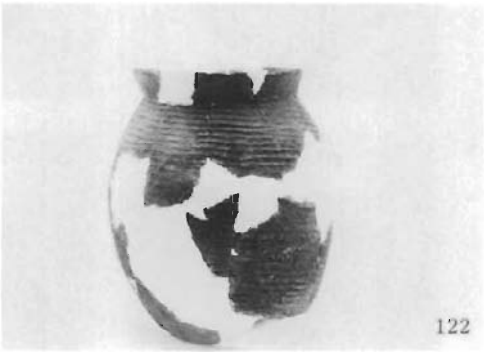
pl. 24

1 2

A

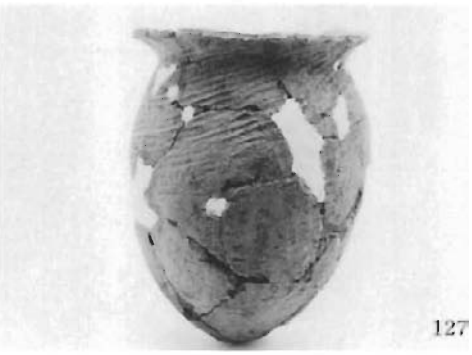
B





C

D



ST3　出土遺物　　0 10cm

1 2 3

A

10cm 0 10cm

1 2

B

C

ST3・ST4　出土遺物　　0 10cm

金 地 遺 跡 Ⅱ

（財）高知県文化財団　埋蔵文化財センター調査報告書第14集

1994年３月

編集　（財）高知県文化財団
　　埋蔵文化財センター
発行　高知県南国市篠原南泉1437－1
　　電話（0888)64－0671
印刷　西村謄写堂